

詩的表現の方法



kiramekikids



詩的表現の方法

「Beginning」について

『人間て何だろう

どうして僕は

ここにいるのだろう

それを考えると

僕は、何も分からなくなってしまう

きっと

神様だけが

知っているのかな・・・』

この詩は、

私が、10才の時

学校で書いた詩です。

もちろん授業中に書いて

先生に提出しました。

その後が大変でした・・・

なぜか、親が学校に呼ばれ

なぜか、その後

先生がチョコレートをくれました・・・

その時は、疑問だけが残りましたが

今、見直してみれば

子供が書いた詩にしてみれば

哲学的過ぎるのでしょうか

でも、題からもお分かりになるかと思いますが

これが、すべてのはじまり

もう少しいえば、第一のはじまりの時でした

この疑問に答えるべく

ある時は、本を読み

ある時は、話を聞き

ある時は、思索に耽り

悩み続けました・・・

それから

14年後に、主に出会うまで、

真理に出会うまで、

本当に苦しかった・・・

そんな

懐かしい、詩なのです・・・

「ゼロ」について

『自らの無能さに直面し

どうすることもできない自分に

今、目をそむけたくなるよ

これからどう生きる

十年間がんばってきたことが

ゼロになる

もう一度

旅立つ元気もどこかに忘れ

ふと、ため息をついてしまう

若者たちの熱い

主張を聞きながら

自分の中の情熱が

どこかにいって

しまったかのように

どうしても元気が

でてこない

さあ、どうするかと

元気のない自分がつぶやく

しかし

もう一人の自分がつぶやく

“明日はきっといい日になるよ

またゼロからはじめればいい”と』

この詩は

人生のなかで

とても苦しい時期に書きました

今まで、

自分が積み上げてきたものを

いったんゼロにしなければならなくなった

悲しい時期でした・・・

本当にもうだめかと

思いましたが

その時、

とてもシンプルな考えが浮かびました

それは、

「詩を書ければいいじゃない」

という単純な発想でした

それが、

いちばん自分が

やりたいことだったのだから

あれもこれもと

欲張り過ぎだったんだな・・・と

思えたら、

肩の力が抜けました

そして、詩を書き続けるためには

どうしたらいいのかということを

逆算して、活動を開始しようと

思えるようになったとき

ひとつの道が見えてきました

それは、やはり出口ではなく

入り口でした・・・

「ピカソが笑った日」について

『街を抜け出し湖に逃れ

降りしきる雨

白い息

冷たい手

失った明日

最後の気力を振り絞り

森の中に会いに行った

ピカソ

その作品の一つ一つが

笑っていた

単純な線に

力強い色

創造のエネルギーのきらめき

空を見上げた

雨は上がり

太陽はあたたかく

風は香り

花は誇っていた

ピカソが笑った日

新しい始まりの日

光に染まって

光に溶けた・・・』

この詩は、

挫折のさなか

明日を失い

創作に行き詰まり

途方に暮れ

気がついたら

箱根のピカソ展に

行っていた時

書いた詩です

行く前は、雨が降り

とても寒かったにも

かかわらず

ピカソの作品を

見ていると

雨が上がり

日の光が

暖かさを運んでいた

風は、私のなかに

希望を吹き込み

ピカソが笑っていた・・・

「俺の線を見よ

俺の色を見よ

俺のエネルギーを感じよ」と・・・

「君は、やさしいね」について

『歩くのが

やっとの疲れ果てた日

なぜか

人のやさしさが目にしみる

人間てやさしいね

自分がもう人に

与えるものがないとき

ある人がくれるやさしさ

そのやさしさが

傷口にふれるたび

その傷が治っていくようで

とてもあたたかい人のやさしさ

どんな薬よりも

人を良く治すやさしさ

人間ってやさしいね

今が、つらいときだから

本当にそう思う

君はやさしいね・・・』

自分がもうだめだ・・・

と思ったとき

誰かが、手をさしのべてくれたこと

ありませんか

それは、言葉であったり

それは、笑顔であったり

それは、眼差しであったり

人生のなかで

幾度か、それを感じた事がありました

まったく見ず知らずの

他人から

助けられたことさえありました

それを

思い出したとき

胸が温かくなります

心の傷が

本当に治ります

それが

奇跡だと

私は、思います・・・

「愛の輪は、地球の輝き」について

『ある時、神様は降り立った

沈黙の森に

ある時、神様は考えられた

あまりの静けさに

ある時、神様は命じた

鳥たちにさえずりを

風に口笛を

川にせせらぎを

森にぬくもりを

人間に神様をたたえる

うたを

さあうたおう

喜び分かち合うために

さあ語ろう

友情を示すために

いずれわかるだろう

その愛の輪が地球を

輝かすことを』

なぜ、人間は、言葉が

話せるのでしょうか

生命あるものたちは

何かを伝えようと

意志をもっているようにも

思えます

それは、

お互いを

支え合うため

お互いを

助け合うため

お互いを

愛し合うため

地球の原初のイメージを

メルヘンチックに思い描きながら

最初のあこがれに

詩のはじまりのおもいに

重ねられたらいいなと

ふと思ったとき

書いた詩です

『君は、だれ』について

『街を歩いている若者たち

みんなそれぞれのファッションを

楽しんでいる

ちゃんと自己主張して

女性たちは

美しさを競い合っている

そんな君はだれ

今まで君は何を考えてきたの

今、何を考えているの

明日からは何を考えていくの

君が考えていることが

君なんだ

君が思っていることが

君なんだ

君は君ではない

僕は本当の君が知りたいんだ

君はだれ?』

自分は、何なんだろう?

という問いのなかに

君は、何なのかという

問いも含まれているような気がして

この詩を書きました

外見ではなく

その心の奥の

本当のおもい……

自己主張ではなく

その気持ちの奥にある

おもい……

少なくとも

核なるおもいがあり

それが何かを

表現しているとすれば

その表現に

埋没しているおもいとは・・・

自分も

君も・・・

心に向かい

心に問う

本当は

誰なのか・・・と

『自由』について

『自由を求めて

走り続けている

走れば走るほど

何もわからなくなった

自由・・・

すべてを選ぶことができる

自由・・・

選ぶことによって

責任を取らねばならない

自由・・・

創造の自由

君は神様のように

何でも創ることが

許されている

心に浮かんだことを

書いてごらん

それは詩になる

人生を書き記してごらん

それは小説になる

心の調べを奏でてごらん

それは音楽になる

生きることに

工夫してごらん

それは発明になる

君は自由だ

心の自由は

誰にも奪うことはできない

だから

今すぐ飛び立つのだ

翼を広げて

大空に』

この詩は

豊富な選択のなかを

溺れそうな

私たちが

自由の意味を

今一度、考えられたら

いいなという思いを込めて

書きました

私たちは

幸福への自由

悟りへの自由

創造への自由を

もうすでに与えられています

そこへ行くのは

私たちがなのです

そう・・・

ここではない

どこかへ・・・

今の自分ではない

未来の自分へ・・・

『神様の微笑み』について

『神様は笑っている

僕は神様を

裏切ったかもしれないのに

神様は微笑んでいる

僕は世界で一番、

罪人かもしれないのに

神様はあったかい

僕は

約束を

守れなかったのに

神様は

照らしてくれている

僕は神の子としての道を

はずれてしまったのに

やがてはくるだろう

自分の過ちをつぐなうときが

その時はこころよく受けよう

自分が蒔いた種なのだから

その時はいさぎよく受けよう

自分が犯した罪なのだから

神様、ごめんなさい』

何も知らずに

他人を傷つけている

何も知らずに

道を外れてしまう

何も知らずに

自分を汚している

そんな

私たちを

生かしてくれている

消滅もさせず

裁きもせず

ただ、ただ待っている

そんな愛を感じたとき

書いた詩です

本当に『ごめんなさい』と

思えたら・・・

『愛を与えなさい』と

言って下さっているような

気がして・・・

私たちは

神様が

私たちを

許して下さいるが如く

私たちも

他の人を許していく・・・

この世で

罪を犯さなかった人は

一人もいないなら

やはり・・・

許してゆくしかない

どんなに

つらくても・・・

なぜなら

私たちは

すでに、許されているから・・・

『人生はメルヘン』について

『君の人生を一遍の詩にしてごらん

君の人生を映画のようにながめてごらん

そうしたら

君の人生は一遍の詩のように輝いてくるよ

君の人生は

美しい映画のように感動あふれるものとなるよ

だから

今の悲しみを深くつかまないで

だから

そんなに肩をおとさないで

すばらしい君の人生は

メルヘンのような愛ある物語

その瞳から零れ落ちる涙をふいて

笑ってごらん

君の人生は一遍の詩のように

美しい映画のように

愛あるメルヘンなのだから』

この詩は

夢の途中で

苦しんでいる人

諦めてしまおうかなと

思っている人に

捧げた詩です

自分の人生を

ゆっくり眺めてあげられるのは

自分と

そして・・・

神様しかいません・・・

遠くで

自分を

映画のように

自分を

観客のように

自分を

眺めて見てみれば

その苦しみは

その悲しみは

きっと

あなたに必要な

ドラマなのかもしれませんね・・・

もちろん

その主役は

あなたなのですよ・・・

『本当の君に出会うまで』について

『立ち向かう影におびえながら

いくど眠れぬ夜をかごしたことか

昼は背徳をつみ

夜はベッドで涙する

もう終わりにしようよ

本当の君はいいやつじゃないか

本当の君は優しいやつじゃないか

もういいから

素直になれよ

少しぐらい涙を見せてもかまわないから

君が本当の君に戻るまで

いつまでもそばにいてあげるから

幼いころ

見ていた空、あまい風、まぶしい緑、やさしい太陽

君の心に生き続ける本当の君

それが見つかるまで

そばにいるよ

約束するよ・・・』

集団の中にいると

その人のことは

わからない・・・

けれども

一対一で

会って、話をしてみれば

『そうなんだ、そう思っていたんだ』と

共感しあえる

不思議だけれど

どんな人だって

今まで、出会った人たちは

個人個人、とてもいい人でした。

本当は、

誰もが

全くの悪ではなく

いいところも

悪いところも

持ち合わせた存在ならば

一人なれば

本心を語るならば

この詩が

それを契機して

いい自分に気がついて

もらえたら

いいなという

おもいを込めて

書きました

お互い

意地を張るのを止めて

素直になれあえたら

いいですね・・・

『おつきさまのうた』について

『淡い光をなげかけ

やさしく輝く

暗闇のなか

真っ暗な夜も

美しい光に包み込む

光はまるく

光は変化する

表情ゆたかな

あなたの輝きは

恋する人を

詩人に変えてしまう

優美をつかさどる

あなたの輝きは

すべての人を

芸術家に変えてしまう

もし

あなたの輝きがなかったら

人類の歴史は

かわいたものと

なっていたでしょう・・・』

眠れぬ夜は

お月様を見て

淡い輝きに

包まれるのも

いいでしょう・・・

まだ見ぬ恋人に

焦がれて

空想に耽るのも

いいでしょう・・・

その時浮かんだ

言葉を書き留めて

詩にするのも

いいでしょう・・・

眠れぬ夜は

そんな

優雅さに

浸れたら・・・

とおもい

この詩を書きました

男と女

昼と夜

陽と陰

その差異は

芸術の主題でも

あります

その間に心が通えば

潤いあるものと

なるのでしょうか・・・ね

『よろこび』について

『ああ、心が倒れそうだ・・・』

夢を持ち続けることへの
不安・・・

結果だけがすべてと
夢見ることのよろこびを
失いかけている
失望・・・

求めることをやめ
握りこぶしをゆるめ
肩の力を抜いたとき

よろこびが
戻ってくる』

この詩は
明日なるであろう
自分を夢見ながら
思わず力が
入りすぎて
空回りして
落ち込んだとき
書いた詩です

努力、努力と
努力に囚われてしまい
ガチガチな心が
いくつもの壁に当り
へこんだとき

最初の気持ちに
思いを巡らせ
自分の中にある
おもいは、
目標を得たときの
よろこびだった・・・

それを
思い出したとき
肩の力が抜けました・・・

まだ、まだ
時々、力が入りすぎてしまうけれども
その時は、また
最初に戻ります・・・

『それが、愛』について

『愛があるから
すべてがはじまった

仲良く生きる、明るく生きる、
助け合って生きる
それが愛

傷つき倒れ行く人々
心疲れ果て
胸の痛みにもがく人々
見捨てない
それが愛

明日を失い
失望を歩く

夢を捨て去り
うつむいている

理想を忘れ
現実に滅びる

よみがえる心のなかに
ふたたび明かりを灯す希望
抱かせる
それが愛

愛を与える人
それが本当の愛』

愛について

答えは、出せません

けれども

親子の愛、男女の愛から

はじまって

本能的な部分から

離れ、そして

本人の意志にかかわりながら

全くの他人への愛に

言い換えれば

多くの人々への

糧の提供に心を注ぐ

行為・・・

そんな

愛を感じていただけたらいいなと

おもい、この詩を書きました

今の時代の愛の混乱のなか

愛という言葉には

信仰という言葉と同じ意味が込められ

それに、殉じた方々に思いを寄せる

きっかけに、

なればいいなと思います

『約束』について

『憶えていますか
あの約束・・・
誓い合った
あの約束・・・

見知らぬ男女が
ふと出会う
初めて会った気がしない

あるメロディーに涙をながす
ある言葉に胸を振るわせる
ある景色に懐かしさを感じる

君は
憶えているよね
あの約束を・・・』

ふと気になる人
初めてあったのに
ずいぶん前からの
知り合いのように
感じる人・・・

一緒にいると心が
安らぎを覚える人

もし、そんな人が
あなたの近くにいるとしたら
その人は
運命の人・・・

そんな身近な出会いに
気がついていただけたら・・・と
この詩を書きました

人間は、偶然に
この世に生まれては
来ません

あなたのそばにいる
大切な人は
過去からの約束で
姿を変え
名を変えて
ここに来ているのです

あなたが
今日出会う人は
約束した事さえ
忘れてしまった
大切な人かもしれませんね・・・

『仔猫』について

『生まれたばかり
寄り添っている
安心して
頼っている
地球の片隅で生きている

人間も同じ

みんなが生きている
人間だけが
生きているわけではない
当たり前？

忘れているよ・・・
当然のことでさえ』

冬の都会の片隅
パチンコ屋さんの裏の公園
そのベンチに座っていた
私は、ビルの排気口に
寄り添っている
猫の親子を見つけました

暖房のきいた室内で
ギャンブルに熱くなる人々
外では、
仔猫たちが
寒さと戦っている・・・
そんな光景を
何とも言えない気持ちを
詩に書きました

あ那时的猫たちの目を
未だに忘れることは
出来ません

私たちは、
本当に
このままで
いいのでしょうか

『心の中の君』について

『さわやかな風、白いブラウス
なびかせる黒髪、はにかんだ笑顔
春・・・

終わりを告げるチャイムの鐘の音
水のみ場へ汗を拭きながら、駆け足で水を飲み干す
夏・・・

そよ風の気配、木々のこずえ
茶色い落ち葉、黒い瞳
秋・・・

雪、舞い落ちる中
白いと息・・・肩寄せ合い
しっかりと抱きとめて
冬・・・

一瞬の美しさ、そのはかなさ、不安と苦悩とあやうさ
移ろい行く時間、すべてが変わっていく中で
変わらない
心のなかの君・・・』

初恋は、もう
心の中の記憶・・・
二度と訪れない日々

人生の日の出の時
黄金色に輝く日々・・・

色あせていく
心に・・・
色あせない

思い出・・・

心の中の君・・・

そんな思いを込めて
この詩を書きました

誰にでも
忘れられない人は
いると思います

その人の事を
考えると
その時の
純愛にも似た
清らかな気持ちに
戻れる・・・

忘れない
大切な宝もの・・・

『神様の涙』について

『ポタ ポタ
しずくが落ちている
かわいた心をいやすよう

ポタ ポタ
しずくが落ちている
愛のしずくが落ちている

それは神様の涙・・・
それは神様の悲しみ・・・

ポタ ポタ
しずくが落ちている
荒れ果てた
地球に
落ちてくる・・・』

人間たちの
横暴な振る舞いに
地球は耐えています・・・

地球は、よろこびと共に
生まれ
そして今、悲しみに暮れている

人間は、幸福になるために
生まれてきたはずなのに
今の人間同士が
作り上げたシステムは
人間を幸福にはしていない

そんな思いから
この詩を書きました

それを見ている
神様は、
きっと涙を流されている

その涙で
悲しみを
癒やそうと
慈愛の眼差しを
地球に向けている

その愛に
気づくか否かは
私たち
ひとり、ひとりに
かかっているとは
思いませんか・・・

『太陽のうた』について

『100億年の輝き
地上をあまねく照らす光

100億年の情熱
燃やし続ける愛の炎

100億年の希望
空を見上げ
人は歩み続ける

100億年のあたたかさ
あなたにくるまり
人は愛を思う

100億年の雄大さ
あなたを見て
人は神を想う

100億年の仕事
一日も休まず働いている

100億年の愛
いま
地上に降りそそぐ』

太陽を見て
その光を
そのエネルギーを
感じて
なんて凄いのだろうと
100億年ものあいだ

絶え間なく
輝き続けている
情熱・・・

心が沈んだ時
ふと見上げれば
いつだって
愛を放つものがある
という思いに浸り
この詩を書きました

私たちは
生きている間
色々な出来事に
力を取られ
暗くなってしまうけれども

でも、いつも輝き続けている
光りは
語りかけてきます

あなたの内にも
同じものが宿っていると
時折、雲がかかり
光りを遮るものがあるけれども
光り自体は
光り続けているのだから

その
遮るものを
つかみすぎては
いけませんよ・・・と

『地球のうた』について

『あなたの上で

飛び跳ねる子供たち

あなたは優しく待っている

あなたの上で

死んでいく子供たち

あなたは優しく抱いている

あなたの上を

汚す子供たち

あなたはじっと耐えている

あなたを

傷つける子供たち

あなたは涙を流している

あなたを

殺そうとする子供たち

愛ゆえに

教訓を与えることだろう

四十六億年のいとなみ

歴史の重さ

命の尊さ

地球は生きている・・・』

私たちは、
我が儘いっぱい
自分たちのことだけ
考えている

生かされていることの
意味さえ
考えない・・・

地球は
待っている
私たちが
気がつくことを

そんな感じを
込めて
この詩を書きました

地球の悲鳴は
大地を揺らし
私たちに
警告を与える

そして、
それを私たちは
教訓として受け止め
自分たち
ひとり、ひとりの意識を
変えていかなければ
きっと
地球から
見放されてしまうかも
しれませんね・・・

『友だち』について

『もし

君と僕が友だちだったら

考え方が違っていても

理解しようとするよね

もし

君と僕が友だちだったら

言葉が通じ合わなくても

心を通わせようとするよね

もし

君と僕が友だちだったら

違う土地に住んでいたとしても

そのいいところを

ほめあうよね

もし

君と僕が友だちだったら

たとえ、信じている神様が違っても

殺しあうことはしないよね

みんな

友だちだよ・・・』

人間同士の

長い間の

戦争状態・・・

今、平和なのか

と聞かれたら

「いいえ、停戦状態」

と答えるしかありません

パクス・アメリカーナ

アメリカの武力による平和

日本の平和は

沖縄の太平洋最大の

軍事基地によって

保たれています

これが、現実です

もし、沖縄の基地が

無くなれば

それは、想像に難くないはずです

地上から

戦争が無くなるまで

約300年かかるそうです

でも
諦めては、いけません

自分に出来ることを
していきたいと思います

それは、
私たちは
生まれ来たときは
誰とでも
笑い合えた
けれども
その後の思想、教育によって
ある刷り込みが
行われました

それを
解くのは
私たち自身です

それを
考えていただく
きっかけになればいいなと
思い
この詩を書きました

『すべては愛』について

『愛

それは砂漠の中のやさしい風

愛

それは砂漠の中のオアシス

渴ききった人々の歩みの中の

心を潤し

癒すもの

それは愛

すべては愛・・・

愛されたいという願望が

動機のすべて

地位も名誉も肩書きも・・・

でも・・・

欲しいと思っても貰えない

与えたら

自分のものになる

それが

愛・・・』

愛されたいという

願望・・・

それは、

人間の根源なる

欲求・・・

このために

人は

迷い・・・

苦しむ・・・

しかし

愛は

常に、ふたつの選択を

強いる・・・

与える側に立つか

奪う側に立つか・・・

この厳しさに

おののきながら

この詩を書きました

私も

常に自分を戒めます

賞賛を望むのか・・・

人に糧を
与えているのか・・・を

自分に返る思いを
想定するのか

他の人のよろこびを
自分のよろこびとするのか

この似て非なる思いに
混乱しないように

反省を旨として
気をつけている
日々です・・・

『みえないから・・・』について

『人と人
考えの違い

笑顔で人を欺く・・・
耳あたりの良い言葉でだます・・・

信じ合えない
許し合えない
分かり合えない

人は人に背を向け
自分は傷つきたくないから
人を傷つける

みえないから信じる
それが愛
みえないから伝える
それが愛の想い

伝えなければ
伝わらない・・・』

人の心は
見えません

愛も見えません

見えないもの信じる

それは
とてもエネルギーを

必要とします

時には

疑い・・・

時には

だまされ

時には

傷つく・・・

けれども

『信』の力は

人それぞれの

心の持ち方であり

人それぞれの

心の感じ方

それは

自分から

発している

でも

止めれば

それで

終わる・・・

だから

信じるのです

そんな

気持ちに

添えたくって

この詩を書きました

私は

信じています

見えない心を・・・

見えない愛を・・・

『主の涙』について

『愛がふたたびよみがえる

人の胸に

愛がふたたびよみがえる

人の心に

愛がふたたびよみがえる

人と人との間に

愛はふたたびよみがえる

愛がふたたび生まれ

愛が育ち

広がっていく

人々はいつか気づくはず

この時代が

愛の時代であったと

この時代に愛がよみがえったと

それは主が

人類を哀れんだ

涙が

愛であったと・・・』

今の時代の特徴は
リーダーが
いないということです

日本も含めて
世界も・・・

だから
方途なき旅人のように
どこへ行けばいいのか
分からずに
さまようのです・・・

モラルは
崩壊し
大人たちは
自分の都合のいいように
欲望に身をまかせ
子供たちは
その犠牲になり
自分を探せないでいる・・・

そんな
人間たちを
見かねて
主は涙を流された・・・

時代の要請・・・

悲しみの要請・・・

そんな
思いを込めて
この詩を書きました

一人一人が
心の声に
耳を傾けて欲しいです

『愛は太陽』について

『愛は量れない

愛は見えない

愛は光・・・

太陽のように
すべての人にやさしく
すべての人に平等に
すべての人に惜しみなく
照らす光

愛は太陽のような輝き』

昔から
幾度となく
言われた言葉・・・

使い古されることもなく
人々の信仰の対象としての
太陽

人々は
崇め
人々は
畏れ
人々は
拝む

その輝きに
その暖かさに

その力に・・・

その太陽の
凄さに恐れ入りながら
この詩を書きました

言い尽くすことは
出来ないけれど
やはり
あまねく照らす
光りの前に
愛のような光りに
心は
書き留めたく
思ってしまう・・・

日の本の国
太陽の昇る国に
生まれたからには・・・

『手を伸ばせば』について

『無明のなかを人はゆく

孤独 . . .

心の中の不安

未完成 . . .

平凡な日常をおそう

虚無感 . . .

どうすることもできない叫び

届かない . . .

求めよ

あの方に . . .

手を伸ばせば

握り返す

方がいる . . . 』

拒否しているのは

仏神ではなく
人間ですよ・・・と
言いたくて
この詩を書きました

いろいろな苦難
いろいろな困難
悲しみ・・・

それは、
もとなるものと
離れている
無明から
起こっている・・・

光りが
ないから
暗闇でつまづく・・・

光りが
ないから
手探りで
歩き
道を過つ・・・

でも
その時
求めれば

純粹に
求めれば

あなたのもとに
思えばすぐ
あなたを
支えに来てくださる

でも・・・
求めなければ
やはり・・・

気がつくまで
待っている・・・

そばで
共に
涙を流している・・・

見えない
世界の真実・・・

『終止符を打つ前に』について

『夢を終わらせる前に

立ち止まれ

考えるのをやめる前に

振り向け

青春を排除する前に

思い出せ

それが

人類を支えてきた

精神であることを

歴史を変えてきた

営みであることを

終止符を打つ前に

生きろ

ここに来た意味が

明らかになる』

もうすぐ
掘りあてそうな水源

あと少し進めば
水が湧いてくるのに・・・
そんな思いを込めて
この詩を書きました

昔・・・
こんな話を
聞いたことがあります

天国には
宛てのないプレゼントが
山積みになっていて
『どうして、行く宛てがないのですか?』
と聞くと
『祈って、願ったのに
諦めちゃったから・・・』と

ひょっとして
私たちは
願いが叶いそうなのに
いつも、もう無理だと
自分で決めつけている
だけかもしれませんね・・・

『笑顔』について

『朝、犬を散歩させている人
犬がとてもかわいくって
思わず笑う
その人も笑う

電車の中
赤ちゃんを抱いているお母さん
赤ちゃんがとてもかわいくって
車両にいる人みんな笑う

車道に飛び出した犬
車にひかれてしまう
ピッピッピッと車を止める
おまわりさん
みんなほっと安堵の笑顔

一つ一つの小さな出来事が
人と人をつないでゆく
お互い何も知らないけれど
分かり合える瞬間の
笑顔・・・』

一瞬の共感・・・
その短い時間のなか
他人同士が
ひとつになるとき

なんの垣根も境もなくなる
心と心がひとつになる

実際の経験をもとにして
この詩を書きました

この日常の宝石は
すれちがう一時の笑顔

今日も
一日、いいことがあると
信じて・・・
はじめましょう

『あなたがいる』について

『あなたがいる

同じ時代を生きている

あなたがいる

同じ時間を生きている

あなたがいる

会うことのできる喜びよ

あなたは希望であり

世界の明かりであり

あなたこそ愛の根源である

あなたが愛

あなたこそ愛

あなたがいる

それが

愛・・・』

それが愛であり
奇跡でもある・・・

できれば
今、日本に生まれている
すべての人に
気付いて欲しい・・・

この法の現場に
立ち会っていることを

東洋文明と西洋文明の
合流地点

ムーとアトランティスの
合流地点

それが
極東の小さな島国に
起きている出来事・・・

主よ
人の望みの喜びよ

あなたが
願い
その願いが
成就した

人類の希望が
今、この日本に起きている
ことの意味・・・

もし、その約束を
反古にしてしまうなら
その後悔に
涙を流す前に
もう一度
生まれた意味を
自分自身に問うて欲しい

『あなたは
なぜ、
この日本に生まれたのか』

『歩みのなかの美』について

『道に迷った

また、歩き続ける

生まれ変わった

遠回りをしたけれど

花は散る

惜しまない

また咲こうとする

美しさ

そこに

永遠を見る・・・』

潔さ・・・

その精神の

純粹性に美を

見つけたとき

この詩を書きました

時折

少女が見せる
一途さ

時折
中年の人が見せる
決断・・・

どちらも
自分を顧みず
誰かのために
身を引く決意・・・

けれども
あきらめない
されども
また、前を向き
歩いていく
ひたむきさ・・・

その行為に
美を見つける

自分も
そうありたいと
あこがれつつ・・・

『命の水』について

『日本の片隅に

とてもきれいに水がわいている

その水は命輝かす水

味わった人にしかわからない

飲んで見なければわからない

数千年もの間

水がわいてくることなんか

なかったから

信じている人はとても少ない

でも

それを飲めば

魂が輝くのに・・・』

それが

魂の真実です

この
水を飲み干すために
この地に生まれ

この水を
渴いている人に
分け与えるために
生きる

『あなたのくれた
井戸の水は
やがて渴くが
私の命の言葉は
永遠に
渴くことは
ない』と
言われた方の
ことは、忘れ去られて
しまったけれども

この日本の地に
新しい水が
湧いていることを
お知らせしたく
この詩を書きました

願わくば
多くの人々が
心の渴きを癒やし
本来の
魂の輝きを
取り戻して欲しいと
祈りつつ・・・

『終わりのときに』について

『誰もが

やがて、ステージを降りる

舞台上でお金持ちの役を

演じている人も

貧乏な役を演じている人も

身分の高い役もあれば低い役もある

ただそれだけ・・・

時間が来れば

舞台は終わる

必ず終わる

そのとき

本来の自分に戻るのだ

誰も避けられない

人生の終わりのときに・・・』

なぜ
こんなに不公平なんだ
と嘆く方は
多いと思います

最初から
生まれた瞬間から
違いすぎると

けれども
人それぞれの
違った環境
違ったドラマ

それこそ
私たちの魂を
鍛えるには
もってこいの舞台なのです

そうです
私たちは
第一義的には
自分の魂の修行として
この地に
生まれてくるのです

自分の魂にとって
いちばん勉強になる
環境、境遇を
自らの意志によって
選んで来たのです

生まれる前
『もう一度、ゼロから
やり直し、必ず

また、ここに返ってくるから』と
天国の友人たちの約束を
胸に秘めて・・・

そんな気持ちを
思い出していただけたら
いいなと思い
この詩を書きました

友人たちは
姿なき声で
応援しています

それは
まるで・・・
舞台を見ている
観客のように・・・

『わかりあおう』について

『悲しみがひとつ、

苦しみがひとつ

きっとわかりあえる

どんな人生にも

どんな人にも

何度かふりかかる・・・

悲しみが無い人なんて

いない

苦しみが無い人なんて

いない

その人の現れている部分が

すべてではない

みんな

見えない部分で

同じように

悲しみや苦しみを

抱えて生きているのだから・・・』

昔、お釈迦様が

子供を亡くしたばかりで

何日も嘆き悲しんでいる

女性に

「悲しみが無い

家族がいるか探してご覧なさい」と

言って、その女性に

悲しみの無い人を

探しに行かせました・・・

すると

どこにも

悲しみの無い人は

居ませんでした・・・

どの家族も

どの人も

大切な人を亡くしていたり

別れたり・・・

だれもが

例外なく

悲しみを抱えて生きていました

そんな

お話を聞いて

この詩を書きました

自分だけが

悲しいのではない

他の人も

悲しいめにあっている・・・

そう考えられたら
自分だけ
いつまでも悲しんでられない

別れは、別れとして
受け入れていかなければ・・・

現実を直視して
生きるとは

愛する人と別れ
嫌な人と会い
欲しいものは手に入らず
欲望が燃え、抑えきれず

生まれる苦しみ
老いる苦しみ
病気になる苦しみ
死ぬ苦しみ・・・

四苦八苦からは
逃れられない宿命・・・

しかし
智慧で
悟りの力で
本来ある仏性を
顕現させることによって
自分自らを救える力を
人間は
持っている

そう教えられている
気がいたします・・・

2600年前から

人の心の悩みは

そう変わらないのですね

『愛を蒔く人』について

『あなたは荒野に降り立った

草木一本生えていない

その風景に驚きもせず

悲しみの笑みを浮かべながら

大きな袋を取り出し

一粒一粒丁寧に種を蒔き始めた

愛の種を

潤いのない渴いた大地を

あなたの涙がぬらし

種は

芽を出した

あなたは

非難罵倒のなかでも

黙々と蒔き続けた

愛の種

やがては必ず地球をおおう

そう信じて・・・』

『愛し合いなさい』
と命をかけた言葉・・・

その言葉を
守れない私たち・・・

争いは
止むことがない・・・

国どうしも
社会も
会社も
学校も
家庭も
人間の闘争は
続いている・・・

けれども
諦めてはいけない

自分の出来ることのなかに
きっと明日を変えていく
ものがあると
と信じて・・・

あなたが
私たちを愛してくださったように
私も愛してゆきたいと
願いつつ・・・
この詩を書きました

『情熱』について

『達成されない結果

得られない評価

かなえられない望み

夢と現実

そして・・・

悩み

置き換えてみる

情熱という言葉に

そのとたん

悩みは消え

前進するよろこびに

あふれていく

炎のような情熱が

すべての悩みを

燃やす』

悩みを打ち消す・・・
それは、更なる努力する
情熱・・・

そんな
熱い思いを込めて
この詩を書きました

悩んで
立ち止まって
くよくよして
時間を浪費するよりも

前へ進もうという
思いを努力に
変える・・・

それは、
自分を理想に
近づける熱意に
他ならない・・・

今の自分に
満足して
虚しくなるのなら

高い理想を掲げ
それに向かって
情熱を燃やす・・・

いつのまにか
高い理想が
自分を押し上げ
悩んでいた悩みが
小さく見えて

小石のようになり
やがて、点になり
消えていく・・・

その過程が
自分を
成長させると
信じています・・・

『花束』について

『信じる力

届ける思い

言葉ひとつひとつが

花だとしたら

詩は

花束・・・

心から言葉へ

言葉から心へ

人はパンのみに

生きるにあらず・・・』

命の言葉は

決して、渴かない・・・

人は、

神の言葉により

命を輝かす・・・

2000年前の
聖者の言葉は
時を超えて
私たちの胸を
貫きます・・・

この言葉は
後から来た
私たちへの
贈り物・・・

私たちへの
花束・・・

そんな
感慨に耽って
この詩を書きました

私も
自分の受け取った
花束を
詩に託して
届けてゆけたら
いいな・・・と思って
詩を書き
発表しています

『守られている』について

『夢から覚めて涙を流す

枕が涙でぬれている

暗闇の中

独りぼっちだと嘆く叫び

そばにいる・・・

困難という砂漠を

ひとり歩いている

振り返ると

足跡が二つ

背負って下さっている・・・

朝の光

ため息をつく

ひとりだけの寂しさ

ふりそそいでいる・・・

ひとりではない

決して・・・

ひとりではない・・・』

あのとき私は
困難のなかで
苦しんでいました
それなのに

あなたは
私から離れていた
私を見捨てたのです
だって
足跡が一人分しかありません・・・

『ちがう・・・
あのとき
私は、あなたを
背負っていたのだよ・・・』

これは
私の記憶が正しければ
聖書のなかの挿話のひとつだそうです

神と人間の
おもいは
いつも
人間の勝手な思いこみのなかに
埋没してしまう・・・

人間が
神を信じ切れない
悲劇・・・

その人間を
背負っている
愛・・・

それを
詩に書きました

私たちは
いつも
そんな愛に
気づかずに
勝手な判断を下している

神を試し
神を疑い
神を憎み
神のせいにする

けれども
変わらず
私たちを
慈しんでいる

時折
想いを巡らしてみても
ああ、あのとき
きっと
私を背負って下さっていた
と気づくのも
私たちの
義務かもしれませんね・・・

『人類の理想』について

『進歩と調和

宇宙を貫く法則

その中に咲く花

理想 . . .

それを目指して

幾星霜 . . .

この地球に

悲しみがなくなるまで

咲け

幸福という名の花よ

人類の理想よ

咲き誇れ

地球という星が

銀河の誉れとなるように』

大きなテーマですが
やはり、個人個人から
出発して
大きな輪にしていくしか
ありませんね

ひとりひとりが
このことを思い描き
そして、努力していく
その輪を広げようと
行動していくこと
自分の出来ることを
自分の出来る範囲で

先ず
私が、あなたが
個人として
幸せになり
そして
他を利する

自分の幸せが
他人の幸福に
結びついてゆくなかに
実現していく

そんな
願いを込めて
この詩を書きました

ひとりひとりの
小さな心から
出発して
やがて大きな輪となる
地球を包むほどに・・・

『戦え』について

『他人と戦うのではなく

自分と戦え

他人と争うのではなく

昨日の自分と争え

向上するとは

永遠に自分と戦うこと

自分はまだいい

自分は十分にやった

自分をほめる

甘い誘惑・・・

敗北の瞬間

永遠に戦うのだ』

自分との戦い

永遠の戦い

自分の怠け心と

慢心との戦い

他人との比較ではなく
魔境は自分の中にあり
自分の心が呼び寄せる

常に
自分の思いと行いを
反省し修正して
自分の位置を
正すこと

そんな思いを込めて
この詩を書きました

自分を
惑わすものは
外からではなく
内から
自分の中から
甘くささやくから・・・

『アキラメナイ』について

『すべてかゼロか

成功か失敗か

勝利か敗北か

張りすぎた弦は

必ず切れる

一はゼロではない

流した汗は無駄にはならない

人生の階段は

一段ずつしか上がれない

人は一躍、悟ることはできない

階段を飛び越すことはできない

少しずつ

一歩ずつ・・・』

原因、条件、結果、報い

この流れは
はずすことは
出来ません・・・

種があり
土に植え
水と光りと養分
そとて花が咲き
実を結ぶ・・・

そんな当たり前のことを
詩に書きました

私たちは、皆
それぞれの種を
持っています
でも・・・
水をやり
光りを浴びて
養分を吸収しなければ
花は咲かない・・・

ひとりひとりが
自分に花の咲く条件を
自分自身に与えてあげなければ
種のまま・・・

そんなの
もったいない・・・

そんな願いを
込めつつ・・・

『明日を変えるために』について

『幸福になりたいのなら

種を蒔こうよ

悪にみちているのなら

善を蒔こうよ

矛盾だらけなら

正義を蒔こうよ

汚れきっているのなら

美しさを蒔こうよ

小さな苗が

やがて木になり森になる

だから

時間がかかっても気にしない

明日を変えたいのだったら

種を蒔こうよ』

明日を変えたいと思うなら
自分の出来ることを
行いましょう

どんな小さな事でも
かまわないから・・・

他人を変える前に
自分を・・・

世の中を変えたいと
嘆く前に
身近なところから

よい原因を
蒔き続けましょう

きっと
あなたのまわりから
光りがあふれ
幸せが
実を結ぶから・・・

『チャンス』について

『他人の言葉に左右され

何が本当で何がうそなのか

それを見極める力を失い

考えるのをやめ

答えなどないと

自分を無くしてしまうのか

すべての迷いは

弱い自分が作り出している

影にしかすぎない

目をそらしてはいけない

影も見て

光りも見て

光り増やし

影をなくし

光りを道しるべとし

自分を知る

チャンスとする』

迷い、悩み・・・
生きているうちは
時折、襲ってくる
心の高波・・・

けれども
追い風の際は
風を感じないように

迷いも悩みも
向かい風のように
その存在を示す

まるで
自分の影が
明らかになるように・・・

逆に
それを利用する

逆に
それを自分を知る
手がかりとする

すると
自分の心の傾向が
はっきりとわかり
自分の悩みのパターンが
見えてくる

それが

自分の心のスタイルを
創り

それが
自分の弱い部分と
なっている

気がついてみると
同じようなことで
悩んでいることが
多くありませんか

私も
そのひとりです . . .

だから
自分を発見する
チャンスとして
思えるように
この詩を書きました . . .

『待つ愛・・・』について

『失望、悲しみ、

絶望、拒絶・・・

この思い止められない

深い深い闇が

自分を飲み込むかのように

すべてが

色あせてしまう

すべてが

意味のないことに思えてしまう

すべてが

つまらなく感じてしまう

しかし、

いくら拒絶しようとも

消えていく幻を

信じたとしても

闇を受け止めていたとしても

ひたすら待っている

愛もある・・・』

仏は、地獄をも
その掌の中で
消滅もさせず
支えていると言います

それは、なぜでしょうか

ひとりひとりが
間違いを犯すこともある

他人を傷つけることもある

また、自分をも傷つけて
自暴自棄なるひともいる・・・

けれども
どんな、間違いを犯したとしても
自分自ら反省し
涙を流し
もう一度、やり直したいと
立ち直る瞬間を
ひたすら待ち続けている・・・

そんな
大きな愛を
感じてもらいたくって
この詩を書きました

私たちは

大きな愛に
包まれています

わたしも
あなたも

『自分の内に・・・』について

『戦う相手を

間違えてはいけない

相手は外にはなく

内にあるのだから

戦う相手を

間違えてはいけない

相手は他の人ではなく

弱い自分の心なのだから

戦う相手を間違えてはいけない

憎むべきものを

十字架に架けるのではなく

やすきにつく自分を

十字架に架けるのだ

外ばかり見ていてはいけない

他人のせいにばかりしてはいけない

立ち向かう相手は

自分の内に

心の中にあるのだから』

結局は

自分の内の出来事・・・

自分のまわりで起こる事象も

自分がどう思うかに

かかっている・・・

悲観的にとるか

楽観的にとるか

心の糧としてとるか

自分を責めているととるか

自分の内で逡巡している・・・

自分の弱さが露呈している

だけど、その弱さを認めなければ

何かにすり替えるだけになってしまう

恐怖を克服するには

自分が恐怖していることを

認識することだという

弱さを克服するなら

自分の弱さを知る必要があると

そんな、思いから
この詩を書きました

私も、弱さを幻想とすり替えそうになる
欲求と常に、戦っています

きっと、永遠に続くのでしょう・・・

だから
気を弛めず
無理をせず・・・
自分を創っていきたいと
考えています・・・

『最初に思いし、原初の美しさ』について

『ひとを愛する

ひとを信じる

ひとと共に歩む

それは

失ってはならない

大切な心

その心を守る

どんなことがあろうとも

自分という存在をかけて

守るべきもの

いつかわかる

それは

間違っていなかったと

喜びに満たされる日が

必ず来る

最初に思いし

原初の美しさ

そのおもいを

守る・・・』

魂の憧憬・・・

それを頼りに

人は、失ってはならない

心を見つけ守る・・・

自分の内にある

微かな記憶を頼りに・・・

それが

やがては

動かざる

真実と信じて・・・

これは、

私たちに

課せられた

懸けでもあるのかもしれない

そんな

思いを込めて

この詩を書きました

あなたの

心のなかにもある

微かな記憶を
呼び覚まして
いただければ
幸いです

『上を向けば』について

『自分自身の弱さを

他人のせいに置き換え

ほんとうの自分を

見失ったまま

生きていく方を選ぶつもりなのか

夢を持つ重さより

夢を失う軽さを選ぶつもりなのか

最初の感動を忘れたまま

それは幻だったと

自分自身を説得する方を選ぶつもりなのか

複雑すぎる人生の間で

迷うのは仕方がないことだけれども

北極星はいつも北にあるし

太陽は東から昇る

足もとの困難は

顔を上げさえすれば

単なる幻に過ぎない

遠い道程だけれども

顔を上げ光を浴びることだよ

下を向けば

いろいろな影が見える

上を向けば

そこには太陽が輝いている』

とりあえず、上を向こうよ
そんな気持ちを込めて
この詩を書きました

光明思想的な発想で
影ではなく光りに
自分をあわせていく
過程で、悩みを
消滅させる方法を
詩のなかに提示してみました

複雑過ぎて
シンプルな発想が
疲れてしまったとき
とても効果があるように
思います・・・

弱点を克服する方法も
大切だとは、思いますが
疲れて、それもだめなとき

上を向くだけで
星を眺めたり
太陽の光りを浴びたり
雲と一緒に流れたり
心を上昇させて
悩みが、小さいものに
なればいいなと
願いを込めつつ・・・

『太陽の音』について

『何を信じているのか』

テレビか

新聞か

雑誌か

自分自身のなかの

あふれる思い

尊い光り

知っていた

ほんとうは

知っていた

人類と共にあり

その

最初にあるもの

雑音を消し

目を閉じよ

太陽の音が

聞こえてくるまで・・・』

ときには、テレビを消して
自分の心臓の音を聞いてみる

ときには、朝早く起きて
太陽の昇るのを眺めてみる

ときには、静寂のなか
心の声を聞いてみる

すると
太陽の音が聞こえてくるよ

そんな
祈りを込めて
この詩を書きました

自分のなかにある
尊さに
気づいていただけたら
幸いです・・・

『宝のありか』について

『わからないという大海を

航海している

わからないからといって

航海をしないのなら

生きる意味を失ってしまう

今からでも遅くはない

放っておいた心の地図を広げ

航海に出る

未知なる発明や発見

本当の自分との出会い・・・

それが

宝のありか』

本当に

わからないこと

読んでいない

本

行ったことない
ところ

知らない
人

．．．．

そんな
わからないを
あきらめないで
少しずつ
解き明かしていく

それが
生きる楽しみ．．．

『人生と創造』について

『自分を創っていこうと

決めたとき

生は始まった

しかし、

最初の思いは閉ざされ

いつしか

何も知ろうとせず

何も創ろうとせず

放置された魂は

悲鳴をあげ

心にこだましている

だから

ため息をつく

虚しくなる

涙がこみ上げ

悲しみが頬をつたう

人生は自己創造のプロセス

魂の本来の願いを

聞き入れ

自己を構築していくことと

生きる意味とは

同じと受け入れるならば

自分を発見したと

胸を張れる』

何か、いいことない？

何か、楽しいことない？

そう聞かれることが

よくあります

その答えが

この詩です・・・

人生は、苦です・・・

とお釈迦様は言いました

ただ、悟りによって

乗り越えられるとも

言いました

生きることは、
そのままであれば
とても苦しいはずですが

男性であれば
老い、病気・・・

女性であれば
醜、老いて
若さを失い
男性から、対象外に
されてしまう・・・

男女問わず
その現実を
突きつけられるはずですが

それを
乗り越えていくのは
自己を構築し
自己を創造していくこと

自由は、
その創造性に
起因しているものでも
あると思うのです・・・

もし、今
虚しいと
苦しいと
心が感じているのなら
自己を創造してみても
いかがでしょうか

自分をデザインすることは
生涯の楽しみになると

私は、思います・・・

『光りの文字』について

『流しっぱなし

たれ流し

氾濫した情報は

思考を停止させるには

十分だ

考える力は

日に日に衰え

反応するか

自分を失うか

自分を騙し続けるか

自分に嘘はつけまい

心は・・・

知っているのに

濁りのない

清らかな真実は

誠心誠意の言葉で語られ

心に響くはず

思い出せ

心に刻みし

光りの文字を・・・』

私たちは、
生まれる前・・・
ある約束をしてきました

それは、この日本に
生まれた意味と密接に
つながっています・・・

信じるかどうかは、別としても
確かに、心の中にうずくものが
あるはずです

今の日本は
食べるだけなら
困りません

生きていくこと自体は
さほど困難ではありません

それは、この地が
祝福を受け
新たなる時代の息吹が
新たなる枠組みが
次なる千年のはじまりが

この地から来るとのこと
今、その瞬間に立ち会っているということ

そんな気持ちを込めて
この詩を書きました

繁栄は
夏のように
いろいろなものを
繁させます

しかし、私たちは
見誤っては、いけません

その時代の果実を・・・・

『緑の風』について

『湧き上がってくる

自分の中の確かなもの

それを

見ることができないから

恐れを感じている

自分の中の

真実の扉

それを開けることを

恐れている

立ち止まり

ゆく影におびえ

それは実在しないにもかかわらず

その影に苦悩するのは

だれ・・・

風が香りを運び

胸躍らせる

春の到来は

冬のさなかに・・・

凍結した心

錆びた扉

緑の風が吹き抜けていくとき

冷え切った頬を撫でていくとき

振り返れば

それが愛であったと・・・

風の願いに

すべてがあったと・・・』

風が吹くと

詩になる

緑の風が

吹き抜けていくと

愛になる・・・

そんな気持ちを込めた

詩です・・・

その時

接していた人達に

送ったメッセージでした

今は、もう会うことはないけれど
確かな自分を発見できていれば
いいなと願っています

悩み、苦しみ

夢を語っていた・・・

私は、詩を書いていることを

馬鹿にされながらも

いつか、必ず

あなたの心が

必要とする言葉を

書き残していたかった・・・

そんな・・・

いろいろな

思いが入っている詩です

もう、二十数年たって

しまったけれども

私の思いは変わらず・・・

書き続けています・・・

『ありのままに』について

『自分を偉く見せて

苦しんでいる

自分の知識は

自分の悩みを解決しない

笑っている悲しみは

見栄で

こわばっている

自分は自分

自分は知っている・・・』

悲しみは、自分を
素直に戻してくれます

虚飾で偽った自分を
本来の自分の姿に
戻してもくれます・・・

私たちは、
いつのまにか

自分以上に自分を見せ

それに、疲れ

それに、悩む・・・

けれども

自分は知っています

それは、自分ではないことを

そんなとき

涙が溢れて

その嘘を洗い流してくれている

そのときにこそ

偽りのない自分に

出会うチャンスでもある

そんな思いを込めて

この詩を書きました・・・

私たちは、

背伸びをしたとき

背伸びし続けることに

疲れ倒れる・・・

その前に

ありのままの自分を

見つめていく必要があると

私は、思います・・・

なぜなら

その状態

背伸びをし

自分を必要以上に

飾った状態は

自分を偽る行為だから・・・

自分を裏切る行為だから・・・

『さびしい街で』について

『きれいなネオン

その下の

汚い欲望

今を忘れたくって

未来を吐き出す

自分を失った分の

やさしさを

お金で買おうとして

もがいている・・・

さびしい者どうしが

得るものは

愛に似た

嘘・・・』

誰もが、さびしいのです

あなただけでは、ありません・・・

誰もが孤独なのです
あなただけでは、ありません・・・

それは、遠い遠い昔
一なるものから、わかれた
無数の魂達の
叫びにも似た悲鳴・・・

帰るところがわからず
悩む姿に・・・
主は、涙を流され
愛を教えた・・・

本当の愛は
あなた自身が
さびしい魂達を
癒やす行為のなかに・・・

そんな思いを込めて
この詩を書きました・・・

愛に似た
うそは、
悲しみがともなうのが
証拠・・・

愛に似た
うそは、
虚しさに
心がきしむのが
証拠・・・

あなたが
真に
愛を与えたなら

よろこびが
ともなうのが
証拠 . . .

『愛のかたち』について

『昨日があった

今日がある

明日がある

そんな、一日一日は

神様からのプレゼント

神様から与えられた

一日一日

黄金の時間

一人一人に

与えられている

愛のかたち・・・』

もし、神様が

いたとして

その神様が

私たちのために

与えてくださったものを

考えてみるならば

その一つが
時間ではないかと
考えます・・・

私たちは
時間の流れの中で
活動していきます

時がたてば
忘れることが出来る
悲しみもあります

時間の経過によって
癒やされることもあります

また、その時間を使って
自分を高めたり
夢を実現したり・・・

毎日が
当たり前のように
やってくることだって
奇跡のような
ことなのかもしれませんね・・・・・・

『永遠の青春』について

『『希望、それは翼あるもの』

その詩を創った女の子の名は

人々の記憶から消えてしまった

けれども

その、言葉の響きは永遠に消えない

人の心にある

明日を夢見る希望が

永遠の青春

人は、老いて死ぬ

遅れて来る者たちに

残せるものがあるとすれば

それは、

人それぞれの生きざま

明日を変えていくための

情熱・・・

それが、

時代を経て

永遠の青春として

受け継がれていく』

『希望、それは翼あるもの』は

『希望は 心の奥の

翼あるもの

言葉のない歌を歌い

止むこともなく』

でした・・・

たぶん、この詩が浮かんだとき

この言葉が浮かび

でも、ちょっと違っていた・・・

よくあることなので

ごめんなさい・・・

この詩を創った女の子は

エミリ・ディキンソン

女の子と言ったら失礼かもしれませんが

言葉の若さに敬意を表したと

思ってください・・・

生涯、あまり外出もせず

一生独身を通した

孤独であり、心のなかに

たくさんの友を持った女性

もし、機会があれば

触れて欲しい

詩人のひとりです

言葉の美しさ

目の覚めるような

鋭さ . . .

信仰の深さ

そして強さ . . .

今では

巡り会うことの出来そうもない

純潔

あこがれます . . .

『感謝』について

『この服は自分では

作れない

目の前の食事は

その原料が

どこから運ばれてきたかなんて

知りもしない

いろいろな人の手を通して

いろいろな努力があって

今がある

自分だけでは

決して存在できない

それが

人間・・・だよ

見知らぬ誰かに

ありがとう・・・』

当たり前ではない
今があるのは
誰かの努力の結晶
そんな気持ちを
いつまでも忘れないで
いれたら・・・と思い
この詩を書きました

今がある
あなたがいる
私がいて
今日もブログを
書いている・・・

こんな機会にも
感謝していきたいです・・・

二十数年前には
誰にも読んで
もらえなかった言葉たち・・・
よかったね・・・

そして
読んで下さった方に
ありがとう・・・

『春』について

『漆黒は
夜明けのしるし

孤独は
夢がかなう前の
序曲

別れは
新たな出会いの痛み

日はまた昇り
冬は終わる・・・』

永遠とも感じる
苦悩の日々
けれども
必ず終わりはあります

人生の途上に
現れては、消えていく
悲しみ・・・

終わりがいいような
長い時・・・
そんな思いを
払拭したくって
この詩を書きました

私は、いつも
長くても半年・・・
そう思って

自分を励ましています

今がつらいのは
魂が鍛えられている証拠

自分の弱い部分が
強くなっている
証 . . .

そして、必ず
日は昇り
春は、来る

誰の心にも . . .

『諸行無常』について

『ああ、

この喜びを

胸に抱きしめて

止めてしまいたいほど

狂おしい・・・

過ぎてゆく

はかなさに

悲しみをおぼえ

やがて・・・

夢のような

ひとときの幻に

思い出となる

時を止めてしまいたいほどの

悲しみに

無常の風が吹き抜ける

思い出の残り香が

時折、胸を突き抜ける

痛みだけが

泡のかけらの証しとなる』

もし、あなたが今
幸せで、何も変わらず
このまま時を止めてしまいたい
と思いながらも
なぜか、少し、
幸せすぎて怖いくらいと
思うなら・・・

諸行無常という
言葉を思い出して
いただけたらと思い
この詩を書きました

昔、どこかで習ったか
聞いたかした
言葉・・・
とても重い響き

しかし、すべての人は、
例外なく
この流れのなかにいる

だからこそ
この世の栄華は
むなしくなる

心の幸せは
決して壊れない

この世に
立脚した幸せだから
脆く壊れやすい

だから
得体の知れない
恐怖が時折
襲ってくるのではないのでしょうか

それを
テーマにした
文学作品は
人の世の
移り変わりを
もの悲しく
詩っています・・・

怖いくらいの
幸せと思うなかに
諸行無常という
真理が隠されており
その現実
夢の幻と感じてしまう
リアリズム・・・

時間とは
なんと残酷な一面を
持っているものなのではないのでしょうか・・・・

『少年の日』について

『少年の日

見ていた空、白い雲

ゆっくり、ゆっくり

流れていた

時間・・・

変わってしまった

人と街

過ぎてしまった

心と雲・・・

空の青

透き通ったまま

昔も今も

変わらずに・・・』

空と雲は

変わらずに・・・

街は変化し

自分も
変わってしまった・・・

空は
変わらずに
青く・・・

雲は
白い・・・

けれども
自分は
変わり果ててしまった・・・

そんな
時の流れに
ふと、気がついてみると
こんなところまで
来てしまっている自分・・・

そんな
悲しみの情景を
詩に書いてみました・・・

いつのまにか
社会通念に
どっぷりとつかり
失ってしまった心を
空と雲に
求めても・・・
もう、戻れない
あの日々・・・

ここまで来て
あの時の
大切さを
一瞬、一刻の大切さを

痛切に感じる

今日この頃です . . .

『未来』について

『過ぎた過去

変えられぬ出来事

今も過去になるなら

手に届く未来は

今にあるなら

過去を変えてゆくのは

今にあるなら

ただ今の時を

どうしてゆくかにあるなら

今に懸ける

この時に・・・』

未だ来ない

時間・・・

未来が

どうなるか

なんて、

私たちの

心が決める・・・こと

過去は
変えられないけれど
過去をどう考えるかで
今の気持ちを
変えることができる

今の気持ちが
変われば
過去の出来事も
違ったものと見えるはず

そして
未来も・・・

今を
この瞬間を
変えることによって
努力することによって
未来を
自分のものとする

そう信じて
この詩を書きました

あなたも
私も・・・
未だ来ぬ
時を・・・
今の、この時の力で
夢の通りに
変えてゆく

心の力を信じて・・・

『誘惑』について

『悩みは

弱さを呼び込む

迷いは

甘い言葉をおびき寄せる

悩みと迷いが

ひとつとなるとき

自分を失い

主体性を無くす

心は甘い言葉に売られ

その代償は

悲しみで支払われる

甘い麻薬は

時間をむしばみ

人生を

浪費させ

残る負債は

後悔のみ・・・』

人間は、

時々、考える

自分とは、何なのか

自分は、どうして

ここにいるのか・・・

そして、答えが出ず

考えるのを止めてしまう・・・

考えるのが、億劫になり

答えが出ないから悩む・・・

悩みとは

心の分裂・・・

二者択一の悲劇・・・

そして迷い

迷った状態で

行い、苦しみをつくる・・・

これが仏教で言う

業のはじまり・・・を

詩に書いてみました・・・

では、その原因となるものは

いったい何か・・・

それは、無明

智慧無き状態・・・

そうです

真理を学び
智慧を得れば
苦は消える

私たちは
狭い、自分のなかだけで
答えを出そうと思うけれど
過去の偉人達は
答えを残していてくれる

それを
私たちが
学びさえすれば
おのずと
光りに満たされる

日々、謙虚に
学びを深めていく

私は、その行為自体が
とても好きです

独り座し
過去の偉大な先生達が
講義を下される・・・

それは、私にとって
かけがいのない
よろこびです・・・

『愛、共通語』について

『言葉が通じ合わなくても

通じ合うものがある

まったく生きてきた

環境が違って

分かり合えるものがある

肌の色が違ってたって

理解し合うことができる

いくら主義主張が

違ってたって

超えられる

宗教が別々だって

そこに流れている

一筋の愛・・・

その共通語を頼りに

ひとつになれる』

世界が
バラバラになろうとしている今
自国の利益だけを優先
させようとしている今・・・

もう一度、
最初の思いを
思い出して
そして、あの方が
言われたように
お互いを
理解し、生かし、許し・・・
そして、愛す・・・

胸襟を開き
敵ではないことを
幾度も語り
友情を示す・・・

そんな、人間同士の
根本を踏まえて
色々な国々が
争いのない
世界を理想として
いてくれたらいいなど
思い、この詩を書きました・・・

私たちは
また、血を流し
悲しみの後悔を
涙で洗う・・・
お互いの不信感は
そこまできている
気がします・・・

もう一度
原点にもどって
血を流せば
必ず悲しむ人が
いるのだから

せめて
過去に学び
幻想を捨て
現実に目を向け
着実に時間をかけて
愛という言葉の意味を
冷静に受け止めて
いただけることを
願いつつ

『愛ゆえに・・・』について

『地球は24時間で回る

月は暗黒を照らし

太陽は無限の時間を

輝いている

なぜ、

地球があり

月があり

太陽があるのか

太陽系があり

銀河系があり

宇宙があるのか

なぜ、

植物があり

動物がいて

人間が生きているのか

海があり

山があり

空があり

地があるのか

それら生かしている

愛があるから・・・

大きな仏の愛ゆえに

すべては存在を

許されている・・・』

あなたも、私も
その存在を許されている

ここにいていいと
いわれている・・・

その最高の存在たるものから
許しを得ている・・・

悩む必要は、ありません
なぜ、生まれ、
どうしてここにいるのか
と問うことも大事ですが

ここにいることを
よしとされている・・・

それだけで
いいでは、ありませんか・・・

心が重く、苦しいのなら
そう考えてみませんか・・・

そんな気持ちを込めて
この詩を書きました

あなたの
心がかかるくすることを
願いつつ・・・

『言葉』について

『ふとした言葉が

胸に突き刺さる

思いがけない言葉が

笑顔を殺す

取り返しのつかない

言葉 . . .

血を流す心

人は言葉にて

傷つき、悲しみ

救われ、希望を抱く

時には、

喜びの絶頂から

たった一言で

失意の底まで

落ちてゆく

言葉・・・』

何気ない一言・・・
軽い気持ちの冗談・・・

けれども
その相手は
バカにされたと思って
傷ついている

顔には
出さないけれど
落ち込んでいる・・・

ホントにそうなのかなと
考え込んでいる・・・

たった一言なのに
一日中、抜けないトゲ

ひょっとしたら
一生忘れられない
人もいる・・・

言葉の重み・・・

そんなことを
思い描きながら
この詩を書きました・・・

仏教では
うそついては、いけません
相手の悪口を言ってはいけません

ほめすぎて、相手を墮落させてはいけません
二枚舌で、相手を仲違いさせてはいけません
という言葉に関する戒律があります・・・

もし、現代人に適応させたら
きっと大変な事になってしまうかもしれませんね

みんな、何も喋れなく
なってしまうかもしれませんね・・・

本当に
言葉は難しい・・・

私もいつも悩み
そして考え
いいのかな・・・と
思いながら
このブログを書いています・・・

『心の庭に』 について

『幸福は

自分の家の

裏庭にあると

言った人がいた

世界中、

いろいろなところに

行って

いろいろな経験をしたって

自分を知らなければ

何にもならないと

言った人がいた

たとえ、

何千冊、何万冊の本を

読んだところで

心が清らかにならなければ

徒労に終わると

言った人がいた

成功したって

不幸な人がいる

大金持ちなのに

心貧しい人がいる

心の中の

宝・・・

それは、

外にはないのに・・・』

心を豊かにし

心のなかの幸福を

高めていくなかに

生きていく意味を

見いだせれば

心が安らかになるのでは・・・

という思いを込めて

この詩を書きました

とても身近にある

幸福の種・・・

それを

見つけれないのを

他人のせいにしては

いけません・・・

環境を呪っても

いけません

自分に

見つけられる力が

あるのに

嘆いては、いけません

時々、疲れてしまうけれど

その時こそ

自分の近くにある

幸福の種を

探してみませんか・・・

きっと

あるはずです

あなたの心のなかに・・・

『人と人との間に』について

『言葉は人を生かす

言葉は人を殺す

美しい言葉は

天国を創る

汚い言葉は

地獄を創る

愛を語れば

愛が広がり

憎しみを語れば

憎しみが広がり

夢を語れば

世界は明るくなり

失望を語れば

世界は暗くなる

人と人の間に

行き交う言葉

その間が

何になるかは

言葉しだい・・・』

言葉によって

左右される人間関係・・・

親しい仲でも

たった一言で

取り返しのつかない

溝を作ってしまうこともある

不用意な

軽い気持ちの一言が

相手を重い気持ちに

させてしまう・・・

本当に難しい

言葉・・・

そんな気持ちの時に

この詩を書きました・・・

こんなことを

考えていると

何も話せなくなって

しまいそうですが

勇気を出して

相手に思いを

伝えていたらと

思いつつ・・・

いつも、言葉と格闘しています

『前進』について

『罪人は

どこへ行く

深い底へ

落ちていく

自分自らの

心の重さゆえに

もし、生きていて

やり直したいと

素直に思えるのなら

勇気を持って

犯した過ち以上の

愛を与えてゆくしかない

知らず知らずに

他人を傷つけているのが

人間ならば

それ以上の愛を

与えてゆくしか

前には進めない』

この詩は
自分への戒めであり
自分の生きる指針として
書きました

生きている以上
人と関わっている以上
無知な部分が多いから
知らないうちに
他人を傷つけている

自分の振るまい
自分の言葉によって・・・

けれども
それに、押しつぶされるよりも
知らないうちに
他人を傷つけているのなら
愛を与えていく

愛を貰いたいという
気持ちが出てきたら
愛を与えなきゃと
自分に言い聞かせる

なぜなら
ホントに
知らないうちに
そんなつもりでもないのに

他人を
傷つけてしまっている・・・
ならば
そう思って
前に進んでいくしかない
と私は、考えます・・・

『太陽の光り』について

『太陽の光りは

愛の思い

どんなものに遮断されたって

暖かさを伝える

太陽の光りは

生きる情熱

夢見るものの

暖かき輝き

光りと影が

交差するこの世界

いくら闇深くとも

光りで消えぬ

闇はなし

光りよ

光り . . .

伝わってゆけ

光りよ

光り・・・

広がってゆけ

地球に

不幸と悲しみが

なくなる、

その日まで・・・』

太陽は

いつも輝いている

当たり前のことだけれど

すごい・・・

太陽が顔を出せば

闇は消える

闇は、積極的に

存在するものではなく

光りの不在・・・

光りが灯れば

その瞬間

姿を消す・・・

太陽の力は

愛の力 . . .

すべてを
育む大きな光り . . .

太陽を思いながら
この詩を書きました

また、同じテーマで
書くこともあるでしょう . . .

それでも
あの巨大な光りに
過去の人々が
畏怖していたのが
何となく、分かるような
気がします . . .

あの光りが
天空に輝いているとき
人は、その眩しさに
目を細め、頭を垂れる . . .

その自然な行為を
忘れたくないものですね . . .

『太陽のしずく』について

『太陽のしずく

あなたの心に

落ちてくる

太陽のしずく

悲しみを

癒すために

人を人として

目覚めさせるために

落ちてくる

人類が、

待ちに待った希望

あれほど待望し

あれほど願い

あれほど祈った

喜びなのに・・・

なぜ、・・・

どうして、・・・

あなたは、

招かれているのに

扉は開かれているのに

・・・』

すべての人に

説かれている真理・・・

それについて

その人が拒否してしまうなら

それまで・・・

けれども

絶え間なくそそがれている

今、その時だと

私は、信じています・・・

そんな

思いを込めて

この詩を書きました

ひとりでも

その愛に

気がついていただたら

いいなあという

願いを祈りにかえて・・・

『無限の戦い』について

『真実の鏡は

自分を

映し出す

見たくない

目をそむけても

心の鏡は

閉じられない

勇気を出して

顔を上げて

目をあけて

日々、戦って

生きてゆく

一日一日を・・・』

本当は、自分が自分を

よく知っている・・・

自分の行ったすべてを・・・

自分には、うそはつけません

ごまかすことは出来ます

けれども

必ず呵責をおこします・・・

それは、本来備わっている

人間の良心が

それを見ているから・・・

そこから

目を背けては

いけません

苦しいのは

その心が悲鳴を

あげているからなのです

自分に正直に生きることは

とても、勇気の要ることだと

思います・・・

それを確かめつつ

今日を乗り切って

いけたら・・・と思い

この詩を書きました・・・

時には、

ひとり、自分の鏡を

見つめて

その真実と

向き合う勇気を

持てたら

いいですね

『愛の河』について

『人は生まれ

そして死ぬ

誰も時間を

止めることはできない

しかし、

その源流は

確かに愛である

愛そのものである

愛は流れ

すべてを変化させていくが

変化しないものも

あらわにする

変わっていくなかにおいて

変わらない真実を

明らかにする

大いなる流れ

大いなる河

愛の河・・・』

主は

愛です・・・

その創造の動機は

愛です

その念動で

すべてを

創られた・・・

その中で

変わりゆくものと

変わらずに

在るものを

見分けるために

時間を

創り、空間を

創られた

一堂に会した

私たちは

何が正しくて

何が正しくないか

高貴なるものと

そうでないもの

清らかなるものと

そうでないもの

美しいものと

そうでないもの
それらを
手探りのまま
この場は玉石混合の
状態のなか

魂の記憶を
頼りに
進んでいる・・・

時には
悪が勢力を増し
善が減びるかに
見えることもあるでしょう

けれども
愛は
あきらかにします

主の願いを

そう信じて
この詩を書きました・・・

いつか必ず
あなたの善が
伝わることを
祈ります・・・

『架け橋』について

『憎しみが渦巻く

この街で

人は

憎しみから

逃れられずにいる

欲望が渦巻く

この街で

人は欲望の

虜となっていく

国々は争い、

人々はいがみ合い

愛を抹殺する

人と人、心と心

それを結ぶ橋は

信じることと

愛でてきている

まず

人の良心を信じて

そして

愛を与える

一人一人ができること

そこからはじめていく

やがては

地球に

大きな大きな架け橋が

築かれていく』

お互い

理解できないから

不信に陥り

争い合う・・・

その繰り返しの

歴史ならば

どこかで

止めなければ

また、新たな争いが

始まる・・・

国家も個人も
心が強張り
不信の渦・・・

そして
血が流れ
悲しみが残る

その悲しみは
時が経つと
憎しみに変わり
また、悲しみを呼ぶ・・・

この繰り返しを
絶つためには
こう考えるしかない
『恨み心では、恨みは解けない』

そんなことを
考えながら
この詩を書きました

いつか
人と人の間に
信頼が戻り
国々が
理解し合う日が
来ることを
祈りつつ・・・

停戦ではなく
平和を

対立ではなく
愛を・・・

『共有』について

『自分以外、

すべて敵だということか

自分以外、

みんな間違っているということか

自分以外、

誰も信じられないということか

人間は自分ひとりでは

決して生きられない

宇宙があり

銀河があり

太陽系があり

地球がある

その小さい小さい一部分が

人間なんだ

人間を生きしめる愛があり

それを

共有しあうのが

人間同士なんだ

宇宙の源流から流れ来る愛を

自分だけという思いが

せき止めてしまう

自分だけという思いが

その愛を拒否し

自分を滅ぼしてしまう・・・』

愛について

考えるとき

どうしても

逃れられないものとして

愛されていないと

思うときがあります

そんなとき

こう考えられたら

きっと・・・

その思いから

離れられるのでは

という気持ちを込めて

この詩を書きました

人間は

不思議と

自分だけのことを考えていると

苦しくなるものですね・・・

けれども

不思議と

他の人の為と

考え行動しているときは

自分がという自我が

なくなっている・・・

そのときは

なぜか

清々しいですね・・・

そこに

愛を考えるための

ヒントが隠されているような

気がします・・・

『鎖を断ち切れ』について

『悲しみが

憎しみを生み

憎しみが

戦いに導き

また、悲しみが

生まれる・・・

何千年と続けてきた

繰り返してきた・・・

何も学ばず

犯す過ち・・・

断ち切らなければ

ここで終わらせなければ

誰かが

許さなければ

お互いが

愛し合わなければ

悲しみと憎しみの

鎖は、つながり

続けてしまう・・・』

私も罪を犯す人間

なのだから

他の人の罪も許す

許していく

そう決意することによって

乗り越えていこうとする意志

にかかっている気がします

そんな思いを込めて

この詩を書きました

頭にくることもある

腑が煮えくりかえる

こともある

けれども

そのとき、私は

呪文のように

心のなかで

次の言葉を復唱します

『主が私を許して下さるがごとく

私も他の人々を許します』

三回ぐらい唱えていると

不思議と心が落ち着いてきます

憎しみや怒りの感情は

その念を向けた人も
痛みを受けますが
自分自身にも返ってきます

作用が在れば反作用もある
自分の心も肉体も
痛んでいってしまう・・・

だから
鎖を断ち切るためには
自分から
許すしかありません・・・

私は、そう考えます・・・

『心に届くもの』について

『炎のような熱い理想

心のうちにある

確かな情熱

それが

人を人とする

真っ直ぐな気持ち

心のうちにある

うそのない誠実さ

それが

人を人とする

人間として生まれ

欲望のままに生き

人間としての可能性を

消滅させ

獣に成り下がる人

生かされていること

それに感謝し

間違ってしまったら

素直に謝り

日々自分を創っていく人

人として人になろうという努力

その汗の光りが

人の心に届き

人類を揺さぶってきた

真に進化させてきた

見えざるバトン・・・』

自助努力の精神

「天は、自ら助ける人を
助ける」という精神・・・

この精神が

近代の日本

そして

大英帝国・イギリスを

創ったという・・・

今、忘れ去られようとしている

この精神こそ

この日本に

日本人に必要な
マインドではないのか
という思いを込めて
この詩を書きました

歴史に名を残した人
また、無名のまま
その時代の礎になっていった人
それぞれが
この精神の基
ひとつの大きな時代の精神として
国力を高めた
英雄でありましょう

今の日本の政治的問題も
私たちひとり一人の
こうした自助努力で
解決でない問題は
ないと考えます

誰かに
何かして貰おうと
思うのではなく
私たちに
何ができるのかを
問うことが
とても大切な精神なのではないかと
私は、考えます・・・

『心の輝き』について

『人間が生きている

この世界には

確かなものなどありはしない

目に映るものは

すべて変化していく

物事はとどまることをしらず

移り変わってゆく

この変化してやまない

世界の中で

変わらないものは

目に映らない

真実の確かさ

人の心の中にある

高貴な輝き

何千年も変わらずに

人の心の中に

咲いている・・・』

真理は、
変わらない・・・

何千年もの間
そこにあるもの

愛し合うこと
生かし合うこと
許し合うこと

知らないことを
知ろうする努力

自分が
間違っていたら
反省し
素直に謝り
やり直すこと

愛を広げること
発展させること

変わらない
心の輝き・・・

誰の心にもある
高貴な光り

それを
あらわすか
どうかは

あなたの選択次第・・・

完全なる自由を
与えられた
私たちの一人ひとりの
決断・・・

もし、迷っているのなら
自分が幸福になる道を
選んで欲しいという
思いを込めて
この詩を書きました・・・

選択の自由は
重いけれども
決断するのは
つらいことなのかも
しれないけれど・・・

自己責任の原則は
宇宙を貫いている・・・

せめて
生きている間に
心の輝きを
取り戻せたら
いいですね・・・

私も
その途中にいます・・・

『人與人』について

『どうしたら

人と人が仲良く暮らせるのか

誰もが

自分以外、敵とってしまう

殺伐とした

社会は血で血を洗う

悲しみの世界

誰もが

自分以外、信じられないと

人を蹴落とす社会は

苦しみの社会

空は青く

雲は流れている

そんな人間たちの苦悩をよそに

星は瞬き

月は輝く

そんな社会の嘆きをよそに

地球は回り

太陽は燃える

ある目的を内包しつつ

宇宙は調和に満ちている』

人間だけが
この調和を
受け入れずに
暴れている・・・

星々の運行は
変わらずに
何十億年も
調和に満ちている

人間の欲望は
どこまで
いくのだろうか・・・

欲望の果ての
悲しみは
どこまで
大きくなるのだろうか・・・

そんな

切ない気持ちを
詩に書きました

私は、小欲知足の精神で
自分を戒めたいと
考えています・・・

『忍耐の時』について

『欲望の渦の中

疲れた体

疲れた心・・・

表情には

見えない黒い思惑

言葉の刃

じっと待つ

そのときが来るまで

大いなる希望を

胸に秘めて・・・』

夢を持って

生きていく・・・

『そんなこと

やって何になるんだ』と

言われることもある・・・

色々な思惑が

自分を苦しめるときもある

そんなとき

静かに歩むものは
遠くまで行けるという
主の教えを
心に刻み
淡々と夢に向かって
努力していったらという
思いを込めて
この詩を書きました

騒がしく

鐘や太鼓を叩くものは
人は集まるが
その集まった人たちに
惑わされてしまうという
戒めのなかに
目標を高く持って
ひたすらその道を
邁進する姿勢を維持する
忍耐を持ち続けたいですね

遠くまで行くのなら・・・

『風の余韻』について

『終止符を打つことを

やめたときから

この旅は始まった

険しい道

断崖の絶壁

迫りくる炎

奈落の氷河

一条の道を信じて

明日を信じて

もっと良くなる

もつと確かに

自分を磨き

自我をなくし

自己を構築し

自由となる

心は平和に満たされ

風が吹き抜けていく』

一条の道とは

白い道・・・

信仰の道

風の道・・・

日本人が

忘れ去って久しい道

その先の光りに向かい

そして、信じていく

複雑な世の中

がんじがらめな

人間関係と仕事

疲労する心

病んでいく精神

心は隔絶され

人は孤立する・・・

けれども

信じる心さえあれば

前に進める

そんな願いを込めて

この詩を書きました

もし、頬を撫でゆく風に

少しの安らぎ、優しさを

感じたなら

それは、あなたを勇気づける

愛であったと

その風の余韻に
振り向けば
一条の道が
延びている
白い道が
「こっちだよ」と
手招いている

あなたを
助けるために

『夢の坂道』について

『人は

夢を持ち

新しい明日を信じて

歩き出す

その道は

長く険しい

荷物をたくさん抱えては

その旅に疲れてしまう

疲れたら

引き返せばいいと

考えるけれども

引き返すことは

転げ落ちること

どこまでも、どこまでも

転げ落ち

暗い淵の中で

涙を流すしかない

夢の坂道を登るのなら

余計な荷物を

持たないことだよ・・・』

こうなりたいと

思いを心の内に

沸き立たせ

歩み出す

最初は

饒舌に語り

自分に言い聞かせるかのように

大きいことを

言ってしまう・・・

そんな時も過ぎ

進んでいるのか

止まっているのか

後退しているのかさえ

分からなくなってしまう

迷っていく・・・

このままでいいのだろうか・・・

もし、そういう気持ちに

さいなまれ

今が苦しい人よ

荷物を下ろしましょう・・・

あなたが苦しいのは
色々な考えが
交錯しているからです

その考えを
最初に戻して
手ぶらで
この夢の坂道を
一緒に登っていきませんか

私も
苦しくなったら
息切れしてきたら
最初に立ち戻って
夢を持ったときの
気持ちに立ち返って
余計な荷物は
全部、おろして・・・
進んでいこうと
思って登っている
途中です・・・

『あなたの愛』について

『どんな悪人でも

涙を流し

自分の罪を悔いる

どんなに汚れていても

気にしない人が

その汚れを拭おうとする

あなたの聖なるまなざしの前では

自分を恥ずかしいと

誰もがうつむいてしまう

あなたの慈悲深い微笑みの前に

自分を懺悔し

誰もが手を合わせ

許しを請う

あなたの愛は

すべての人間を

包み込む

天国をその手の中に

地獄をもその手の中に

やさしく待っている

一千億年の孤独のなかで・・・』

ブログで素晴らしいのは
宗教的な詩を載せても
削除されないことです

昔、広告代理店の知人に
言われたことがあります

『もし、出版したいのなら
宗教的なテーマは、やめろ』と・・・

しかし、私は
信念を曲げてまで
本を出す気は、ないよ・・・と
その場を後にしました・・・

詩人の集まりにも
何度か出席しても
やはり、同じような
感じでした・・・

でも、時代は
このような形で

自由に、堂々と、
自分の考えを
世に問えるように
なりました・・・

批判は受けても
削除はされない
それだけでも、嬉しいです

日本の言論界は
今まで、タブーが多すぎました
しかし、今は自由な風が
吹き抜けていきます・・・

この詩とは
あまり関係ありませんでしたが
ただ、主の愛は
確かに在り
そして、この日本に力を増し
広がっている・・・

多くの人々を
幸せにしたいという
願いのみの祈りが
響く・・・

その道しるべに
なればいいなあと
詩を書き発表しています

『いのち』について

『葉は芽吹き

花は咲き誇り

風は希望を運び

光りは語りかける

いのちがある限り

繰り返される

喜びの力

自らに備わった

可能性を最大限に

生かす

繁栄の姿

人間も

その一員であるのに・・・』

自然を愛する人がいる

山や海
花や木
魚や動物 . . .

人間が作り出したものを
憎む人がある . . .

そして
人間をも . . .

けれども
人間も自然だよ
心も自然だよ . . .

だって
人間が作ったものでは
ありませんよ

主が創造された
宇宙とその中の
銀河
そして、太陽系の
地球が
生まれ
そして、魂が創造された

と私は思い
この詩を書きました

人間を自然と切り離す考えは
人間はだめだという
考えに似ている気がします . . .

私たちも
宇宙の法則の中を

生きているのだから・・・

祝福されて

存在しているのだから・・・

可能性を

最大限発揮して

いのちを謳歌しようでは

ありませんか・・・

『見知らぬ人へ』について

『この地上に降りる前

仲良しだった君に

ひょっとしたら

もう、出会っているのかもしれない

かすかな記憶は

ぼやけすぎて

ときおり

懐かしさや共感が

あの時の思いを

かもし出す

でも

その記憶はおぼろげすぎて

確かなものなどなにもない

記憶の忘却は

この世の掟

その香りを

そのかすかさを信じて

どんな出会いをも

おろそかにしては

いけないね・・・』

たったひとりの人に

愛し愛される・・・

それだけで

戦っていける

宗教改革の先駆者

ルターは

こう言った

『あなたは、ドイツが欲しいのか』と聞かれて

『いいえ、私は、妻が待つ家が在ればいい・・・』と

ルターを支えたのは

たったひとりの妻・・・

宗教改革の先頭に立つ男を

宗教改革を支えた男を

プロテスタンティズムを

支えたのは、ひとりの女性・・・

ダンテに

神曲を書かせたのは

ひとりの女性・・・

多くの人に
愛されなくても
いいのですよ

たったひとりに
愛されさえ
すれば・・・

そんな
思いを込めて
この詩を
書きました・・・

ひとつひとつの
出会いの中で
運命の人は
身近で
あなたを
見ている人かも
しれませんね・・・・・・

『光りある限り』について

『対立しあう考え

衝突しあう価値

人が人を裁き

罪人を創る

光りは

天上の彼方

いろいろな色を含み

地を照らす

それは一色ではなく

何色もの輝きを

包み込みつつ

投げかけられている

光りあるかぎり

人が人を

裁くことはできまい

裁いた人が

光りにそむいているのだから・・・』

誰が人を裁けるのでしょうか・・・

法律のうえでは

確かに、犯罪はあるでしょう

けれども

それは、ルールを犯した

責任を取ることは

ないのでしょうか・・・

小さな裁判官となって

日常に、判決を下していけば

あなたがあなた自身の一切の行いを

その刃で切り刻んでいることと

一緒なのかもしれませんよ・・・

色々な個性があり

色々な考えがある

それでいいのです

そして

いままで自分に

向けていた刃も

下ろしましょう・・・と

そんな

おもいで

この詩を書きました

少しでも

力を抜いて

ちょっと気楽に

生きることも

だいじかなあ・・・と

思いまして・・・

『今生きている意味』について

『地に足を下ろさず

空想に耽っている

この世を放棄して違う世界に

憧れている

生きる主体性をなくし

幻に翻弄されている

その幻を宝として

自分の飾りとして

人に見せびらかし

人を見下す

そんな生き方をするよりも

大地に足をおろし

その温もりを

暖かい風を

大切なものを失う前に

確かなものを創っていく

人と人が共有できる

確かさを

今、自分が生きている意味を

築くために

現実を

そのありのままを

まるごと見なければならぬ』

否認という言葉があります
経験が現実を拒否するとき
使う場合もあります・・・

よく事故の原因を
追求しようとしても
この壁にあたり
不明なまま
捜査を打ち切るケースが
あるといいます

また、ベテランが
事故を起こす原因は
ここにあるともいいます・・・

今、ある現実よりも
経験値が勝っているときに
現実を否定する行為でも
あるともいえます・・・

私たちは、
自分の見たい現実しか
見ていないと
ジュリアス・シーザーは
言っていました

そうなのです
そういう特性を
持っている
人間なのだから・・・
いつも、ニュートラルな状態を
意識的に保っていないと
知らないうちに
とんでもないところ
常識から逸脱した行為にまで
発展する可能性が
私たちには
あるのかもしれない・・・

そんな
思いで
この詩を書きました

談合、収賄、強要、猥褻・・・・・・
逮捕されるまで
常識を逸脱しているのさえ
わからないまま
罪を犯し続ける人が
後を絶たないのは
このためかも
しれませんね・・・・・・

気をつけたいものですね・・・・

『生命の力』について

『情熱の炎

ふつつつと燃えている

消えることはない

生命の輝き

こんこんと湧いてくる

泉の力強さ

決して誰も止めることはできない

生命の力

素直な心

美しい気持ち

その奥には

溢れくる愛情

その生命の力に

ただ従うだけ

かけがいのない喜び

胸に厚く響く

愛・・・

与えたい

この愛の思いを

喜びを』

疲れているときは
何も自分かの中から
でてこない・・・

けれども
十分な栄養
十分な睡眠
そして
悩みを断ち切れる力は・・・

自分の悩みの正体は
単なる疲労かもしれませんよ

人間には
自然治癒力があります
ものすごい力です

それも
栄養と睡眠から
生まれる力です

もし、何か、こう・・・
疲労感が取れず
悩みが増幅する感じがしたら
ゆっくりと

栄養と睡眠が取れる場所に
旅行に行くのも
いいかもしれませんね・・・

そんな思いで
この詩を書きました・・・

さあ・・・
山が好きな人は、山へ
海が好きな人は、海へ
体調を整えるのも
仕事のうちですよ・・・

『地球人』について

『いろいろな考えがある

いろいろな生き方がある

いろいろな表現がある

いろいろな形がある

自分が正しいと思うのなら

他の人も正しいのかもしれない

少しの愛情

少しの勇気

人と人を理解させる

知恵・・・

それだけで

手を取り合える

分かり合える

肩を抱き合って

希望を共有できる

私たちは地球人

私たちは仲間

もう

争う必要も

戦う必要もない・・・』

正しさを

衝突させるのではなく

幸福を競い合う

どの考え方が

多くの人を

より幸福にさせるのかを

競争する

どの神様が

正しいかではなく

どの神様を信じれば

幸福になるのかを

検証する・・・

正しいと思って

行って

不幸になるのだったら

悲しくはありませんか

その正しさって

何ですか・・・

その神様って

何ですか・・・

私は、そう思って
この詩を書きました

人間を幸福にしない
思想、主義、信仰・・・
それは、どうしてですか

今の現実が
今の現実が語るものを
ちゃんと考えて
もし、不幸と思えるのなら
新しい考えで
自分を入れ替えてみたら
きっと何かが変わるはず・・・

私は、そう信じています・・・

『白い愛』について

『白い雪

それは

ぬくもりのように

外気の冷たさを

忘れさせてくれる

緑なす常緑の木々も

白い衣装が

よく似合う

青い空のスクリーンに

ほのかな輝き

白い雪

フワフワと

大地と心に

やさしく語る

白い舞

静寂の言葉は

あたりを包み

あたりに響く・・・』

愛の色は、

と聞かれたら

やはり、白と答えるでしょう

東京に雪が降ると

愛が降ってきたかのように

美しく、白く

時には、日常の汚れを

包んでくれる・・・

まだ10月に、

雪の話もどうか

と思いますが・・・

色々ありますけれど

時々、白く染まった

景色は、

その色々をリセットしてくれるようで

自分を振り返ることが

できるような気がして

この詩に託しました

いつでも

雪の日には

やり直せる

なんか

そんな気がして・・・

『悲しみが吹き抜ける』について

『存在しているすべてのものは

永遠とも思える時間のなかを

ゆっくりと育んできたのに

人間の欲望と利益主義が

大切なものを破壊していく

戦い、奪い、争い、憎しみ

その後に

なにがのこるといえるだろうか

悲しみの風が

無に帰した存在の跡を

吹き抜けていく

悲しみの風が

ヒュウヒュウと

すすり泣いている・・・』

過ぎた欲望は
必ず身を滅ぼします

また、生きる意欲は
欲望を生みます

そこに
必要なものは
智慧だと思うのです

調整し中道に入る

自も他も幸福になる
道を探す・・・

自分だけよければ
他は滅びる
他が滅びれば
やがて自分も滅びる

相互に支え合っている
人間同士
そして環境・・・
共存の道は
互いを大切に思う
愛情・・・

そんな思いを込めて
この詩を書きました

行き過ぎて
壊れる前に・・・
足ることを知るのも
ひとつの道であり
智慧だと
私は、思います・・・

『かくされているもの』について

『人の心に眠る

凍る冷たささえ

溶かすことができる

閉じてしまった

さび付いた心の扉でさえ

開くことができる

光りを失い闇のなか

さまよう叫びにも

答えを出すことができる

ほのかな光りを灯せば

闇は消える

さび付いた扉、氷をと溶かす勇気

信じる思いをはぐくんで

人々が共存しあう愛の力

ひとり、ひとりの心のなかに

かくされている』

たった一粒の思いでも
消えることはない

ほんの小さな愛でも

与えれば増えていく

人の心に残るものは

信じられた
出来事の
真珠のような
結晶なのだから・・・

そんな思いを
込めてこの詩を
書きました

どんな人のなかにも
眠る善意を
導き出すのは
小さな
心の灯火・・・

それだけで
闇は消えるし
氷もとける・・・

私は、そう信じています・・・

『永遠の光り』について

『わきあがる思いを

伝えることができずに

悲しみがこぼれ落ちる

心の叫び、愛の思い

魂の声とて届かない

いつの日か

分かり合える日を夢見て

今日も、明日も、来年も

一生を通じて

伝えたい

この光りの意味を・・・』

真理の光りは

確かに

今、昇りつつあります

この日本という国に

この極東の小さな
島国に・・・

私たちが
待ちに待った
真理を
気づかずにいるのは
私たちの責任なのかもしれません

けれども
私は、私が感じた
驚きと感動を
詩に託して
お伝えしていくことを
選びました・・・

何を言っているんだと
思われる方も
多いでしょうが

私の本気は
続けていくことで
証明されれば
いいなあと思います・・・

十年も二十年も三十年も・・・
そこまで言い続けるのなら
本当かもしれないねと
思っただけのまで
私は、今世も来世も来々世も
同じように
本来の仕事を
していきたいと思います・・・

『クリスマス』について

『肉体という十字架を背負いて

僕らは苦悩する

明日の暮らしに心をわずらい

自分の確かな生きるものだけを奪い取る

お金に換算できる、すべてのものを

永遠に変わらない価値だと信じ

肉体を生存させることのみに

命はつかわれていく

十字をきる悲しみを忘れ

この世の間違った価値と戦い

散った愛の物語さえ

歴史の波間に忘れ去ろうとゆうのか

世界の国々の欲望も恐怖も

自らのみ、生きんとする願望でしかない

愛の涙で大地をぬらし

懺悔の日々を送った二千年を

忘れてはいけない

魂の約束は

破ってはならない・・・』

誓った約束・・・

胸に秘め

この世に旅立った

時のことを

振り返り

忘れ去った思いの

気づきになれば・・・

と思い

この詩を書きました

愛の教えは

いまだあるのに

それを無視しているのは

私たち人間のほうですよね・・・

『いのちの前進』について

『自分のゆくべき方向を

決めた時から

すべてが始まった

あらゆる困難と闘いながら

命の前進やめはしない

遠く彼方に見える

ひとすじの光り求めて

一歩、一歩、

近づいているという感覚を

確かなものと感じ

進んでゆく

その思いは

ひとつの輝きのように

美しくきらめいている』

前を向いて
歩いている人
そんな方と会うと
とても励まされる

自分もそうありたいという
思いも込めて
この詩を書きました

自分も励まされたのなら
自分も誰かを励ませる
そう信じて・・・

『New EI Power』について

『その恋、清らかに

男として女として、人間として

お互いの心、尊重し合う

人、人として

その人の心のなかの仏性を見つけ合う

心が交流する、学校、会社、社会、国家のなか

どれだけ真実の心、通い合うのだろうか

国として、民族人種として、宗教や思想の壁取り払い

地球の子として、心はずませることができるのだろうか

人々が力を合わせ、ひとつひとつの障害を乗り越えて

心の絆深めてゆくなかに、

その織り成すハーモニー、ひとつのオーケストラのように

美しいメロディ奏ではじめるよ

一人ひとりが自らの心の素晴らしさを確かに感じ取り

自らの悩みや悲しみを自らの力で解決し

一人ひとりが、独立してゆく精神の崇高さ輝き始めるとき

大きく時代がうねってゆく

鉄をつくりし加工して、作り上げてきた現文明

信仰という名の人類の理想を

学問的な解釈のもと、哲学的な色彩をおびた知の文明

その終焉のとき、新たな時代の黎明が

今、迫りつつある

鉄と知のつくりし、二十世紀の確かなものでさえ

一陣の太陽の風に吹かれたとき

砂のごとく、崩れ去ってゆく

今がそのとき、太陽の時代の到来のとき

本当の幸福を人類が共有するとき

太陽の時代が幕を開ける

それは簡単な

なぜ、という問いに答えてゆく書に

明らかになっている

その、太陽の法を胸に抱き

新しい光りに心を従わせ

極東の小さな島国に

主が降臨していることを信じたとき

そこに、現われたる景色に

人は奇跡が起きていることを目の当たりにし

地球は主の手の中で

やさしく包まれていることを

信じられるだろう』

20世紀の亡霊達は

まだ、地上を徘徊している・・・

唯物論は、名を変えて

地上に蔓延している・・・

まだ、地上は

薄明かりのなか

人々は

自分を失ったまま

自分を探せずにいる

自分とは何か

と強烈に心の叫びは

魂を揺さぶるけれど

なぜ・・・

この時代に生まれし
人々は
自分を探そうとするのか・・・

それは、
自分の心にある
菩提心が
真理と共鳴したがっているのに
その手立てを知らないからに
過ぎない・・・

ならば
私は、その道標となりたい
その真理を指し示す
ものとなりたい・・・

そんな
思いで
この詩を書きました

詩が
その役に立てることを
信じて・・・

『きらきらと輝いている』について

『他人ごとのように

自分の人生を考えてはいけない

自分の心のありか、忘れてはいけない

時代の流れに逆らったとしても

自分が正しいと思うのなら、迷うことはない

自分の廻りにある

薄汚れて固まってしまった古い価値を

粉碎し、新しいものを生み出すために

一歩を進める

その歩みの力強さ

その軌跡には

きらきらと輝いている道が出来ている』

新しい考え

それは、最も古い考えでもあります

心の問題は、

まわりがどんなに変わっても
人間に残る唯一のこと・・・

それを置き去りにした
結果が今を作りだしている・・・

学校では
ある心ない先生が
子供の心を解体している・・・

会社では
従業員を機械と考え
もっと、もっとコストダウン
パフォーマンスをあげろとの
号令に心を無くし、
喪失した肉体は
コントロールを失っている

警告は、発されても
誰も聞く耳をもたない
巨大な物の怪は
どこへ行くのでしょうか

そんな思いも込めて
この詩を書きました・・・

敗戦の宗教アレルギーを
持つ人たちに、
振り回された
この60年・・・

その人達は
それでいいのかもしれないが
嘘を教えられた
子供達は、どうすればいいのか
何を信じればいいのか・・・

『宇宙にぽつんと』について

『欲望はとどまることをしらず

世界を覆い尽くしている

今日の暮らしを奪い合い

明日を亡くす悲しい戦い

お互いの主張を理解する理性を去り

自らの正しさを勝ち取る戦い

続いている

家族を失い、友人を失い、愛する人を失い

悲しい涙、憎しみに変え

その炎で世界を焼き尽くす

きっと最後には、もう、戦う相手もない

誰もいない、自分もない

宇宙にぽつんと

地球だけ悲しく浮かんでいる・・・』

いったい、いつまで争い続けるのだろうか・・・
何千年も続いている
この戦争状態・・・
平和と見えるものは
停戦と抑止力の証

ひとたびバランスが崩れれば
また、戦争状態・・・

憎しみなのか
それとも、人間の業なのか・・・

このまま続けば
地球に
誰もいなくなっちゃうかもしれませんね・・・
そんな気持ちで
この詩を書きました

喜びと共に
生まれたこの星は
今、悲しみに包まれている・・・

『そのときにこそ』について

『心の傷をかくそうと

一生懸命もがいている

その傷に触れようとする

吠えて近寄らせない

けれども

その傷をつけたのは他人かもしれないけれど

治そうとしないのは自分のせいかもしれないね

素直な自分を取り戻したいのなら

その心の傷を治そうと思うこと

寂しさに耐え、孤独を乗り越えて

ひとり立つ

そのときにこそ、大いなる愛が

抱きかかえてくれる』

他力は

自力の果てに臨むもの

最初から求めても
自分にとって
自分の糧にならないのなら
それは、その苦悩自体の意味も
無くなってしまふ・・・

壁は、自分の今を修正するために
あらわれ、考えさせる・・・

どうして・・・
なぜ・・・
そこに成長の余地が隠されている

生きていて
傷つき、悲しみ、苦しくなる・・・

それを
放棄してしまえば
自分という答えは
永遠にでてこないのかもしれませんがね

そんな思いで
この詩を書きました・・・

実は、
自分も他人を
傷つけている・・・

そのことが
抜け落ちてしまうと
自己憐憫だけになってしまう

自分をかわいそうと
思ってしまうときほど
危険なときはない・・・

もし何かを
求めるのなら
自分から
自分がしてもらいたいことを
しなければ
要求ばかりしている
その気持ちのなかには
人から奪うことばかりの
貧しい心の
持ち主になってしまうよ・・・

『光りの道』について

『疲れたからだを引きずって

夜の街に消えてゆく

今日も偽りの自分を忘れたくって

ひとり、酒を飲む

悲しいお酒は、ひと時の幻

本当は悪夢

人々の口から出る、不平や不満

言葉の毒

車の出す排気ガスよりも

ひとの心を汚している

そんな今を変えるなら

自分を変えること

他人を変えることは出来ない

社会を変えてゆくには時間がかかる

自分を変えることは、今すぐ出来る

自分を変え、ひとつひとつの小さなものごとに

喜びを見つけることができたなら

その向こうに、光りの道が見えてくる』

私が今まで生きてきて

絶対的に言えることは

他人を自分のものにすることは

できないことと

他人を変えることは

できないことです・・・

男性なら

誰しも、自分の彼女が

自分のものだと思覚して

変えることが出来たと

思いこんでいても

月日が経てば

合わせてくれていた

だけだった・・・と思ったことは

ありませんか・・・

時がたてば

その人本来の姿が

現れてきて

最初の頃は何だったの・・・と

がっかりしたことがあるはずですよ

これは、同性同士でも

同じことだと思います

やはり、他人を

変えるのは
その人が、本当に
納得して、尚かつ自分の意志で
変えようと思わなければ
決して変わらないもの・・・

ならば自分を変えていくのが
いちばん早いし
自分のできることと言ったら
それぐらいしかありません・・・

他人を変えられずに
悩み、自分を誤魔化すくらいなら
自分の身近な変えられるところから
変えて、向上していこうという精神に
敗北はないと信じて・・・

そんな思いを込めて
この詩を書きました・・・

仕事とは
よい影響を他人に与えることと
私は、考えているので
それを日々、実践していきたいと
思っています・・・

『透明な風』について

『風が吹いてくる

真実の透明な風が

人間たちが

作り上げた、砂の虚栄を

吹き壊すため

偽りの栄華を誇ったものたちを

滅ぼすため

真の価値を創出するため

人間が作り上げた

都合のいい神話を粉砕するため

風が吹いてくる

時代を変えるために・・・』

真実は、ときに

厳しいものなのかもしれません・・・

人間の法は

時の権力によって

適用しなかったり
事後、勝手に作ったり
できますが・・・

宇宙の法は
厳然として
ありてあるものですから
それに背けば
反作用は、
必ず訪れます・・・

透明な風
宇宙の風
真理の風は

過去、現在、未来の
三世を通して
吹き抜けていく・・・

時の栄華を
無常に変える
悲しみは
人間の驕りの
代価・・・

『悲しむ必要はない』について

『時代は暗く貧しかったけど

愛あるときもあった

時代は明るく、ものに溢れていたけれども

愛を失くしたときもあった

人々は

豊かになろうと

がむしゃらに走り続けてきたけれども

信じていた

お金に換算できるものに裏切られ

ひとり、立ち尽くしている

でも、悲しむ必要はない

大切なもの失いすぎて

無くしたものの多すぎて

生きることに疲れて

しまうかもしれないけれど

耳を澄ませば

本当の自分が語りだす

悲しみの涙に、偽りがとれて・・・』

よくこんな質問を
されることがあります
「神様がいるなら
なぜ悲しみがあるの」

それは、その悲しみ自体が
存在を許されているからではなく
あなたの人格を磨く砥石として
ヤスリとしてあるもの・・・

もっと言えば
あなた自身の
心の虚飾を
あなた自身が
取り除くための
きっかけとして存在している
のかもしれないね

そんな
答えとして
この詩を書きました・・・

人生のなかの悲しみ
避けて通れない悲しみ
突然、降りかかってくる悲しみ

今世での悲惨な現実・・・

だからこそ

来世に夢を託す

教えがあり

この世限りではないという

希望が説かれるのかも

しれませんね・・・

『風の交流』について

『こんなに厳しい冬の冷たい風吹くなか

誰も心の扉、開きはしない

砂塵舞う凍てついた風吹くなか

コートを脱ぐ人なんかいやしない

家は締め切り誰も外に出なくなり

愛、語り合うこともないなんて

さびしすぎる

でも、風はひとり一人の心から吹くもの

ひとり一人の愛の思いから吹くもの

だから今、透明なやさしい風となって

吹き過ぎてゆく

ひとり一人が、その思いを持ち

心地よい風を

愛の風を、やさしい透明な風を

そして、その風が世界中に吹き抜けていったとき

重いコートは脱ぎ捨てられ、家は窓を開け放ち

心の扉を、みんなが開いたとき

地球は青く輝く』

自分に、何ができるか・・・
その問いに答えるべく
この詩を書きました

世の中を変えるには
革命を起こすと
大きいことを考える方も
いるでしょう

政治的手法によって
変えるという方も
いるでしょう・・・

起業家として
経済力をバックに
変えようと思う方も
いるでしょう・・・

でも・・・
私たちに
今からでも
できることは
相手に優しく接する
相手の立場に立つ
ということではありませんか

自分がされたいことを
相手にしてあげる

自分がされて
嫌なことは
相手にしない・・・

これだけでも
世の中が
明るくなるはずですよ・・・

小さい
当たり前のこと
その中に
とてつもない力が
隠れていると信じています

『夢のひとつ』について

『今まで活気に溢れていた街も

暗く死んでいる

政治家たちは

自らの政策の失敗を棚に上げ

それは、システムが悪かったのだと

自らの責任を逃れようとしている

働けども、働けども、暮らしは楽にならず

家も買えず、子供も育てられず

流した汗は、むなしさに変わってゆく

日本はお金持ちだと、他の国は言うけれども

誰も笑顔なんかで生きてはいない

老いてゆく苦しみを恐れ

立てなくなる日が、やがて来ることを心配し

希望は絶望に変わっている

ならば、ひとり一人の力を結集し

本当の悲しみを知る理想を持った人々が

本気で明日を変えると信じれば

夢のかけらのひとつとなって

ひとつの方向を指し示す』

私たちは、今まで
政治に頼りすぎていたのかも
しれませんね・・・

バブルは、簡単に崩壊して
誰も、そのツケを払おうとはしていない・・・

旧大蔵省は
総量規制を通達し
その紙切れ一枚で
土地取引に関する
融資を遮断した・・・
時の総理は、土地の値段を
下げると豪語して
土地は、下がったけれども
給料も下がってしまった・・・

テレビでは
似非平等主義を連呼して
まるでお金が悪いと言わんばかりに
嫉妬の原理を振りまく社会主義を
説きまくり
どこかの国のように貧乏を
みんなで味わうこととなった・・・

日銀は、そんな時でも
公定歩合を上げ
史上最大の利益を上げた・・・

私は、その時
政治の限界を見た
政策ひとつで
国民の資産が
半分になるのを見た

そんな時
書いた詩です・・・

私たちは
神の見えざる手を
信じて、
同じ過ちを繰り返さないよう
資本主義を傷つけないように
自分自身の考えを
しっかり持って対応していくことが
高い授業料を払った
生徒として、これからの未来を
考える必要があるのかもしれませんがね・・・

幸福実現党よ

はやく政権をとってくれ

日本を

大貧乏神から救えるのは

もう

幸福実現党しかない

『明日を変える意味』について

『たった一人の心の内にあった理想が

世界を変えることだってある

たった一人の心の内にあった愛が

世界を救うことだってある

だったら

今を変えてゆくことだって

そんなに難しいことではないと思う

変わらないと思っている人は

過去に生きている人

今に生きて

新しい未来に夢を託す

新しい明日にすべてを賭ける

それが

今を生きる意味となればいい』

.....

たとえば、
時計の針が
止まっている人がいる・・・

止まった時計は
動かない・・・

当たり前・・・

けれども
憎しみによって
怒りによって
傷つけられたことによって
裏切られたことによって
止めてしまう人もいる・・・

気がつくと
そのことを
考えている
そこから先には
進めない・・・

でも・・・
動かすしかない
自分の意志で・・・
そんな手助けになればと
この詩を書きました・・・

でも・・・
心のなかでは
変わらない君の姿

さよならも言えずに・・・

逝ってしまったね・・・

だけど

私は、生きて、幸せになろうと
思いました

人を愛そうと思いました

そして

時間を止めないように
前を向きました・・・

私は、生きることを選びました

そして

再び、時計の針が
動き始めました・・・

そう思った

その時から・・・

答えを受け取るために

『迷いのなかに

沈黙のなかに

人は時々

置かれることがある

自由という

無限の選択を許されていらい

自らの方向を決める

大きな責任を感じる時がある

深々とゆっくり

自らを変えていく勇気を失わなければ

その勇気に必ず

ある答え

その時々に見える

さあ 勇気を出して

自らを変えていくことを心に決めて

焦らず歩み 迷いを断ち切れ

ある一つの答え 受け取るために...』

.....

その問題は、
人それぞれ.....

その答えも
人それぞれ.....

生まれてくる前の
自分に
今の自分が
どう答えるのか.....

自分が
想定した
困難に
自分が
いちばんの
心の修行になる
苦難に
どう、立ち向かうのか.....

それが
失恋の人もある.....

それが
失業の人もある

それが

借金の人もある

それが
愛する人との別れの人もある

それが
嫌な人との出会いの人もある

人それぞれの
魂が鍛えられる場が
今、私たちのいる場所なのです・・・

その・・・人それぞれに・・・
立ち向かってもらえたら・・・と
この詩を書きました

人それぞれ
いろいろな修行をしていると
捉えれば、この世の意味が
見えてきませんか・・・

『永遠の進化』について

『水は流れ

いつも新たなる

時は流れ

肉体は朽ち果てる

肉体のなかに

流れていた精妙なる霊は

次への生に移行する

すべてのものは朽ち果てていく

この世で

朽ち果てぬものを磨いてこそ

真なるものをつかみとる

根のない草木は枯れ

仏につながらない魂は

永遠に死ぬ

地に根を張ってこそ

草木は育ち大木となり

人は仏につながってこそ

永遠の進化をとげてゆく』

.....

科学は、発達し
私たちは、それを
享受している・・・

ニュートンもアインシュタインも
確かな信仰を持ち
その上で、自分の研究を推し進めていた

おそらく、便利になると
忘れるものを知っていたかのように・・・

私たちの虚しさは
本当につながらなければ
ならないものと
つながっていないから・・・
その不安がいつそう強くなり
自分自身をも失ってしまう・・・

その時
何とつながらなければ

ならないのか
そのヒントになればと
この詩を書きました

失ってしまった
心を取り戻すために
取り戻したら進化するために
私たちは、非科学的な
信じる道を歩むことが
そのバランスを自分のなかで
確立することだと
私は、考えます

『時代の息吹』について

『有限の肉体のなか

魂の無限の声

聞こえるか？

その声

確かなささやき

その響き

自分を衝き動かす

熱情にも似た

わきあがってくる

その声

聞こえるか？

だんだんに強くなる

その声に従う

自らの生き方 考え方

その方向に

これからの時代の息吹き

その足音が

心のなかに 響きわたる』

時代の黎明

その姿は、
いろいろなものに
かき消されている

しかし、確かに
その鼓動は
大きくなりつつある

その魂の結集が
ある臨界を超えたとき
人々は、気づく

私たちは
愛されていたと・・・

極東のこの小さな島国が
今、世界の中心になりつつあることを

白人中心の世界的価値のなか
有色の希望は、
貧しい国々のスタンダードになる

資源もない、土地もない
そんな、焼け野原から

この世界をリードする国に
なりつつある理由・・・

そこに
主の配剤が
隠されている・・・
その気持ちを
詩に書きました・・・

この日本に
奇跡が起きていることを
多くの人に
知っていただけたらと
思います・・・

『心を耕せ』について

『君の心には

もう 種が蒔かれている

その種

君の心の土の中に

そっと植えられた

しかし...

君は水をやろうとせず

肥料をやろうとせず

そのままにしてしまうつもりなのか？

君の心の土を

肥沃なものに変えてゆかなければ

そっと蒔かれた種の生命

なくしてしまうことになるね...

その種 見事に実らせて

大樹になり 素晴らしい果実

多くの人に味わってもらえるよう

君の心の土を耕してみないか』

.....
.

生まれた意味を
こう考えてみては
いかがでしょうか.....

誰もが
生まれたときから
持っている
仏性、神性.....
それを
どう伸ばしていくかは
その人の努力

機会は平等です
そして、結果は公平です
これは、宇宙を貫いている法則です
これを変えることは
人間には、できません.....
しかし.....
嫉妬が悪平等を作り出し
社会を歪ませている.....

人間は
自己責任が原則です
なぜなら
選択の自由
創造の自由

行動の自由
努力する自由と

その本人の
判断にすべてを
まかせているから

ならば
自分を
伸ばしていきませんか . . .

そんな
思いを込めて
この詩を書きました

誰かのせいにして
拗ねるのは、やめにしませんか

すべては、あなた次第 . . .
自分で舵を取るのです . . .

さあ
船は
もう出航していますよ

『朝、生まれ、夕に死す』について

『今日で人生が終わるとしたら

ひとつ ひとつの出来事が

とても 大切なものを感じられてくるだろう

今日で人生が終わるとしたら

出会う人

ひとり ひとりが愛しく思えてくるだろう

今日で人生が終わるとしたら

どんなことだって

一生懸命になるだろう

朝 生まれ

夕に死す

そう思うなら

一日一日が

とても大事なものとなるだろう

マンネリでもなく くり返しでもない

かけがいのない一日になるだろう』

.....
.

こんな気持ちで
毎日を送ることができたら
と思い
この詩を書きました

私たちは
日常生活のなかで
埋没し、ただ今を
生きてしまいがちです

毎日の発見を
心がけるなら
一日を全力で生きる
また、生きようとするなかの
心残りと反省.....

それを明日につなげる
喜び.....

まだ、生きて
今日できなかったことを
明日おこなえる感謝

命が、まだ続くという
感謝.....

その連続が
人生なのでは
ないでしょうか.....

私は、そうありたいと
思っています・・・

『東京の朝だって』について

『旅行にいったときや

夜おそく街をでて

明け方 海岸に着いたとき

朝がとってもさわやかに感じることもある

東京の朝とは少し違うなと感じることがある

でも

本当にそうかなと

朝はやく起きて

ドアを開け 外へでてみる

そこには 旅行に行ったときや

明け方 海岸に着いたときと

同じ朝があった...

さわやかですみきっていて

しずかな エネルギーに満たされている朝が

そこにあった

東京のいつもと変わらぬ朝に

少しだけはやく飛びこんでみると

そこには

いつもとまったく違った

朝があった

東京の朝

都会の喧噪からはなれ

ほんとうの姿を界間みせてくれる

一時のめぐみ...』

.....
.

東京生まれ

東京育ちの私の故郷

刻々と変化する街

人も変化し

人も入れ替わる

余所から来た人たちの

夢や希望

けれど、愛されることなく

捨てられる街・・・

東京は
冷たいと
よく言われるけれども
やがて、捨てられるなら
距離を取り
傷つくのを恐れても
仕方がない気がする・・・

余所から来た人は
「ここは、住むところではない
仕事をし稼ぐところ」だといわれると
少し悲しくなる・・・

余所から
来た人の欲望を吸い上げ
欲望を吐き出す街・・・

そんな街の朝も
悪くないよと
この詩を書きました

そんな
東京にも
花は咲き
鳥はさえずり
魚は、飛び跳ねる

そんな
東京の朝も
さわやかな
風が吹いている・・・

私は
この街が
好きです・・・

『仏の掌ありてこそ』について

『掌ありてこそ

飛んだり 跳ねたり

掌ありてこそ

滑ったり 転んだり

掌ありてこそ

泣いたり 笑ったり

掌ありてこそ

光りあふれる世界あり

掌ありてこそ

闇にあえぐ人消え失せず

掌ありてこそ

宇宙は開かれ

仏の掌ありてこそ

全てがはじまった

仏が掌とじてしまったら

なんにもない 全てがなくなる』

.....

無の思想は
今ある当たり前の
すべてを考え直してみる

すると、そこには
確かに
仏の慈悲が
感得される

なんと
私たち人間は
愛されていることよ.....

これ以上もない
愛に包まれて
いったい何が欲しいというのだろうか
どれだけの愛を貰えば
足りるのだろうか.....

そんな
思いを込めて
この詩を書きました

私たちは

本当に

愛されています

『真空妙有』について

『いつから 僕は

あるのだろう

いつから 僕は

僕自身を考えはじめたのだろう

生まれる前の僕は...

死んだ後の僕は...

今の僕は本当の僕なのだろうか？

今 考え 行動している僕は

本当の僕の姿なのだろうか？

何かに衝き動かされ

それに迷う僕は

本来の僕の姿なのだろうか？

肉体を通してしか

考え 行動できない僕は

僕なのだろうか？

仏は言われた

『この世は仮の世

肉体に宿る人間はうたかた』

無いのに有る 僕は

いったいなんなのだろうか？

真に霊なる自分を感じた時

妙なる本当の自分があらわれるという

その瞬間に

きっと

なにかがわかるのだろう

そのとき

本来の自分の姿を垣間見るのだろう

本当の自分に

出会うのだろう・・・』

.....
.

空の思想は

深く広い.....

この思想を
体得したくて
修行者は
今を忍ぶ

悟れない期間を
耐え忍ぶのも
また修行のうち . . .

いつか
霧が晴れ
仏の姿を
かいま見られる日を
夢見て
今日を尽くす

そんな
思いを込めて
この詩を書きました

『矛盾をかかえて』について

『日々

揺れ動く心

統御できない

暴れる心に振り回されてしまう

こう 在りたいと

理想を掲げながら

現実との矛盾が

辛くなる...

色々なものをかかえこんで人間

色々な矛盾をかかえて人間

理想に向かって歯をくいしばることこそ人間

弱っていく肉体に

老いていく肉体に

病んでいく肉体に

負けはしない

死という恵みがくる

その日まで...』

.....

人間は、その心の傾向性に
引っ張られ苦しむ.....

分かってはいるけれど
止められない苦悩.....

誰しものが抱えている問題

自己嫌悪との戦い.....

しかし、戦っている限りは
いつか、克つ

戦う意志さえあれば
負けはしない.....

長い時のなかで
ひとつずつ
克服し修正していく

今日ダメだったからと言って
決してゼロにしないこと
努力を打ち切らないこと

持続する精進は

必ずや魂に
その軌跡を残し
己の心を形成して
高めていくことを
信じて・・・

そんな思いで
この詩を書きました

私も
ダメな時があります
でも、また明日
やり直そうと
気持ちを切り替えて
挑みます・・・

きっとそれが
生きる意味だから

すべてが
完璧なら
ここに生まれて
来ることはない

完璧でない
未完ゆえにこそ
このいる存在理由・・・
なのだから

『ひとつの幻』について

『肉体の重みに耐えかね

ひとり座すとき

こころ

本来の姿に戻すため

こころ

欲望と切り離す

この世の全てのものは

はかないものだ

知りつつも

それにとらわれ

苦しみをくってゆく

惑わされ

そのなかで行動し

苦しみを深くする 哀れな人間

ほんものの美しさ つかみきってみれば

色あせた この世の栄華

ひとつの幻に こころ奪われることはないのに...』

.....
.

と言いながら

私も煩惱多き人間のひとりです・・・

生きる意欲と
密接な欲望は
あるものを
美しく・・・
あるものを
欲せさせる・・・

その間を
行ったり来たりしながら
心は・・・
散り散りになる・・・

けれども
精神の美しき理想は
遠くにあるけれども
それを目指して
前を向く・・・

今日ダメだからといって
アキラメナイ意志は
それだけでも
自分を鍛えてくれる

人間である以上
欲望のない人はいない・・・

だから
それをどう止揚するかが
生きる命題となる・・・

そんな
思いでこの詩を書きました

完全なる完璧には
生きられないけれども
それも
肉を持つ経験であると
言い聞かせ
翻弄されずに
上手に付き合う方法が
中道なのかな・・・と思います

極端な禁欲は
極端な原理主義へと
つながる気がする・・・

人間自体が
素晴らしいと信じることで
その営みも

かわいらしく

愛することも必要なあと

私は、思います・・・

『我苦』について

『我ありと

思う心が 苦しみをつくる

我ありと

思う心が 自分を追いこんでゆく

いつの間にか

我ありと

思う心が肥大化し

高く高く 幻影をつくりあげ

幻影の頂点に立ったとき

幻影は消え

幻影の頂点から

真っ逆様におちてゆく

その痛み

計り知れないほど

我を苦しめる

我ありと

思う心が我を苦しめる』

.....
.
自分の世界は
確かに
自分の王国であります
そこに、相対的価値観を
持ってきて、他と比べて
もし、自分を頂点に考えてしまうなら
そこは、自分の王国ではなく
この世的な次元に引き込まれた
混沌の世界.....

そこには、
常に何かと比べあっている
競争と、他を追い落とす
破壊が渦巻いている.....

せつかく
自分の心は
自分が統治を許されているのに
他の属国になったり
占領され蹂躪されるような
相対の世界に引き込まれては
いけない.....

それが
苦しみをつくる
ひとつの原因ではないか
と思いこの詩を書きました

私たちは、ひとりひとりが
心の王国を持ち
それを育むことを
許されていますが
他を羨んだり
貶めたりすれば

たちまち、その王国は
消えてしまう・・・信の世界・・・
でありましょう

『額に汗して』について

『額に汗すること・・・』

忘れて久しい 現代人

一生懸命 働くことが

休日を輝かせるってこと

誰も教えてくれなくなった...

額に汗して

身体中の水分が

労働として

ひとつの結晶になってゆくとき

一杯の水が

掛け替えのない

喜びになる

身体を休め

心地良い眠りに入るとき

天上にも昇る

安らかさを与えてくれる』

.....
.

これは、肉体労働だけではなく
デスクワークにもいえると思います

日本人は、元来
働くことを喜びとしました

日本の神様達は
何らかの役割についており
それを行っています

働くことは
原罪でも罰でもなく
人間本来の性質
なのかもしれません

これだけ多くの日本人に
働く職場があり
賃金を稼いでいる
正当な労働は
胸を張って生きている証拠
でもあります

プライドをもって・・・
職業に貴賤は、ありません

どんな仕事でも
誰かの役に立っているからこそ
その対価をいただけるのです

そんな思いで
この詩を書きました

今日も一日
頑張ってください

『空の手で』について

『肩の力を抜いてみないか

身体が板のようにになっているよ

眉間のしわを

愛あるまなざしに変えてみないか

額に苦しみが刻印されてしまうよ

義務感からものごとを

行なうのをやめてみないか

その行ないが苦渋にみちているのなら...

ものをつかんでいる

その手を放してみないか

手が鉛のようになってしまうよ

時々 たたずんで

休むことがあってもいいと思うよ

しかし

来た道を引き返しては

いけない・・・

そこにとまり荷物をおろして

また歩き出す

要らないものはすべて捨てて身軽になったら

ほら 今まで苦しんでいたことが幻のように

身体は軽く心は喜びに満たされるよ』

.....
.
時々、背負ってきたものを
検証してみると
要らないものを
たくさん抱え込んでいることに
気がつきます・・・

その重さに耐えかねて
歩くのを止めてしまおうと
思うけれども・・・

余計な荷物は
下ろして
身軽になれば
まだ、歩けますよ
と言いたくて
この詩を書きました

心の荷物は
限りなく増えていく・・・

どこかで整理しないと
その重荷に耐えかねて
倒れてしまいますよ・・・・・・

『始まりと終わり』について

『一つの役を演ずるために

この世に来た 僕らなのに

役にハマッて

自分の本来の演技を

見失ってしまうときがある

いずれ幕が下りるというのに

始まりがあれば

終わりがあるというのに

この世の劇に翻弄され

本来の目的を忘れ

この世の舞台の上で

のたうちまわる・・・

いずれ幕が下りるというのに

始まりがあれば

終わりがあるというのに...』

.....

・
肉体を持つ
人間の哀しみ
それは、尽きることなく
わき上がる
煩悩の苦しみ

五陰盛苦は
五官が燃えさかる
苦しみ・・・

コントロールできない
哀しみ・・・

分かってはいるけれど
止められない・・・

氾濫する川
荒れ狂う精神・・・

どうすれば
この肉体を
制御できるのか・・・

答えは
各人にゆだねられている・・・

ただ一つ言えることは
ひとつの役を
演じている
私たちがいることを・・・

そんな思いで
この詩を書きました

私も
いつも悩まされています
この肉体の

炎に・・・

揺らめく

煩悩に・・・

『自分の意志で』について

『この世に生をうけ

除々に魂は覚醒され

色々なものを手で触れてみて

この世界に慣れ親しんでゆくと

あるものに

どうしてもひかれてゆく衝動にかられ

自らの心のコントロール失ってゆく

行ないにおいて

苦しみをつくり

その苦しみから

逃げようとして

また

苦しみをつくり

魂に刻印され

自分自身が出来上がってゆく

自らの意志で生きるか

それとも 心のコントロールを失うか

自分の意志で決めるしかない

自分のあるじは自分なのだから...』

.....
.

自分を失う.....

自分で自分が無くなる.....

それは
夢中で何かに熱中しているのではなく
制御ができずに
暴れる心.....

誰もが経験する
苦痛.....

そして
それを解放すれば
一時期は
スキッとすけれど
後は、後悔の嵐.....

その中で
生きる私たちは
肉体という
十字架を背負っているようだ.....

そんな気持ちで
この詩を書きました

その人間であるが故の
哀しみを背負って
今日も生きていきます . . .

自分の意志で

『捨ててしまったものの中から』について

『日常のなか

夢 持ち続ける

眩しさ キラキラと

疲れきった世の中に

ひとすじの

希望にも似た

わくわくするような

心の高鳴り 感じさせる

わかりきったと

嘆く前に

変わるはずもないと

自分を投げ捨てる前に

自分の中の夢

投げ捨てる前に

もう一度

捨ててしまったものの中から

夢 拾い集める勇気を...

一生後悔する前に...』

.....

小さい頃
得意だったこと
好きなことが
誰にもでもあったはずです

それを
思い出して
自分を見つめ直してみれば
きらきらと光るものが
見つかるはず.....

それは、未だ原石で
輝きも乏しいかもしれないけれども
磨き続けるなかに
自分を見いだすことが
できるはずです.....

私も
ずっとそのことで
悩んできました

そこで
小さい頃
少年の頃
何が好きだったかなあーと

考えているうちに
そうだ・・・
詩を書くのが好きだった

小学校の作文は
ほとんど詩にして出していたと
思い出し
これをしていこうと
決めました

今、日本は豊かです
豊か故の苦しみもあります
けれども
食べることに困らず
寝ることにも不自由せず
好きなことがやれる
絶好のチャンスです・・・

昔、みんなが
アメリカを目指し
行けば何とかなるという感じで
旅立ちました・・・

どうですか
今の日本は
そうではありませんか

アジアの人々が
日本に
稼ぎに来てはいませんか・・・

そうです
そういう時代になったのです

だから
その環境を無駄にせず
自分の可能性を

無駄にせず

時間を無駄にせず

今日を、今を生きましょう・・・

人を人と思わない

奴等がいる

人を 物や道具と考え

使えなくなったら

ポイと捨ててしまう

冷酷な奴等がいる

人はいつから 道具になったのだろうか

人はいつから

使い捨ての物になったのだろうか

会社はいつから

人を幸福にしなくなったのだろうか

会社も経済も

人の心に奉仕するもの

だったはず

人に幸福を与えるもの

だったはず

人の役に立つからこそ

繁栄してきたのではないか

順序を違えたそのときから

不幸が始まった

朝の電車のなかの憂鬱と悲しみ

人の笑顔が消えたとき

順序の違いが明らかになった・・・

.....
.
会社の為に
人がいるのではなく
人間が
公の企てとして

世の中が
便利になるように
会社があると考えます.....

経済も同じで

人を不幸にするなら
その経済行為は
間違っていると思います.....

すべては
人間、あつてのもので
人間がいなくなったら
会社も
経済も
成り立たないのでは
ありませんか.....

最初の原点に
立ち返って
もう一度.....
考え直してみるのも
いいのかもしれないね.....

現実決して

固まった 固形化

固定化したものではない

現実決して

変わらないものでもない

変わるもの...

今まで

皆が決して変わらなると

信じていたものでさえ

一瞬にして

その姿を変えたのを見たのは

つい最近のこと...

大きな組織が ガラガラと崩れる前には

小さな小さな人達の中に

小さな小さな変化が生じて

ある一定の相対的な数値を越えた時

核爆発でもおこしたかのように

あっというまに そのエネルギーは広がり

大きな大きな力となって

変革をおこしてゆく

小さな小さな力の集まりを

侮ってはいけない

小さな小さな変革を

あなどってはいけない

自分の思いを

小さなものだと

考えすぎてもいけない

君の一言が

君の小さなはじまりが

大きなエネルギーと

変化してゆくことだって

あるのだから

ひとつの小さな力

ひとつの愛ある言葉で

小さな変革を引き起こし

大きく強大なエネルギーの

ひとつの小さなきっかけをつくり

不平や不満で自らの心汚す

愚かさを捨て去り

公的な変革のエネルギーに変えるため

小さく大きな力

そそいでゆく

その光りの強さ

一人ひとりの心に宿っている...

.....
.

もはや

ひとりひとりの力は

あなどれないことは

証明されました.....

小さく大きな力は
ひとりひとりに
宿っています・・・

ひとりひとりに
大きな責任も
伴ってきます・・・

私たちは
世の中を
変える力を
持っています・・・

私たちは
もう、弱者ではありません

小さく
大きな力を持つものとして
目覚めつつ
あるからです・・・

『同じ景色の違い』について

何か いいことないか

と つぶやく その心

傲慢の芽が潜んでいる

毎日毎日が

刻々と変化して止まない

日々の暮らしのなかで

新しい感動を発見することができなければ

思い上がっていると

言われても仕方がないね

退屈と思われる休日も

なにかしなくては

と 焦っている 夕方も

心が ざわざわ

この世の流れに

のみこまれているだけ

心 止めて静かに呼吸をくり返し

心 平らかになったら

いつもと同じことが違って見えてく……………

……………

実は、
世の中が
ざわついているのではなく

私たちの心が
ざわついている

世の中が
不安定なのではなく
私たちの心が
安定していません・・・

動いているのは
私たちがかもしれませんね・・・

世の中に
何かいいことがないか・・・と
思うときに
自分の心が
波立っている・・・

まだまだ
知らないこと
新鮮な発見は
たくさんありますよ・・・

もし、そう思わないのなら
心が落ち着くまで
待ってみてはいかがでしょう

きっと
心に静寂が戻れば

いろんな出来事が
見えてきます・・・

こちらは
止まっているのだから
動いているものは
よく見えるはずですよ・・・

できないこと 嘆くのではなく

自分のできうる

一つ一つのものごとに価値観を

見だしてゆく

できないこと 叫ぶのではなく

できること

足りない部分を創りあげてゆくことに

喜び 感じる

無限の空間のなか

立ちつくし

途方に暮れるよりも

自分のできる

その一歩 踏みしるし

もう一歩 確かな足取りで進んで行くとき

無限の目標のなか

無限の際限のない向上の喜びに

身震いするにちがいない

.....

.

少しでも
前に進もうという気持ちには
終わりはありません

ちょっとでもいいから
頑張ろうという
気持ちには
限界がありません・・・

そうです
未完成な
私たちは
完成を目指す
微かな菩提心を
持ち続けることに
生きる意味が
そして
時間があると思うのです・・・

失敗もします
ダメなときも多い

けれども
あきらめない気持ちさえ
持ち続けられれば
負けは
ありません・・・

なぜなら
一ミリでも
進むものは
止まっているものよりも
やがては
前に出るものだから・・・

昨日の自分よりも
進もうという意志に
敗北はありません・・・

たとえ

今日
いかに
負けたかに見えたとしても・・・

僕はいつも探している

君の心の窓が開いているところを

僕はいつも探している

君の心にふれることのできる

その窓の隙間を

君は要塞のように

かたく閉ざした防御に身をかため

その鎧は

暖かい陽の光を拒絶するけれども

僕は風のように

君の心の窓の隙間から

語りかける

『その重い鎧を脱ぎ捨てなよ

この世のしがらみにがんじがめになっている

君の心 ときはなて』と

僕には聞こえる

ガシャガシャと鎧のこすれる音が...

.....

プライドや

見栄.....

幸せそうな姿.....

他人からの目・・・

自分の本心と違う

上辺の幸福・・・

それに翻弄される

毎日・・・

疲れる前に

燃え尽きる前に

脱ぎ捨てましょう

その重い

偽りを・・・

そして

軽くなりましょう

あなたは、あなた・・・

私は、私・・・

幸せは

ひとつの数だけあるし

心もおなじ・・・

ひとつの価値に

縛られるから

疲れちゃう・・・

あなたは、あなた・・・

私は、私・・・

みんな

違ってて

いい・・・

『遠い昔の記憶から』について

黄金たなびく

一日の終わり

この美しいひとときを

感謝をもって

むかえることできたなら

その一日は成功したと

いえるだろう

幾筋もの黄金

その情景に想いをはせ

遠い昔の記憶たどるのなら

生まれる前に見た

あのすがすがしさ

蘇るだろう

充実感に満ちた

穏やかな一日の終わりに

心を止めて

考えてみるのなら

自分の生きている意味

分かるかも知れない...

遠い昔の記憶から...

.....
.

今日も無事に終わったと
心から思えるような
一日を過ごす.....

かけがえのない
充実感に
魂も静まる.....とき

生まれる前に見た
景色と
夕暮れが
重なる.....

そう.....
この感覚は
生まれる前の
記憶を呼び覚ます
きっかけとなる.....

私たちは
この世に生まれ
多くの苦しみを
体験する・・・

そして・・・
こんな不条理の
理不尽な世界に
神も仏もあるものかと
嘆く・・・

けれども
人間の自由意志によって
作られたるこの地上世界に
天上のきらめきを
呼び起こさせる
情景は
時折・・・私たちを
励ます・・・

この苦しみは・・・
やがて・・・なくなる・・・

この地上での苦しみは
私たちの人格の形成に
役立ち、そして
別れた魂達とも
あの世で再会するのだから・・・

ゆえに・・・
この地上での生きる意味は
明らかになり
精一杯、生きようとする魂達は

その汗とともに
光り輝く・・・

自分の魂の

光りを強くすること・・・に
この地上での生きる意味が
かくされているのだから・・・

『かたく冷たい手』について

子供の頃

誰でも 輝きに満ち

生きる喜びにあふれる眩しさ宿していた...

瞳は きれいに澄んでいて

差し出す手は親愛に満ちていた

なのに...

やがて 好き嫌いという対象が生まれ

除々に苦しみをつくってゆく

好きなものには ほんろうされ

嫌いなものには 人生の影をつよめてゆく

自らの心

引かれてゆくものに歯止めが効かず

苦悩し

それを奪い取りたい衝動にかられたとき

澄んでいた瞳は濁り

親愛に満ちていたやさしい手は

かたく冷たい

ものになっている...

.....
.
人間の業の深さを
人それぞれに
体感していることと思います

アプローチは
それぞれでも
対象はやはり
愛されることに・・・
自分の生き方を左右されていく・・・

愛されない苦しみは
愛を奪う行為へと
展開されていく・・・

そして
さらに、業を深めていってしまう・・・

人間は
愛によって苦しむ
愛されないことに苦しむ
愛の対象にされないことによって
憎しみを増大させてしまう・・・

子供から
老人まで・・・

求めているのは
愛・・・

『よろこび伴うもののなかに』について

心が

なにかにとらわれていないときの

大空に羽ばたくような

心の自由を感じたことがあるだろうか

この世のしがらみに

がんじがらめになりながら

空を飛べずにいる

心の苦痛に

悶え苦しんだことがあるだろうか

つかんでいるものを放せ

抱えているものをおろせ

夢は

なにかを手に入れるものではなく

その道を歩いて行く楽しさ

喜びを伴うものの中に

夢の姿がある

結果にとらわれることなく

継続する意志に伴う豊かさ

大空に羽ばたく心の自由...

それが夢の姿

.....
.

人それぞれの
何かに向かって
努力する姿.....

それに
夢を感じる

出来なくても
やがて出来るようになると
信じて
向かっている姿.....

それに
夢を感じる.....

よろこびは
結果ではなく
その際中に
訪れている.....

私たちは
何かを手に入れるのではなく

何かに向かっていく
自由のなかに
夢があると
私は考えています.....

人生は
仕事では
ないですよ・・・・

生きることも
ビジネスでは
ありません・・・・よ

『鏡の中の自分』について

自分を誤魔化すのは

楽だ...

ただ たんに目をそむければいい

現実を誤魔化すのは

楽だ...

ただ たんに目をそむければいい

自分をまともに見ることは

辛いことかもしれないけれど

その自分が

その今を創り出していることに

間違いはないのだから...

自分の歴史をたどってみることは

恥ずかしい自分と

いやな自分と

目をそむけたくなるような自分と

対面すること...

自分の嫌いな人と会って話しをすることは

辛いことかもしれない...

けれども

本当の自分との出会いは

恥ずかしい

いやな

目をそむけたくなるような

自分との対決から

はじまるのかもしれない...

.....

落ち込んでて

どうしようもないときは

しょうがない.....

その時は

元気が出るまで
そこにいればいい・・・

もし、少し元気が出てきたら
少し考えてみるのも
いいかもしれない・・・

「なぜ」そうなったのかを・・・

そして
自分のありのままを
見る勇気が湧いてきたなら
自分の嫌な部分と対面するのも
必要なことかもしれない・・・

それが、自分
それも自分・・・

いいところも
よくないところも
いろいろある
自分・・・

弱い自分・・・
強い自分・・・

鏡に映っている
本当の自分・・・

真っ直ぐに
ありのままを
見る勇気が湧いてきたら

その現実を
見ていく・・・
少し勇気がいる・・・

少し元気がある・・・

だから

ときどき

本当の・・・ありのままの姿を

見ていきましょう・・・

自分を知るとき

現実を認めるとき・・・

そこから

はじまることも

ありますよね・・・

強大な歯車

暗黒の力

地球をおおいはじめている

それは...

それは...

もともと小さな歯車にすぎなかったのに...

知らず...

知らず...のうちに...

大きな歯車を回すものとなっていた...

誰も止められないのか？

そんな力を有して

地球を悲しみの渦に

巻きこもうとゆうのか...

僕らは無関心の中を歩きすぎた

僕ら自身が

その強大な歯車を回す力に

加担していることさえ

気づきはしなかった...

大きな崩壊の前の

小さな亀裂が

ところどころで生じている・・・

.....
.

私たちの無関心が

招いているもの・・・

確かに

日常に追われ

生活が重くのしかかり

生きていくのに

精一杯なのは、わかります・・・

私も

そうです

そのひとりです・・・

でも・・・一日のうちの

少しの時間だけ

考えてみては

いかがでしょうか・・・

一分でも

数秒でも・・・

自分について

他人について

世の中のことについて

宇宙について

そして・・・

神様や仏様について・・・

『自分の重みに耐えかねて』について

重苦しい鉛の塊

心の中

ひどく自分を辛くする

『うまくいかない事もある』と

自分に言い聞かせてみても

引きずる心

大きくのしかかる

自分の事だけが

心の中しめるとき

そこに 愛はない

自分の事だけで

精一杯なとき

そこに やさしさはない

自分の事だけで

悩んでいるとき

そこに 微笑みはない

自分の事だけで

心が重く沈みそうなとき

そこに 光りはない

自分の事にだけ

心が向いてしまっているとき

自分という牢獄に閉じ込められている

そこに 出口はない

もし

出口をもとめるのなら

それは ひとつ

自分以外...

誰かへの思い...

他人に何ができると答える

透明な清んだ心

それだけが

心の鉛

溶かしてくれる...

そこが、入り口・・・

出口の入り口・・・

.....

私たちは、つらいとき
出口を見つけようともがきます

けれども
見つからないことが多い・・・

その時には
入り口を探してみても
いかがでしょうか

違う道は
逃げるのではなく
選択することです

第三の方法を
思考することです

私たちは、知らないからこそ
悩んでいるのです

知ることによって
選択が広がり
幅が広がり
心が安定に向かう . . .

そして、選択肢が
無数に増えて
解決策が見えてきます . . .

新しい問題には
新しい対応で . . .

自分の中だけで
終わらずに
色々な考えに触れてみれば

扉は
あなたの前に現れるでしょう . . .

『人間のしるし』について

弱いものをいじめる残虐さ

慈悲のころもない

大勢でよってたかって

おもしろがって

弱い立場にある一人を

或いは少数を

メチャクチャにするなんて

人間じゃない...

誰が人を裁けるのか

その人が その人達が

悪をはたらいたのか？

いや

ただ気に入らないだけ...

理性があるということが

人間のしるしならば

他人の痛みを考えることができるはず

ひとり孤独にふるえている

大海にもてあそばれ

小舟のように心細く

ふるえながら揺れているのが

人間ならば

そのかよわさ

たよりなさが わかるはず...

.....
.

人間同士

もう少し仲良くできたらと

思います.....

むかつくとか

相性の悪さとか

いろいろあると思いますが

人間ならではの

適切な距離の取り方が

出来るように思います

人間関係における
不幸の増大は
寛容の精神のなさから
くるのではないかと
思われますが・・・

細かいことに
こだわりすぎると
実際、どちらも疲れるだけに
なってしまうような気がします

お互いの関係を
よく見極めて
もし、仲良くなれそうもなかったら
距離をとることによって
また、知恵をもって
摩擦を少なくする方法が
あると私は思います・・・

みんな
人間同士なのだから・・・

『燃え尽きる前に』について

人間は人間同士

競争して

身を引き裂いてゆく...

NO, 1に憧れ

それを求め戦い続け勝利し続け

やがては ボロボロになってゆく

勝利した後も

もう次の戦いのことが頭をめぐり

不安な状態になる

勝利とは虚しい孤独感...

もうお互い競い合うのはやめて

協力して

その時代の花園を

創る創作の喜びは

お互いの心和ませ

信頼を強くし

より個性の光り放ちながらも

自尊心を高め合い

より安定した静寂のなかに

幸福を見つけることだろう

.....
.

お互い

つぶし合うのではなく

磨きあう.....

お互い

戦うのではなく

協力しあう.....

お互い

あげつらうのではなく

理解し合う.....

そこに

確かに

この時代の同期生として

この時代の課題に取り組んだという

意識が芽生え

連帯感が強まり

お互い助け合う精神の絆の中

時代の花壇に

花々が

咲き乱れ

ひとつの景観を創り出すのは

人間の精神に

他ならないと思います.....

『迷いの淵に』 について

心が何かに迷っている

自分のやっていることが

うまくいかないからと

それを誤魔化すために

替わりの何かを探しはじめる

そんな気持ちで何かをはじめても

うまくいかないことは知りつつも

頭の中は

そのことでいっぱいになる

それは迷いだ

それは分かっている

けれども...

その迷いが ぐるぐると頭を巡る

このまま行動をおこしたら

きっと苦しむことに

なることを知りつつも

その迷いの淵に

落ちていくのか...

.....
.

おそらく

人生は、こんなことばかりのような
気がします・・・

迷い・・・行い・・・苦しむ

そして・・・

その思いと、行いにおける
動機は・・・心の傾向性が
大きく影響しているように
思えます・・・

簡単に言うと

「分かっちゃいるけど、やめられない」
みたいな感じでしょうか・・・

ただ、それを見つめすぎてばかりいると
何も出来きなくなってしまうので
得意な部分を伸ばしゆくことに
重きを置きながら
短所を伸ばした長所で
補う方が、精神的にも
自分を追い込まずに済むのかもしれませんが・・・

誰でも迷います・・・

そして、その状態で
失敗するものです

そのときの修正の早さで
苦しみが軽くなる・・・

放置しておけば
その分だけ重くなる・・・

それだけ気をつければ
自分を伸ばす方向に
多少の欠点は、
自分にも・・・他人にも
許していくことが
おおらかな人生に
つながっていくと
私は、思います・・・
というか・・・

私も・・・そのひとりです・・・

その肉体 頂きを極め

急斜面を転げるよう

老いてゆく

美しく咲いた花も散り

その花 美しかったぶん

その哀れさ

いっそう 悲しみをさそう

青春を回想する気持ちだけが

焦り

つぶやく言葉は

愚痴ばかり...

老いてゆく肉体

その老いをなんとか止めようと

もがくけど...

時は無常に過ぎて行く

花は永遠に

咲いていることはない...

うつろいゆくものだけが

美しいのだから...

.....
.

花は、散る

栄華を極めた者も
衰えていく・・・

美しいものも
やがては、その美が失われ
凡庸になる・・・

それが
法則・・・

宇宙を貫く
決まり・・・

諸行無常・・・

すべては
常ならず・・・

変わり果ててゆく・・・

その中で
変わらないのは

心の美しさ・・・

私は、そう思います・・・

『この世に生まれて』について

生まれる前

僕らは自由を満喫していた

空を飛ぶことも

逢いたい人に逢うことも

おもいどうりだった...

仏の光り

魂いっぱいになりすぎ

何の心配も不安もなく

いつも喜びに満たされていた

嫌いな人に会うこともなく

欲しいものは祈ればすぐ手に入り

心乱れることもなかった

なのに...

全くの自由から

全くの不自由へ...

苦しみ多きこの世

肉体に縛られて

全くの自由

かけがいのない喜びと知る...

.....
.

この世は、苦と説いたのは
お釈迦様でしたね.....

それは、生まれてくる前の
人間の魂の自由を
知っていたから
この世の不自由さを
説いたのでしょよね.....

ゆえに
人間は、間違いを犯し
苦しみをまたつくっていく.....

だからこそ
この世は、修行の場であり
学習の場だとも
教えられていました.....

私たちの
苦しみの意味は
自分の魂を鍛えるために

あるものだと

だから

この世を卒業したとき

本来の自由を享受することができる

不自由を知ることによって

自由の意味を知る

それが

この世に生まれて学ぶ

ひとつの課題なのだと

私は、思います . . .

『それだけで宝』について

病におかされ

はじめてわかる

健康であった日々の

ありがたさ...

毎日が退屈だと

嘆く人がいる

何かいいことはないかと

つぶやく人がいる

でも

それも健康であればこそ

病におかされたら

病気でふせったら

頭を巡るのは

健康だった日々のことばかり

早く元気になりたい

早く健康になりたいと

気は焦り

自己中心

エゴのかたまりとなり

愚痴ばかりこぼし

なんで

自分だけこんな目に

あわなければならないのかと

誰かを呪う

身体が病におかされたとき

健康だった日々を

思い浮かべても

もう 遅すぎる

健康な身体

それだけで 宝

.....
.

肉体が健康なゆえの驕り

それは、若者達の若さ故の
傲慢さにも似ている

私たちは健康なとき

それを感謝できる

心を失ってはいけないと思います・・・

生まれながらの難病の方

今まさに病と闘っている方

その方達の苦しみに報いるためにも

私たちは、自分の健常を感じて

その当たり前のなかに

ものすごい恩恵があることを

気づく必要があるのではないかと

私は考えます・・・

『魂が悲鳴をあげるとき』について

死におもむくとき

その人の人生観が

はっきりあらわれる

来世を信じている人の

死に際の安らかなことよ

それは まるで旅にでも出るかのように

はれやかに

さわやかに

この世に別れを告げて行く

その顔は

満足と微笑みを浮かべ

感謝の気持ちに満ちている

しかし

現世限り

人間は死んだらおしまい

無になるのだと

唯物的な考えをもっていた人の

死に際の醜さよ

その顔 恐怖におののき

青ざめ

まるで 死後の裁きを知る如く

この世にしがみつき

哀れにのたうちまわる

生前の無信仰

仏神を否定し

来世を否定し

徳を積まず

愛を持たず

心の借金を重ねた呵責に魂は

悲鳴をあげる...

.....
.

この世だけに

囚われる私たち.....

それなら

なぜ.....

神や仏は

姿を現して下さらないのかと

問う方もいらっしゃると思いますが

だからこそ

信じるということが

試されているとは思いませんか

姿を現して

信じることは

確認です

そうではなく
物質に囲まれた世界で
目に見えないものを
信じる・・・

愛、信仰、希望、夢・・・

その多くが
目には見えない
その人それぞれの
心の問題です・・・

ゆえにこそ
信じるのが
何より大切なことだと
私は、思います・・・

『自由を求めて』について

僕らはこの世に

遊びに来たわけではない

生存以上の目的をもって

生まれて来たはずなのに...

この世的なものに

うつつをぬかし

この世に生まれた意味を

失ってゆく

この世に生を受けたこと自体が

使命なのだ

自分たち人間の役割を

忘れてはいけない...

苦しみに振り回されては

いけない

肉体の我に振り回されては

いけない

その苦しみの本質を見抜くのだ

乗り越えてゆくのだ

本来のもとなるものに

かえる為に

全ては道なのだ

自由になるための

完全なる自由のための

この世は仮の宿り

この肉体は仮の姿

本来の自分ではない

真なる自分探しの旅

自由を求めて

自由を求めての

自由になるための...

全ては道

本来のもとなる自分に

出逢うための...

.....

そう思いながらも
なかなか・・・
自分を律することが
出来ずにいます・・・・

この世の瑣末なことに
追われて精神を疲弊させていく・・・・

そして・・・
弱っているからこそ
少し佇んでいるうちに
本来の旅の目的を忘れてしまう・・・・

気がつけば
もう・・・手遅れに近いところまで
きている・・・

もうどうすることも出来ないときは
せめて、仏神にすがるしかない・・・・

せめて・・・
信じるしかない・・・・

肉体に束縛されている
私たちは、翻弄され
迷い・・・弱く、儂いから・・・・

『心の渇き』について

あそこにも

ここにも

求めるものが手に入らず

さまよう人達がいる

その目に映る風景は虚しく

求めるものの幻影のみを

想い 追いかけている

ある人は異性を

ある人はお金を

ある人は地位を

ある人は名誉を

ある人は家を

ある人は健康な身体を

ある人は愛を

求めても 求めても

手に入らず

その想いは 渇き

その幻影は塩水のように

追いかければ 追いかけるほど

その塩水を飲めば飲むほど

渇きは増す

苦しみは増す

求めるものが

手に入らず

苦しんでいる間は

何も手にすることは

できないだろう...

.....
.

その苦しみは
生きている間
色々な形で、私たちを翻弄する

また、その原始的な欲求こそ
生きる意欲にもつながっている.....

それを
否定することはできない
この肉体において
調和する術を
どこかで持たなければ

この渇き.....癒えることはない.....

本当に、きりが無い
煩悩は、次から次へと現れてきます

生きるエネルギーが高まれば
その意欲は、ある欲求につながる
この生に.....それを乗り越える手立てとして
真理は、語るのかもしれませんが.....

『人の心を狂わせるもの』について

それは まるで

コントロールを失った車のように

暴走する列車のように

止められない

支配することができない

欲望という

暴れ馬に乗る 僕らの魂は

奪われる

正しい判断を

冷静な理性を

身体を飾ることへの

欲望を抑えきれずに

どんな手段をとっても

手に入れようとする

少女たち

退屈だからと

心の清らかさ 魂を

悪魔に売る

少女たち

自らの欲望のはけ口を

お金をちらつかせ

少女たちに求める

愚かな

男たち

正しい判断を失った

都会の亡者たち

肉体に属する

六つの欲望が

今日も

人の心を狂わせる

.....

貪欲は、尽きることがない・・・

私たちは、自由を満喫していると
思っているけれども
実は、この欲望に・・・

制御を失っているのかもしれない・・・

上からの規制は

自由を阻むものかもしれないけれども

自主規制は、必要だと

感じます・・・

この欲望を解き放った結果

哀しみにおおわれるのなら・・・

『生きる気力を失うとき』について

もう 二度と逢いたくない人と

また 逢わなければならない

苦痛に胸は痛む

その人の性格の刃が

他の人の魂に傷をつけていく

その痛みを耐えながらも

その意味を考えてみる

その人の心は

砂漠のように乾いている

その人の心は

今にも枯れそうな木のように

会う人のエネルギーを吸い取り

疲れさせてゆく

油断していると

不意打ちをかけるように

鋭い研ぎ澄まされた

刃のような言葉が飛んでくる

人はこの世で

自分を傷つけるものと出会う

人はこの世で

憎しみを抱く人とともに

生活をしていく

まさに 苦しみだ！

まさに

その苦痛に心を痛めるのだ

まさに

そのこと自体で

生きる気力を失う...

希望の明日をなくしてゆく...

嫌な人と会う苦しみは

今日も続く・・・

.....

怨憎会苦・・・

嫌いな人と会う苦しみ・・・

生きている限り続く苦しみ・・・

それは、人間がこの世に生を
受けたことよりの宿命的な
苦しみ・・・

これを避けることは
出来ないはずです

だからこそ
この世は
修行の場であると
お釈迦様は、説いたのでしょうか

嫌な上司、同僚、部下
取引先の人・・・

それぞれの生活の場で
この人さえ居なかったらと
思う人がいるはずです・・・

その人との
関係をどう考えていくかが
ひとつの問題でもあるでしょう

それに解答していくこともまた
人生修行の道なのかもしれませんね・・・

『悲しみに耐えられない』について

愛する人との別れほど
つらいものはない

ポツカリあいた 心の際間に
冷たい風が吹く

朝 起きて
涙でまくら濡らしている

ふと思うと
その人のことを考え
胸の痛みこらえている...

その別れは
死であったり

その別れは
運命であったり

その別れは
誤解であったり

その別れは
エゴであったりするけれど

別れがきてはじめて分かる

その人が
自分自身だったと
自分の分身だったと...

その別れは
まるで
自分の一部を奪っていくように

引き裂かれた
胸の痛みは消えることがない...

愛する人との別れ

人は この悲しみに

耐えることができないでいる...

.....
.

愛別離苦.....

愛する人とわかれる悲しみ

誰も避けられない現実

嫌な人とは
よく出会う.....

けれども.....
愛する人とは、別れてしまう.....

この現実
辛すぎます.....

けれども
この世の宿命でもあります

耐えられず
膝を落とすこともあるでしょう

肩を落として
歩くこともあるでしょう

しかし
この世限りだという思いから
脱せれば.....
再会できると
信じられる.....

「霊なる永遠の生命をもつ者として」について

この世は
苦しみに満ちている

至る所に
あらゆる所に

その苦しみが
広がっている

決して誰も逃れることは
できない

決して誰も避けることは
できない

この苦しみ

全ては
この肉体から くるのか？
人間はこの肉体という
十字架を背負って
生きていかなければならないのか？

心を清まして
心を清らかにして
この肉体という我から離れてみれば
肉体は本当の自分ではないと
気がつくはず

そして

そこから発生してくるところの
欲望も自分ではないと
気がつくはず

本当の自分...

霊なる永遠の生命をもつところの
思考せるエネルギー

その自分自身に
気づくことができるなら
苦しみは
ひとときのものと
魂をきたえるものと
感じるはずなのに...

.....
.

しかし
肉体から発生する欲望は
生きる意欲と密接となり
私たち自身を眩ます・・・

特にその肉体の頂きを
極めようとする成長期には
ものすごい熱情となる・・・

それに迷い
それに悩む・・・

それは、恋なのか
愛なのかも分からぬまま・・・

一生を後悔に終わらせる
こともある・・・

けれども
年老いても尚
その傾向は
消えることのない煩惱・・・

「氷、多ければ水多し」と言った

親鸞さんのように
愛に変えていけるように
その生きる意欲を
愛に転化できるように
思うしかありませんね．．．．

私もいつも
悩み、苦しんでいます．．．
多分、一生涯の格闘だと
思います．．．．

『たとえば、今死ぬとして』について

たとえば今 死ぬとして

後悔しないといえるかい？

たとえば今 死ぬとして

やり残したものはないと言い切れるかい？

たとえば今 死ぬとして

笑顔 浮かべることができるかい？

たとえば今 死ぬとして

未練なくこの世を去れるかい？

もしも

まだ 死ぬわけにはいかないと

思うのなら

明日 生まれ

新しい生を有することができる

それが

未来ということ...

未来があるということ...

.....
.

だからこそ
今、命あることに
感謝ができる・・・

だからこそ
明日にかけることができる

だからこそ
まだ死にたくないと思う・・・

瞑想の基も
ここにあるのだと
私は、思います・・・

たとえば
今、死ぬとして

自分は、どう思うのか
その命を正しく使ったと言えるのか

やり残したことは
無かったのか・・・

必ず
もう少し時間があればと
いう思いが
あふれてでくる・・・

その時
生あることへの
感謝が湧き出でて

今日を
やり直す・・・

生きるとは
その連続かも
しれませんね・・・

この世の美しさの背景に

気高い精神を

見つけるものでなければ

それは にせもの...

にせものの金は輝くけれど

その輝きすぎるもののなかに

嘘がある

本物の美は

落ち着きある調和のなか

決して人の目を害さない

人の心をかき乱さない

仮面の下にある

嘘はいずれ暴かれる

美 それは永遠を内包する

美 それは人をして人以上にならしむるもの

美 それは背景にある精神の気高さ

美 それは内なるものの輝きが漏れくる光り

きらびやかなファッション
美貌を競い合う女性達・・・

地位や権力、お金に執着し
戦利品を身に纏う男達・・・

自由な社会の
自由な装い
それはそれで時代を飾る
ひとつの装飾では
あると思いますが・・・

時折・・・
美について
考えていただけたらと
美しきもの・・・

それは、精神の発露から生まれ
その行為の無私性に完結する
美の精神・・・

祈り、愛、許し
そして信仰という
何千年もの間に育んだ
人間の精神の結晶に
忙しいさなか
ふと、考えてみては
いかがでしょうか・・・

きっと
あなたの心にもある美は

人間の証明にも
なるのではないかと
考えます・・・

『金貨』について

僕らは生まれたとき

抱えきれぬほど

金貨を与えられた

ある人は

その金貨を元手に

さらに金貨を増やす

ある人は

その金貨をなんのためらいもなく

ドブに捨てる

人は一日

24枚の金貨を使う

君は

その金貨を

何に使ったのか？

大切な

その金貨を...

.....

時間は、24時間
誰にでも平等です

そして
その時間を使って
人生が分かれています

若い頃の有り余る時間を
ドブに捨て
老年に後悔するのは
常でありましょう・・・

けれども
その時間を
使って、大事を成す人もいれば
成さない人もいます・・・

やがては、すべての人に平等に
訪れる死を向かえ
何を思うのでしょうか・・・

今日一日の24枚の金貨・・・
大切に使いたいですね・・・

『詩人たちの哀しみ』について

いにしえの昔から

人々は詩を愛してきた

悲しいことがあれば

悲しみの詩をつくり

うれしいことがあれば

喜びの詩をつくり

つらいことがあれば

苦しみのあえぎを詩にうたい

人 それぞれの願いを

詩に託し

神に捧げた

詩は風のようなもの

風はものを動かし

風はものの形を変え

風は人を動かし

風は人の心を変える

天にあっては

仏神を動かし

慈悲を承る

美しい言葉を

もっとも美しい配列に並べ

限り無く崇高な精神を

永遠に封じ込め

その余韻の響きを奏でた

詩人たちよ

ひとつの完成された

美しい心の絵を

ありありと映し出す

詩人たちよ

ああ 貴方たちの嘆きが聞こえる

詩を愛する人が

ほとんどいない今

詩人たちの哀しみの詩が

痛いほど

胸に突き刺さる...

.....

ことば遊びはやめて

本来の仕事をしませんか.....

詩人は、特段の役割を

与えられている

その役割を果たしませんか.....

無名でも

上手くても

下手でも

あなたの魂からの

純粋な言葉が

あふれ出るなら

それは、詩です.....

それは、

詩を書いている人が

どう思うかにかかっています

読んだ人が

どう思うかではありません

書いたあなたが

どう思うかです.....

『時代という劇』について

人はなぜ

地上に生まれてくるのだろう

人はなぜ

地上に舞い戻ってくるのだろう

あるものは

欲望にひかれ

苦しみの種を蒔く

あるものは

過去をあやまちを清算するために

苦しい人生を送る

あるものは

明確な意志を持ち

ある仕事を完成するために

目的ある人生を送る

どんなにつらくとも...

色々なものをかかえて

この地上という舞台に

次元のカベこえて

一同に会し

時代という劇を創りあげてゆく

そして

やがては時代という劇は幕をおろし

役者はそでに消えてゆく

また

新たなる劇を

構築するために

また

新たなる役を

演ずるために...

.....
.

人は、なぜ生まれてくるのでしょうか

その問いに対する
ひとつの答えとして
転生輪廻・・・

人は、時代を越え、人種を越え、地域、民族を越え
また宗教、思想を越えて
ある時代に生まれ一堂に会する

この考え方は

民族紛争のひとつの解決策になるのではと
思われます・・・

私たちは
その意味からも
兄弟であり
姉妹であり
皆、等しく仏神の子といえと
私は、信じています・・・

『信仰は勇気の証』について

宗教を批判する人達

声高々に

宗教にすぎている弱さを

バカにする

宗教にすぎる者を

異常とする

宗教を弱い人間のものと吹聴し

そんなものに頼らない自分を

強い人間だと自負している

その人は

信仰という言葉の意味を知らない

信仰という言葉が世に根付くまで

どれほどの血が流れたか

どれほどの尊い命が

失われたかをその人は知らない...

一人 十字架を背おいて

孤独の中 死んでいった聖者を

臆病だということか

石を撃たれ

微笑みて

死んでいった者を

弱いということか

死刑台に上がっても尚

神の法を曲げず

人間の尊厳を失わなかった

聖者を異常者ということか

宗教という言葉には

命を賭けて信仰を守った者の

勇気が刻印されていることを

知らないとは

言わせない

.....

戦後民主主義を
もろに浴びて
仏神の信仰を拒否している
人々のなかに
目に見えないものに
頼る愚かさを
声高々に発することが
知的であると考え風潮があることは
否めません・・・

しかし・・・
その目に見えぬものに
怯えているのも事実

確かに
学校教育の中に
心の教育を排除した結果
子供達の心を解体した
報いを・・・
今、受けているのではないのでしょうか

人間のモラルは
過去の聖者たちの言葉と行いによって
形成されている事実は
動かしようもない真実です・・・

つまり
心の問題を掘り下げていけば
その問題に真っ向から
回答した人たちというのは
仏陀、キリスト、モーゼ、孔子、ソクラテスといった
聖者達ではないのでしょうか・・・

彼らの言動が
その後の倫理を決定していったといっても

過言ではないでしょう・・・

そして

彼らと彼らの弟子達は

命を懸けて教えを伝えたという事実も

動かし難いものでありましょう・・・

信仰という言葉の重みは

彼らの命がけの人生が

積み重なっているとは

思いませんか・・・

『生か死か』について

純粹すぎる

その念い

どこまでも どこまでも

自分の心 掘り下げ

清らかな

地下水を汲み上げ

清廉な香り放っている

けして外界の雑踏の塵にまみれることもなく

しかし そこにとどまっていながらも

この世の価値に振り回されることもなく

岩のように動かない

詩人たちの清らかな調べ

詩を書かなければ 死か

詩を書きてこそ 生か...

と問う厳しさに

その魂の美しさに

僕は ただ 頭を垂れるのみ...

.....

今も過去も

詩人達の

芸術家達の作品に触れ

その精神に・・・

魂を洗淨して下さった

芸術作品に対して

『ありがとう』の気持ちを

言葉にしました・・・

人生に潤いと

余裕を与えてくれた

その作品達に

心から感謝しています・・・

『尊厳あるものとして』について

自分で見たもの以外

信じないなんて物知り顔で

言う人がいる

その人は人間ではない

人間の証し

それは

目に見えぬものを

信じることから始まる

手で触れず

耳で聞こえず

目に見えぬもの

しかし

確かにあると

信じ仰ぐことから

人間としての

尊厳を与えられたものとして

生きたといわれるのだろう

.....

愛は

目に見えません

希望は

目に見えません

勇気も

目に見えません

夢も

目に見えません

私たちは

目に見えるものと

目に見えないものの中を

生きています・・・

どちらも

とても大切だと

私は、考えています

そのバランスを

取ることが

この地上での生きる意味でもあると

私は、思います・・・

『悲しみの心、哀れみの涙』について

美しい魂は

苦痛に悶える

この世に蔓延する

不純なものに耐えている

この世の中の汚れきったもののなか

微かな美しさを慰めに

膝を抱える...

しかし...

立ち上がる

誰にも気づかれず

世の中を潤そうと

ふたたび

美しい世界 取り戻そうと

生命を削り

悲しみの心 あわれみの涙で

この世の汚れ拭おうと

美しい魂たちは 生命を賭ける...

.....

無名な

美しい心の持ち主に

時々、会うことがあります・・・

無私なる無名に

胸を打たれることが

時折あります・・・

私は

その美しい魂に

出会えた事を

詩に託していきたいと

心から

思います・・・・・・

『ひざをあわせて』について

なぜ

人生というものを

真正面から見ようとしらないのか

なぜ

人生という意味を

真剣に考えようとしらないのか

横たわる時間のなかに

その問いに対する答えこそ

生きた証し

与えられた

制限あるひとときのなか

わからないことばかりだとしたら

語り合ってみないか

ひざをあわせて

考えてみないか

ひざをあわせて

人生という人が生きる意味について...

.....
.
いい映画を見たときや
本を読んで感動したとき
誰かと語り合うって
とても大事なことだと思います.....

そんな、パートナーを
見つけられたら
一生の宝.....

そんな人と
人生について
深く、何度も語り合えたら
きっとその二人の絆は
強く切れないものに
なるに違いありません.....

私は、そう思いますよ.....

『もらうか与えるか』について

苦難があり

困難がある

挫折 病気 貧困 失恋 人間関係

この世の苦しみを考えてみる

その意味はなんなのか？

どうしても

押し寄せてくるものなのか？

苦難や困難をとおして

なにかをわからせようとしているのか？

なにかを教えようとしているのか？

仏の比喻が隠されているのか？

おそらく

迫られているものがある

選択を

愛を与えるか

愛をもらって生きるかの...

どちらの側に立つのか...と

.....

厳しい選択だと思います・・・

なぜ、と思う方も多いと思います・・・

けれども

誰かが愛を与えなければ

この世は砂漠と化してしまう・・・

こんなにも

愛に渴いている人が

大勢いるなかにおいて

殺伐とした競争社会のなかにおいて

誰かが与える側にいかなければ

きっと・・・

ぶつかり合う人と人の間で

みんな疲れ果ててしまう・・・

もし・・・

あなたが

生かされていると感じ

それに対する報恩を

愛に変えたのなら

この世は、少しずつ

花園となるのではないかと

私は、思います・・・

『愛するとき』について

人を愛するとき

人はやさしさを知る

人を愛するとき

人は空想的になる

人を愛するとき

人は悲しみを知る

人を愛するとき

人は謙り謙虚になる

人を愛するとき

人は行動的になり

人を愛するとき

ほのかな希望にすべてを託す

人を愛する熱情を

自分のなかに見つけたとき

人は

生きる喜びにみたされる...

.....
.
人は、愛がないとき
何かいいことないかなと
ため息をつく.....

人は、愛がないとき
生きている意味を
見失う.....

人は、愛があれば
お金が無くても
生きる意欲にあふれる

人は、愛があれば
どんな困難にも
立ち向かえる

愛は、すごい.....

『試されているものとは』について

僕らは
何をしに
この世に生まれたのか？

魂を鍛えるため
この時代を経験するため
人生の真髄をみつけるため
他の人に良い影響を与えるため

一秒たりとも一分たりとも
無駄にはできない
貴重な時間
この世の有限の限りのなか
どれだけ
素晴らしい心を構築できるか

色々な逆境のなかもあるだろう
色々な苦しみもあるだろう
色々うまくいかないこともあるだろう

そのなかで
どれだけ
清らかさ維持できるか

とれだけ
他の人を良い方向にむけることができたか

それを
試されている...

.....

最初の目的を
忘れてしまうほど
日本は、豊かになりました

テクノロジーに溢れ
生活は、とても便利になり
自由は、規制がほとんどかからずに
乱用されています

目に映るものは
目新しく刺激的で
それだけでも楽しくて
また、沢山ありすぎて
自分を見失うほどです・・・

でも・・・
少し、心の余裕ができたなら
こんな事を考えてみては
いかがでしょうか・・・

哲学的でもあり
宗教的でもある命題

人は
なぜ、生まれてきたのかを・・・

『生きているだけで』について

くるおしいほど
心を波だたせるものがある

くるおしいほど
理性をゆさぶるものがある

くるおしいほど
熱情が身体を駆けめぐるときがある

生きている血のかよった人間ならば
よせてはひいてゆく波のように...
みちてゆく潮のながれに
逆らうことができずに

ただ
その力に負けてしまうものなのか...

波打ち際にたっていると
バランスをとっているだけで
精一杯になる

恋をして
押し寄せてくる激情に揺さぶられると

生きているだけで精一杯だ...

.....

恋は、くるしい・・・

片想いは

心が張り裂けそうになる・・・

おもいは
届かず・・・

ただ
ただ・・・
遠くで見つめているだけ・・・

このおもい
知られたくって
でも・・・
隠しておきたくって
悩む日々・・・

相手のことは
何でも知りたくって

でも・・・
怖くって・・・

尻込みしてしまう・・・

そんな日々の
懐かしさに
今は、もう過去の
情景に
夕日を見るのは

大人になって
しまったからかなあ・・・

『生きるとは、人を愛すること』について

人はなぜ

人を好きになるのだろうか...

人はなぜ

人に恋するのだろうか...

人はなぜ

人を愛するのだろうか...

人間の本能か

それとも

カルマか...

心 乱され

胸 引き裂かれ

身体 火照り

自分自身 バランスを失う

その人のことで

一日がはじまり

一日がおわる

それは

ひとときのものなのだろうか

めぐりくる

季節のようなものなのだろうか

やがては

過ぎ去ってゆくものなのだろうか

しかして
人間の生きる意欲と
不可分のものなのだろうか

それならば
こう 思うしかない

生きるとは人を愛すること
ならば
誰も不幸にしてはならないということ

そこに
人生が色あせないための
ひとつの
芸術がある...

美しい人生がある...

.....

愛は、生きていくうえで
もっとも大切な思いです

人生の最後に
愛があれば・・・
人は、微笑みを浮かべ
旅立てるもの・・・

しかし・・・
愛につまずくのも
人間です・・・

幼いものは

肉欲と愛が混乱して
悲しみにくれることもある

大人になってさえ
間違いを犯して
取り返しのつかない
出来事に
人生をくもらせてしまう・・・

愛は、本当に
難しい課題です

でも・・・
愛がなかったら
人間は
寂しくて
弱くて
悲しくて
とても生きていけない・・・

愛は
人を最も強くする
絆・・・

だからこそ
生きて、愛して
そして、愛されて
結びつけあいながら
人として育てゆくのでは
ないでしょうか・・・

私は、そう考えます・・・

『耐えているだけで』について

恋い焦がれ
愛する人とわかれた
悲しみは
ときのたつほど
つよくなる...

その悲しみのなかでも
人は生きてゆかねばならない

生きることの
せつなさよ...

日常生活を送ることの
やるせなさよ...

ふたたび
快活に笑える日を
望みつつ

ただ
耐えていくことだけで

今は、精一杯だ...

.....

心の一部が
無くなったかのような
強い悲しみ

時間が経てば
思い出は
強くなり
よいことだけが巡る . . .

ため息は
心の力を抜き取り
弱っていく . . .

ここに
いるだけで

立っているだけで
耐えているだけで
精一杯 . . .

愛している人との
別れは . . .
とても . . . つらい . . .

『悲しさと愚かさ』について

愛の深さにとまどいながら

愛を解き明かせずにいる...

人と人との間にあるものだけれど
その愛が見えなくなるときもある

神は自分 御自身のかわりに
地上に愛を送られた

愛を理解することが
すなわち
神 御自身を理解させるようしむけた

この
遠大な法則のなか
あふれる愛のなかに

愛がありすぎるからこそ
それに気づかず
生きてしまう
人間の悲しさが

愚かさになる...

.....

私たちは

当たり前の事に
鈍感です . . .

日が昇り
日が沈み
飢えることなく
明日が来る . . .

仕事が沢山あり
温かい部屋があり
夜が迎えられる . . .

家族があり
友だちがいる

風があり
雨が降り
四季があり
花が咲く . . .

こんなにも
たくさんの
愛にかこまれていて
まだ、愛が欲しいのかと
言われそうですね

『美のかけら』について

ジュピターは

うつろいゆくものだけに

美を与えた...

ああ

この世の美のはかなさに

涙することとして

おもいのなかに

美の衣を脱ぐときの

あわれみなのか...

美は止まらない

美しかったときの記憶だけ

美のかけらとして

のこるのみ...

.....

花は散り

緑は枯れ
地は荒涼とし
冷風は吹き荒ぶ・・・

されど
人間は
生きていかねばならない・・・

美しくなかったら
それは、それで悲しいし
美しかったものは
それより更に
悲しみは、苦しみとなる・・・

でも・・・
生きていかねばならない・・・

まるで
夏の短さに
怯える子供のように

そのひととき
美をとどめたいと
あがく・・・

美は移ろう必然に
私は、立ちつくすのみ・・・

『恋は、悲しみのはじまり』について

おもいがけず
人を好きになることがある

恋い焦がれ
愛を育みたいとおもうようになる

自分の心
抑え切れずに
その時期をとびこえ
相手の心

踏みにじる...

二人
傷つけあい
目をそむけあう
にがいおもい...

恋のはじまりは
悲劇をひきおこす
悲しみに
みちている...

.....

恋は、その激情から
その時を待てずに
相手を傷つけてしまうことが
あります・・・

抑えきれない

感情を

ただ、相手に伝えたくって
沸騰したお湯を浴びせるだけに
なってしまうこともあります・・・

相手は・・・

ただ・・・驚いたり
そんなつもりでは
なかったり・・・

そんな行き違いが
悲劇を生むこともあります・・・

お互いの

好きになる速度が一緒なら
恋は実るのでしょうか・・・

それは

やはり・・・
奇跡に近いのかも
しれませんね・・・

『我がベアトリーチェ』ダンテに捧ぐ、について

彼の人が会釈するとき

微笑みが広がり

その空間に光がほとぼしる

貴方の前に立つとき

思考は途切れ

言葉は宙に舞

そして...落ち

ただ...うつむくだけ

貴方の瞳に目をあわせたとき

透明な濡れ色

湖のような瞳に

溺れそうになり

息苦しくなる...

貴方が通り過ぎていったとき

ため息とも喘ぎともつかぬものが

僕を支配する...

しばらくすると夢から覚めたように

現実に戻り

その現実にも また...

ひとつ...ため息をつく...

.....

この詩は

恋人が会釈するとき

というダンテのソネットを

読んで、それと同じモチーフで

私が書いたものです

詩聖ダンテには

遠く及びませんが

女性に対する永遠のあこがれが

伝わればいいなあと思っています

男のロマンかもしれませんが

そのように女性を見続けることが

できればいいなあ・・・と思っています

『激しすぎる幻に』 について

この世の幻のなかで

たしかに

生きる意味感じとり

やがては

すべて夢のように

微かな残り香 残すだけ...

すべては幻か

この生きるという舞台での

ひとときの劇なのか？

ならば

せめて 精一杯の愛情表現を示す以外

なんの価値もないことを知るには

激しすぎる

この幻...

.....
.

この世は、仮の宿り

人は、旅人・・・

確かに

そうかもしれませんが

それにしても

苦しすぎる・・・

愛に苦しみ

愛のなさに苦しみ

人間関係に躓き

その難しさに

悩む

これが仮の宿りなのか . . .

これが本来の世界では

ないというのか . . .

と思うほど現実には

厳しい . . .

その幻に

いつも . . . 苦悩しています . . .

『言葉の重さ』について

自分が放つ

その一言が

天国をつくり

地獄をもつくりだす・・・

なぜなら

人間には心があるから...

機械にいくら油を注そうとも

車にいくらガソリンを入れようとも

決して喜びはしない

なぜなら

心がないから...

人間には心があるから...

鼓膜が振動して

頭が理解するのではなく

心が

確かに感じ取っている

だから・・・

言葉の重み

その一言が

誰かを悲しませ 喜ばせる...

.....
.
本当に、言葉は重いと
感じます・・・

何気ない一言が
取り返しのつかない
一言になってしまったことは
人生のなかで
幾度かあったと思います・・・

こんな一言が
こんなにも
相手を傷つけていたのか・・・
と試してみても
もう後の祭り・・・

言葉は、慎重に選ばなければ
なりませんね・・・

たとえどんなに親しくとも・・・

『精神が枯れる前に』 について

明日に希望を託して

夢見てきた

その

暮らしさえ

希望に答えるものだったのだろうか？

人々は飢えることを恐れ

飢えに泣かないと誓った

あの日から

とっても大切なものを

犠牲にしてきたのかもしれない...

たしかに

身体は飢えない

しかし

心の飢えはまだ続いているのに

心の乾きは癒えていないのに

まだ身体を満たすことに汲々としている

今 枯れて死んでしまおうとしている

精神に糧を与えないなら

僕らは滅びるしかない...

.....

精神的な修養を

放棄して

60年.....

経済的な発展は

確かに、遂げましたが

しかし.....

精神は、枯れてしまった.....

信じる心は

どこへいったのでしょうか

夢や希望は

テーマパークにしか

ないのでしょわか.....

これが

私たちが望んだ

幸福の姿だったのでしょわか.....

二千年前に

愛を説いた方の言葉は

忘却のなか

『愛し合いなさい、許し合いなさい

更に、あなたの敵のために祈りなさい』と

やさしく、激しく語った

その笑顔は

悲しく微笑んでいるように

感じるのは、私だけでしょうか・・・

『小さく震えながら』について

絶望と希望が同居する

心のなかで

同居する

相矛盾する

ふたつの表と裏

絶望の確率が

高ければ高いほど

胸かき乱され

その望みの少なさに

嘆くのは

恋する人

絶望に押しつぶされながら

どんな夢を見る？

それが 生きていくことならば

ただ 小さく震えているしかない...

恐ろしい嵐がすぎてゆくのを...

.....

人を
突然、好きになることがあります

それは、予期せぬ嵐のように
心をかき乱す

胸が張り裂けそうに
痛む・・・

この嵐をやり過ごそうと
じっと耐えているけれども
少しでも気を抜けば
体ごと持って行かれそうです・・・

そんな苦しみは
誰もが経験することでも
ありましようが・・・

しかし・・・
分かってはいるけれども
辛い・・・ですね・・・

『消えゆく泡のごとく』について

よせる波

静かに

僕らを洗ってくれる

くだける波

とびちる泡

そこに

いくつもの夢の終わりをみるのは

僕だけだろうか

砂浜にこしかけ

朝日に 夕暮れに

夜の星たちに

夢を語った日は

幻のように消えてゆくだけなのだろうか？

あまりにも生き急ぎすぎる

僕らの時は

波のように

よせてはひくだけのものなのだろうか？

泡の如く

消え去るものだけなのだろうか...

.....
.

時折、一人佇み

人生を振り返ってみると

そこには、いろんな人たちとの

物語が、その場面が

思い出される.....

果たして

自分が正しかったのだろうか.....

それとも間違っていたのだろうか.....と

傷つけてはいなかったか

思いは、伝わったのか.....

そんな思いを巡らせていると

いつしか心は洗われ

また、やり直していこうという

気持ちが

心の奥から湧いてくる.....

今日という日.....

ここから新しいスタートを

切るために.....

洗い立ての心は

春の香りがするのかもしれませんが.....

『秘められた願い』について

光 はなたれ

光 かたちつぐられ

光 個性を持ち

光 つどいあう

地球という舞台の上で

様々な役を演じ

その時代のシナリオを

確かに感じ取り

また 役を終え

光に戻る

仮に存在している

この世界のなか

仮に存在している

僕らがいる

仮に存在している

この世界と

仮に存在している

僕らを否定することによって

仮に存在している

この世界と僕らが

仏の慈悲によって

成り立っているという事実を

肯定することができる

そこに広がる世界

まるで...

光の芸術のように

すべてのものを

向上へと

導こうという

ひとつの

願いが

秘められている...

.....

私たちが

信じる以前に
この愛があり
そして、この愛のもとに
生かされている・・・

私たちが
些細な議論をしている間にも
絶え間なくそそがれている
愛・・・

人間を裁くことなく
見つめている

ただ、すべてが向上することを
願って・・・・

『風向きが変わるまで』について

暗い相念にすいこまれ

光 闇に包囲され

今 まさに

壮絶な戦いが繰り広げられている

真実を語っても

冷笑され

一笑に付されてしまう

この時代が過ぎていくのを

待つしかないのか...

向かい風に

足を踏んばって

しばしたたずみ

風向きが変わるのを

ひたすら

仏に願う...

.....

こんな
空回りを
いつもしています・・・

でも・・・
私は、私の信じる道を
いきたいと思います・・・

過去詩人が
決してしなかったことが
ひとつあります・・・

それは
主が同時代に
生まれ合わせたときに
その真理を学び
詩として
伝えるという事業・・・

私は、詩人として
この役割を
担っていきたいと
思っています・・・

どんなに笑われても
どんなに批判されても・・・

『別々のものではなく』について

たえまなく

続いている

人々の歩み

どこで

間違ってしまったのか？

肉体と精神を切り離して考えることで

暮らしは楽になったけれども

失ったものは

大きい...

男と女が別々のものではないように

肉体と精神は別々のものではない

離れ離れの悲しみは

不幸せの烙印を

額に刻む...

.....
.
唯物的な考えは
ここ百年のはやりのように
人々の心を浸食してしまった・・・

戦争に負け
精神的価値を
忘れ去った日本人は
柱を失った家のように
いつ崩れるかわからない
不安のなかを生きている・・・

経済だけで
疾走した結果は
子供達の心をむしばみ

金がすべてという
価値観以上の価値を
大人達が示すことが
できない以上
より金銭的価値の高いものに
依存してしまうのは
仕方のないことになってしまった・・・

それゆえに
心は空洞化し
ものに溢れても
不安はぬぐえずに
いつも・・・イライラして
爆発寸前の状態をつくりだしている・・・

今、もとに戻るときに
来ているのかもしれませんが
精神と肉体は、ひとつであり
心を調和することが
肉体を調律することにつながり
心と体が調和してこそ
真の健康といえるのではないのでしょうか・・・
お釈迦様が言った
中道とは、きつとこのようなことだと
私は、考えます・・・

『涙がつたうわけ』について

心のなかにある

美しい

確かな輝き純粹さ

けがれることもなく

そまることもなく

たとえ

表面を

覆われたとしても

その光

もれてくる

ごまかしても

この世の価値に

迎合したとしても

その輝きの価値

自分のなかに

感じているはず

だから

時折...

わけもない涙

頬をつたう...

.....

涙が頬をつたうわけは
自分が一番知っている.....

その自分から
目をそらさないで
その自分の
言葉を確かに感じ取り
今の自分を修正していく

嘘のつけない
自分の言葉は
時折.....
涙となって
語りかけてくる.....

『罪のおもさ』について

貴方の愛に救われた

僕は救われた

奈落の底に墮ちるところ

優しいまなざし

深い愛

傷ついた心

冷たい身体を

暖かくくるむ

貴方に背いたとしても

貴方に罪を犯したとしても

そのまなざしはかわらない

深い愛の暖かさはかわらない

貴方の愛を見失ったとき

僕は渴き苦しむ

それは

貴方の愛を拒絶した

僕自身の罪のおもさゆえに

.....

私たちは、大きな愛のなか

生かされている・・・

当たり前のなかの

奇跡・・・愛・・・

私たちが不安なのは

私たちが苦しいのは

私たちが寂しいのは・・・

その愛から

心をそむけてしまうから・・・

その罪さえ

永遠の時間のなかで

許す愛・・・そのまなざしは

子供の帰りを待つ親のように

手を広げて

部屋を暖めて

家の明かりを灯して

私たちが道に迷わぬように

迷っても、見つけられるように

私たちの帰りを願っている・・・

愛・・・に

私たちは・・・つつまれている・・・

『血の池に落ちる前に』について

巨大な悪が

日本をおおう

人々はそれに気がつかない

じわり じわりと

しのびよってくる...

知らず知らずのうちに

人を悪の波動にそめてゆく

人々を色情のとりこにして

血の池に落として

ニヤリとわらっているやつがいる

今こそ理性で

己の心を制御して

知性で その意図を見破り

愛の力で

人の心を守るのだ！

心を害するものから

魂を腐らせるものから

.....

本当の公害は
魂を腐らせようとする

忍び寄る
悪は、自分の心の間隙を
狙ってくる・・・

甘いささやきで
意志を鈍らせ

みんなやっているからと
理性を麻痺させる・・・

そのときにこそ
自らを戒める・・・

そのときにこそ
揺れない心を創るのは

日々の鍛錬に
他ならない・・・

『愛し合う二人にしかできないこと』について

男と女

見つめ合う

友達同士

目を見て話すこともある

人と人

目をみることはできる

見つめ合うことはできる

けれども

一緒の方向を見つめること

同じ明日を見る心

それは

愛し合う二人にしかできない

遠く離れた二人でも

心と心 かよいあうのは

一緒の方向を

見つめることができるから...

男と女 友達同士、

見つめ合うことはできる

けれども、一緒の方向を

見つめることができるのは

愛し合う二人しかできない...

.....

愛し合う二人は

同じ方向を見ている・・・

それは、同じ夢を

共有して、未来を共に誓う

絆・・・

相手を見過ぎては

欠点ばかり目につくもの

愛し合う二人は

並んで・・・並んで

少し離れて・・・

二人で創る家族のお互いの柱となって

家を支える・・・

その柱は、距離がくつきすぎていれば

その屋根を支えられなくなるから・・・

『抑えきれない信じるという衝動』について

永遠という言葉は

肉体に宿る僕らには

見えない

つかめない

永遠という言葉は

心のなかから

抑えきれない信じるという衝動の

積極的な念いの投げかけによって

心 全体で感じること

確証もなく

証拠もないなかから

空気をつかむように

手ごたえのないものだけれど

信じることを決心したときに

確かに現れる

有限の自分のなかの無限の永遠

老いることもなく枯れることもない

真実の自己...

.....

人間に本来備わった
信じるという本能・・・

お金を信じている人もいる
ものを信じている人もいる
地位を信じている人もいる
名誉を信じている人もいる

けれども
それは、信じても
やがては、消えていく
砂上の楼閣・・・

一陣の風に
吹き壊されてしまう・・・

諸行無常・・・
盛者必衰の理・・・

しかし、
目に見えぬものを
信じるものは
永遠のなかを
生きることが許される
ひとつの
自分への扉・・・

それを開ける鍵は

信じるという

おもいだけ . . .

『橋の上から』について

橋の上から

川の流れを見つめていると

川が流れているのではなく

橋が自分が

動いているような錯覚におちいる...

川の流れ

ゆっくりと

とどまることなく

大きな力を感じる...

流れる川

流れていった時

流れていった出来事

みんな懐かしく

ひとつ ひとつの事柄に

ほろ苦さを感じ 少し恥ずかしくなる...

僕は時折 橋の上から眺めてみる

自分の人生を

今、現在という橋の上から...

.....
.

多くのものが
流れていった.....

思い浮かんでは
消え
また、思い浮かんでは
消えていく.....

それでも尚、
生きていきたいと
思います.....

私が学んだすべてを
私が経験したすべてを
私が愛したひとたちを

すべて.....
詩に変えて残したい.....

それが
私の生きた
証しだから.....

『胸を張って』について

自分の運命を

自分で切り開く

力強さ...

環境や時代に流されることなく

自分を輝かせていく

それは

言い訳することなく

他人のせいにすることなく

自らの責任において

自分の力で幸福を勝ちとっていくこと

苦難や困難のなかで

つかんだものこそ

人生の宝石であると

胸を張って

堂々といえるのは

真に生きたという証にほかならない...

.....

成功とは
一日一日を
生きた証に他ならない

それは
さわやかで
すがすがしく
堂々と
多くの人に差し出す
自分のなかの
宝だから・・・

それは・・・
苦しみのなかの
悲しみのなかの
悔しさのなかの
真珠だから・・・

その輝きに
嘘はない
その品位に
誤魔化しはない

それは
晴れ渡る空の
一陣の風だから・・・

『君よ、勇気という靴を履け』について

有限を生きるなかで

有限を忘れる

生まれ落ちてのち

たくさんの財産を使い果たし

借金ばかりになっていく...

僕らはこの世に

愛を投げ掛けに来たというのに...

『難しいことはわからないよ』

『幾ら語り合ったとしても世の中よくなるよ』

そう嘲る青年達の心

光りを失いかけている...

僕らが歩いて行こうとしている道は

険しいかもしれない・・・

だからこそ

力が湧いてくるというもの

その道はデコボコかもしれない

その道はガタガタかもしれない

ならば

君よ勇気という靴を履け！

進んでいこうとする意思に

正義がある

可能性への挑戦がある

無限への挑戦がある

どんな困難な道だとしても

諦めてはいけない

挫けてはいけない

なぜなら

その先に見える

おぼろげなでいながら確かな夢こそ

人類の理想なのだから

僕らの生きる目的なのだから...

.....

この世に
何をしにきたのか・・・

自分を探しに来た？

しかして
それさえも忘れるほど
没頭して
夢を追いかけることが
できたら・・・

夢なんて・・・

そう思うかもしれない・・・

けれども
生まれる前の
自分は・・・

入学式の時のように
ドキドキしながら
眠れぬ興奮に
胸を躍らせていたはずなのに・・・

忘れているだけの
その思いは・・・
心の片隅で
うずいている・・・

さあ・・・
もう一度・・・
勇気を持って

この日本に生まれ
恵まれた環境のなかで
自分が何をしにきたのかを

考えてみる . . .

ほら . . .

心は、知っている

心は、わかっている

誰も教えてくれない

そのわけは . . .

答えを知っているのは

自分の心だけなのだから . . .

『今日も生きる意味』について

探し求めている

心のうずき

感じつつも

確かなものなどなにもない

一瞬の心のなかをよぎる

閃光にもいた

まぶしさ

それが本来の自分の姿であるという

力強い意思...

心が空虚に悩まされる日もある

欲望に翻弄される日もある

失意に明日さえ見えない日もある

手を伸ばして

つかめそうな つかめない

光 求めて

今日も

生きている...

.....

悟りとは

得ようとして、得られるものではない

得んと欲せずして、得るものである

まるで、それは

蝶が捕まえようとすれば

逃げてしまうが

静かに

憩っていると

肩に舞い降りるが如く.....

これは、仏陀の言葉ですが

私たちの生きる意味も

これに近いのかもしれないね

得よう、得ようとしてもがいているが

それから、離れたときに

幸せが訪れるのかもしれないね.....

今日も肩の力を抜いて

一日をはじめましょう.....

『最大なるもの』について

失意のなかで

希望を見出すことできたなら

君は最大なるものを

見出したことになる

失意のなかで

いままで続けてきた

努力を放棄することなく

変わらぬ明日を求める気持ち

持続することができたなら

その悲しみは

本当の意味となる

どんなことがあっても

失意を絶望にかえてはいけない

悲しみを絶望にかえてはいけない

自分の人生の意味を

失ってしまうことになるのだから

最大なるものを

捨ててしまうことになるのだから

二度と

立つことができなくなってしまうから...

.....
.

失意の底にあるとき

絶望の深淵を垣間見ることがある

けれども

そのときに

真理の光りも

すぐそこにある

悲しみは

それ自体が存在しているのではなく

悲しみを通して

真理を知ることが

あるがゆえに

悲しみは

その存在を許されている・・・

ならば

この悲しみに耐え

その悲しみや

失意が、

自分に何を教えんとしているかを

知ることが自力であり
そこから真理を垣間見て
希望を仰ぎ委ねるのが
信仰なのかもしれませんね・・・

『崇高なる静けさ』について

ビルのガラスに反射する

夕日に

心を向けている人

その夕日と同じ美しさ

心のなかに持っている

電車の中

差し込む夕日に目を細め

光り輝く横顔に

ほんのり笑みをうかべている

君のこの一日は確かなものだったのだろう

一日の終わり

美しいフィナーレ

その自然の黄金の一時に

澄んだ心で立ち会っている

その顔に人間を超えた

崇高な静けさを感じる

それは...まるで、神のような神々しさを内に宿して...

.....
.
こんな風に
一日を終えられたら
いいですね・・・

時折、電車のなかで
夕日を見つめている人や
歩道を歩きながら
空を見上げている人を
見つけることがあります・・・

いったい何人の人が
同じ夕日を
同じ空を
同じ星を見つめているのだろう・・・

そんなことを考えて
私も見上げていると
勇気がわいてきます・・・

よし、今日も頑張ろう・・・と

『分かれ道』について

目にみえないものを

証明することはできない

目にみえないものがないということも

証明することはできない

取り出して見ることのできないものは

この世の証明にはなじまない

けれども

信じるか 信じないか

という 100か0かを選択するのは

ひとりひとりの意思にかかわっている

信じるか・・・

それとも信じないか・・・

道は二つに分かれている

それが

明確に天国と地獄を

分けている・・・

.....

目に見えない価値

それをどう扱うかは
本人の自由意志に
任されている・・・

強制的に
信じることは
できない・・・

けれども
信じ続けるという意志は
持ち続けることは、できる

つらく
長い道だけれども
確証もない
証明もできない

それを
信じるということは

まさしく
心を鍛えていることに
他ならない・・・

私は、信じています・・・

『君自身からのノック』について

自分とは何か

という問いに

答えるのは自分しかいない

コンコンと扉をたたく音

聞こえてくる

その音

しだいに大きくなる

でも

扉の向こうにいるのは誰

扉をたたくのは誰

君の心の扉をたたく

本当の君を無視してはいけない

ひとり孤独の闇の向こうに

必ず聞こえてくるよ

自分とは何か

それに答える

君自身からのノックの音が...

.....

それは、
心から発する願い.....

それは、
本当の自分からの
叫び.....

それは、
心の奥にある
本当の自分との語らい.....

やがて
出会うであろう

やがては、対面するであろう
本来の自分.....

そのノックの音は
小さい.....

だから
ひとり孤独なときにしか
聞こえてこないのかも
しれないね.....

『気持ち創る』について

心のかたちは自由自在

その人の思いのままに

姿をかえる

心のかたちは自由自在

その人の生きた証をかたち創る

どんなに美しい人でも

どんなに見栄えのいい服を着ていても

どんなに地位の高い人でも

どんなに名誉があっても

どんなに有名でも

肉体というところをも捨て去ったとき現れる

本当のその人の姿

心のかたちは自由自在

自分の気持ちが

そのままかたち創られている...

.....

心は、見えない・・・

けれど、その雰囲気
その仕草で
あらわれるもの・・・

日々を
どういう気持ちで
生きているか

どういう考えを
持っているか・・・

それが
その人となり
あらわす・・・

目に見えないけれど
伝わってくる
確かなものが
その人をあらわしている・・・

気持ちを
装うことも
大事なことはないかと
私は、考えます・・・

『焼き尽くす炎』について

心が嫉妬の炎で焦げていくとき

人は自分自身を見失う

オセローはハンカチ一枚で

デズデモーナを疑い殺した

いちど嫉妬の火種が

くすぶりはじめると

身体全身を燃やしてしまうほどの炎となる

嫉妬の炎を消すことは

容易なことではないけれど

つかんでいるもの

自分のものだと思っているもの

これこそが自分だと思っているもの

それを放すことができたなら

いちど手を放すことができたなら

炎は消え

川をせき止めていた灌木は

遥か下流に流れ

春の小川のようにきらきらせせらぐ

嫉妬の炎 . . .

それは、他人も自分も
焼き尽くす . . .

心は散り散りになり
やすむことはない . . .

燃え上がる
情念 . . .
他人の不幸をよろこぶ
醜い自分 . . .

抑えることのできない感情 . . .

こんなにまで
コントロールできないものなのか . . .

しかし、これに耐え
智慧と祝福の気持ちで
炎を消していく . . .

忘れていた
清々しさ
忘れていた

心の軽さ

こんなにも
自由だったとは

掴んでいたものを
離れた瞬間に
よみがえる
心のあたたかさ

『常識は崩れた』について

悲しみは

もう 癒されることはないのだろうか...

次から次へと襲って来る

悲しみ...

人間の作りあげたものを

あざ笑うがごとく

崩れないものが崩れ落ち

壊れないものが壊れる

科学万能を誇っていた

ハイテクの国の自信が揺らぐ

その悲しみのなかに

その悲しみこそ

今 訴えるべきことなのかもしれない

絶え間ない悲しみのなかにこそ

間違いがあらわになり

その奥に真の正しさが現れる

.....

科学万能を誇る

この国でも

悲しみは、消えることない.....

いくら、最新の技術を誇っても

使うのは、人間.....

自然は、猛威をふるい

あたふたする

私たち.....

今の文明を終わらせるがごとく

ことごとく襲いかかる

悲劇.....

その真意を謙虚に受け取り

新しく立て直していく.....

そう.....

私たちは、間違っていたのだから.....

『心の現実』について

大地は揺れ

大地は引き裂かれ

大地に建つもの壊滅してゆく

これが答えなのだろうか

僕ら一人一人の

これが選択の結果なのだろうか

僕ら一人一人の

核爆弾をつくり

大地の上で血を流し

享楽に明け暮れ

仏性を蔑ろにした

僕らの汚れた心に

対する代償なのだろうか

にがいけれど

つらいけれど

悲しいけれど

正直に真っ直ぐに

ありのままを

受け止めてゆくしかない

目を背けてはいけない

僕ら一人一人の心の集積を

目を背けてはいけない

僕ら一人一人の心の現実を...

.....

作用があれば反作用在り

原因あれば結果あり・・・

私たちの心の選択の結果を

よく見つめて

そして、どうしてこうなったのかを

よく考えて

自分たちの心の有り様を

振り返ってみれば

確かに・・・

この六十数年の間に・・・

忘れていたものを

思い出せという

警告に、耳を傾けるときに

きているのかもしれないね . . .

『真実をうつすもの』について

よごれた窓ガラスから見える

景色を真実だと思ってはいけない

ゆがんだレンズの望遠鏡から見える

風景を正しいと思ってはいけない

自分のひずんだ見解から発生する

認識を信じてはいけない

よごれた鏡は

真実をうつさない

ゆがんだ鏡も

真実をうつさない

ひずんだ鏡も

真実をうつさない

きよらかな湖面のたいらかな平和

その心こそが

真実をうつすもの

.....

自分の心のレンズを
矯正する・・・

今まで、生きてきて
つけてしまった、汚れや
歪みを治していく・・・

それは、
真理を知り
真理に照らし合わせて
正しさを深めてゆくなかに
あらわれてくる平和・・・

その滑るような
穏やかさに
真実がうつる・・・・

『大切なものを捨てている』について

目に見えないものが

一番大切なことを

皆は知っている

人と人との間を

かけめぐる

目に見ることのできない

愛の力を

皆は知っている

なのに...

どうして...

素直に

それを

認めようとはしないのか

何が邪魔しているのだろうか

何を恐れているのだろうか

ふれられない

さわれない

目に見えない

感触がない

それらを否定することに

その意気地のなさに

自分のなかの

一番大切なものを

捨てていることに

なぜ

気がつかないのだろうか

.....
.

確か、「星の王子様」なかで

一番大切なことは

目に見えないものだよ・・・

というセリフがあったと記憶していますが

それを知人や同僚からも

聞いたことがあります

けれども、それ以上進めないのも

事実でした

一番大切なものが

わかっているのに・・・

文学的な表現を伴うものに関しては

抵抗なく入っていけるが

それは、入口にしか過ぎない・・・

その奥にある

いや、そのベースとなっている

考えは、深く、宗教的なものではないかと

私は、考えています・・・

私は、私の詩で

入り口は指し示していますが

その奥にある

本当に大切なものを

読んで下さった方々が

自らの意志で探求して下さることを

望んでいます・・・

いつも、そのお手伝いが

できたらと・・・

思いながら、詩を創作しています・・・

『知るは、力』について

さまよえる魂たちは

どこへいく

死後の世界を信ぜず

死んだら終わり

消えてなくなるとうそぶいていた

なのに

死んでも死ねない

心は生きる

魂は残る

生きているときに

死への道標を持たずして

旅に出ることはできないのに

この世で学んだ一切の知識は通用せず

死後の世界を

あざ笑った

傲慢の罪

死後の世界では誰も教えてはくれない

その罪の重さゆえに さまようしかない・・・

.....
.

真理を知ること

は

力です

真理を知らないことは

無明です

明かりなき道を

闇の中を

手探りで、歩くのは

とても危険です

真理を探究し

学び、そして伝えていく

多くの人々に

この道なき道の

道しるべを

指し示すことに

迷いは、ありません・・・

知らないこと自体が

罪なのですから・・・

『転生の記憶』について

人は生まれおちて後

このかた

久しく忘れていたものがある

すべてにおいて

虚しさを感じる時

ふと...よぎるものがある

時代の歪みをもろに受け

一番大切なものさえ

思い出せなくなっている

親には 教えてもらわなかった

学校では 教えてくれなかった

社会では 黙殺されている

一人一人のなかに

必ずあり

人の善をつかさどるもの

人間を人間ならしむるもの

それは...信仰という言葉にほかならない

.....
.

この時代で

一番忘れられているもの

唯物論や

それが変化した唯脳論・・・

が流行っていますが

しかし・・・人間は、脳で考えているではありません

心で、考えているのです

心とは、何ですか

心とは、本当のあなた自身なのですよ

その心を探究せずして

また、自分を深く掘り下げずして

この世に生まれたとは、いえない・・・

この縦、横、高さの世界の中

触れるものだけを

信じてしまう理由は

いくらでもあるけれど

その中で、触れられぬものを

どれだけ信じられるかが

今、試されています・・・

一番大切な心・・・

その心を善なると信じ

生きていく中で

はじめて、自分に出会い

信仰に導かれていくことが

生まれ変わるということだと

私は、考えています・・・

『突然の到来』について

忘れていた...

心の奥に

しまっておいたはずの

熱情を

春の風の突然の到来に

この胸がさわぐ

一瞬

灰色がかった

一日のはじまりを

みごとに原色の光彩を

放つまでに

変えてくれる

突然の出逢い

その一秒が

永遠のよう

そのひとときが

シャッターを

押したかのように止まる

その突然の到来が

今日一日の

あざやかさを約束してくれる

.....

時折・・・

すてきな異性に

巡り会うことがあります

ふとした・・・日常に

花を添えるがごとく・・・

色鮮やかな

雰囲気・・・立ち振る舞い

その人が

過ぎて

いった後の

香り . . .

心が、揺らぐ . . .

そのひとときに

ため息をつくのは

私だけでは

ありませんよね

『平凡のなかで試されている』について

たかなく波

吹きつける強い風

頬にあたる水しぶき

それに立ち向かう

強い意志

今

生きていると感じる

日々は

平凡というには

あまりにも同じ繰り返しに

感じられたとしても

前に向かって

進もうと思うことだけで

立ち向かっている

何かを続けるとは

こういうことかもしれない

困難な時には

意志は明確になるが

おだやかな日々には

意志はうすらぎ

夢は消えそうになる

愛という名の

強い意志をためられるのは

平凡のなかでかもしれない...

.....
.

逆境は、魂を鍛えますが

順境の中では

意思を鍛えられます

平凡な変わらない日々.....

その中で、

変わらぬ意思を貫き通すことは

とても大変なことと思われま

ともすれば

その日常に飲み込まれ

埋没してしまう・・・

立ち向かうことで

意思は、明確になるけれど

追い風の際は

その風さえ忘れてしまうほど

進んでしまう・・・

その時

忘れてゆく

薄れてゆくものに対して

決然と、奮い立たせるものは

意思の力に他ならない・・・

『bitter sweet』について

さまよえる

ひととき

出口なく

答えなし

こころ悶え

苦しむとも

その葛藤から

逃るるすべなし

ほのかに甘く

ほろ苦い

風

ゆるやかなれど

こころ波立ち

狂おしいばかりの

ほとばしりに

身をもてあまし

砂をつかむよう

なにもつかむことができず

ただ

ひざをかかえている

その時代を青春と呼ぶ

.....

その甘く切ない季節・・・

その時点では、わからない

悲しみ・・・

遠く離れた距離から

見える・・・その光景は

人生で、

もっとも苦く

もっとも

甘いものでした

『すれ違い』について

人生のなんと悲しみの多いことよ

運命のなんと皮肉の多いことよ

出逢うのが遅すぎた二人

結ばれることはない...

出逢うのが早すぎた二人

間違いを犯しやすい

人を愛し 傷つき 痛み 悩む

男と女

喜びに出逢うのは

なんと希なことか

運命にもてあそばれ ほんろうされ

今日も

眠れぬ夜を過ごす

人生の影のむこうに

光りを見つけることは

悲しみを知ることなのか...

.....

運命とは

なんとも悲しいものでしょうか.....

出会いと別れ

傷つき、悲しみ

心が折れそうなとき

自分の力が

もう出ないと思ったとき

開かれる扉.....

こんなにも苦しまないと

こんなにも傷つかないと

光りを見つけられないなんて.....

ふとした

タイミングのずれで

生じるすれ違い.....

その気まぐれさに

翻弄される

男女の悲しみは

束の間の幻なのでしょうか・・・

『暗黒を灯すもの』について

心は磨けば光る宝石

磨けば磨くほど

その輝きを増す

輝きは

その光りの強さで

人を感化し

導く指針を与える

磨かざる心は

輝きを失い

そのくもり 光りのなさが

自らの足もとを暗くする

闇広がるこの時代

せめて自らの輝きで

時代の闇と戦わなければ...

光りを灯せば

闇は消えるのだから

.....
.

自灯明の考えは

仏教のなかでは

とても大切な考えです

誰もが仏にすがりたい

という思いに駆られることもある

けれども・・・

その時、自分自らの力で

何とかするという気持ちを

大切にしなさいという教えだと

私は考えています・・・

誰かに頼るのではなく

自分自らの力を頼る

潜在意識に頼るのではなく

自分自身の限界に挑戦する

すると大いなる他力が

訪れる・・・

他を頼れば

訪れず

自分を頼り

己の力の限り

がんばっていると

臨む力・・・

多分・・・その方が辛いかもしれませんが

生きやすい方を選ぶよりも

生きにくい選択をすることの方が

自分自身を強くするには

よいトレーニングかもしれませんね・・・

『輝きある今を見るために』について

不信という言葉が

また 重くのしかかっている

時代の光りをさえぎるかのよう

暗黒の淵

口を大きくあけて

すべてを飲み込んでゆくように...

語る言葉

いくら真実でさえ

証明という三次元の壁にはばまれ

空に消えてゆく

二千年前

愛をもたらした人を殺した

たった一言のことば 『不信』

そんなに信じられないのか

そんなに信じるのが怖いのか

人はいつから

そんなに憶病になってしまったのだろうか

不信という眼鏡で

世の中を見れば

薄汚いゴミに見えるかもしれない

信仰心という眼鏡で

世の中を見れば

光り輝く宝石に

見えることだろう...

.....

人間を悪と見るか

善と見るか・・・

長い間、議論が続けられてきた

けれども

人を悪と見て

本当に世の中が良くなるのでしょうか・・・

人間を善と見ることによって

開ける世界があるならば

それを信じていきませんか

私は、人間に本来そなわった仏性を

信じます・・・

私と同じ・・・

あなたも同じ

仏の子・・・

仏の光りが分かたれて

私たち一人一人に

本来ある光りを

心のなかに宿っていることを

私は、信じています・・・

『砂時計』について

恥ずかしくて

消えてしまいたい日

忘れられない昨日に

目を覆い顔を隠したくなる

その昨日を

変えることはできない

時間をもとに

もどきたい願い

うらはらに

時のなかに落ちた砂

決してかえることはない

恥ずかしくて

消えてしまいたい日

逃げないで

ぶつかってゆくのは

なんて勇気のいることだろう

消えてしまいたい日も

また

時のなかに

落ちてゆく砂のように

砂のなかの

ひとつひとつぶのように

大きな過去の

小さな思い出になることを

願いつつ...

.....

その砂を砂金に変えるのは

ひとつの勇気かもしれない・・・

前を向く勇気

後ろに下がらない勇気

立ち向かう勇気

あきらめない勇気・・・

その気持ちが

落ちていく砂の一粒を

金に変えていくのかもしれませんが・・・

『自分を知らない自分』について

人を指す

その指は

自分の指を

指すことはできない

ものを切る

その刃物は

ものは切れても

自らを切ることはできない

人を責めるその言葉は

他人をやり込めるけれども

自分も同じ過ちを

犯していることに

気づく言葉にはならない

人を見る

その目は

他人の過ちは

よく見えるけれども

自分を見ることはできない

自らを省みることの難しさは

自分では気がつかない

自分を

一番知らないのは

自分かもしれない

.....

知識は

違いを見抜きますが

差別を生みます

智慧は

共通点を見抜き

慈愛にいたります

慈愛は

愛に厳しさを含みますが

その愛は、いつくしみから

生まれます

その愛で

人は、育つのではないのでしょうか・・・

私は、そう信じています・・・

『真実の原形』について

美しい生き方とは

誰も不幸にしないこと

自らの欲望をおさえ

その人の幸福を考えていくこと

美しい人生とは

出逢う人に愛を投げかけていくこと

他人のなかに自分を見つける行為

美しい人とは

透き通るような透明感

その清らかさのなかに

神をみる

美しい心とは

神秘的な奥深さ

その奥に

けして他人が触れることのできない

汚すことのでない

尊厳を秘めている

この三次元の証明台にたっては

美しさは必ず移ろう

無常の風に吹かれ

美の香りを残すだけだけれども

決して移り変わらず

決して滅びることのない美しさは

人の記憶と心に溶けた

言葉と行為に生きた人生

愛を体現し

善を行い

真実を求めた

そのもののなかに

美しさはたちこめる

朝の霧のように

僕たちを優しくつつみ

現実を超えた

真実の原形を

見せてくれる...

.....

ひとつの生き方の指針として

美しく生きる

美しい生活を送る・・・

あくまでも己を律し

研ぎ澄まし

清らかさを維持していくなかに

香り立つ美を

作品に込めていたら

いいなあ・・・と

今日もくじけそうになりながら

頑張っています・・・

『空洞』について

世の中のえたいのしれない

空気に

雰囲気

ただ流されて

自分の人生を台無しにして

ひとり部屋で泣いている

その悲しみを

考えてみないか

雑誌やテレビは

いろいろな生き方

ライフスタイルを

あおるけれども

その奥には

なにもないことを

見抜かなければ

自分の人生を

空洞にしてしまうだけ

どんな幸せそうな人生にも

悲しみが存在しないなんて

ありえない

どんなステキな人生を

歩いているように

見える人でさえ

その過去には

苦しみもがいた季節がある

自分自身の努力なくして

自分自身の意志なくして

ただ流された人生なら

その到着地は

誰もいない

一人孤独の洞窟のなか

泣きじゃくる以外ない...

.....

テレビや雑誌に登場する

成功体験や

ライフスタイルの提案について

その外形だけに

目を奪われて

その奥の思想や

消費意欲の拡大に

企画意図がどこにあるのかを

見ていかないと

その時々の特ピックスに

上がり下がりするだけに

なってしまう・・・

言い放つだけで

雑誌やテレビは

責任なんて

誰も取ってくれない・・・

結局

自分でよく考えて

自分の意思で決定して

自助努力の精神で

自らを

よりよく

高めていくなかに

今世の

課題を克服していく

その悩み

その苦しきは

人生の問題集からの

問いかけ

なのだから

『真夜中のもどかしさ』について

真夜中の静寂

二人の靴音だけ...

ときおり

通る車の

走り去る風に

二人

肩よせあった

『寒い...』と

つぶやく

君の手を握って

暖めてあげることは

できないけれど

せめて

僕のぬくもり

肩からかけてあげよう

真夜中のもどかしさに

二人の声が

悲しくとけあう

.....

出会うのが

遅すぎた二人は

お互いの気持ちに気がつきながら

伝えられずにいる.....

それでいい.....

そのもどかしさこそ

その越えられない境こそ

お互いを維持しているものだと

知っているから.....

それが

大人の

男と

女.....

『思い出は悲しみを強くする』について

人は幾度となく

人と別れる

さよならの数だけ

人は強くなるというけれど

涙の数...胸の傷

思い出という

悲しみは

強くなるばかり

人と人が

離れ離れになるとき

その人の思い出が

一緒に過ごした日々が

夢のように輝き

悲しみをさらに強くする

ぽっかりあいた胸のすきま・・・

何でうめればいいのか

思い出は悲しみを強くする . . .

それは強いアルコールのように

幻の君の面影をつくりだし

僕の涙がかき消すまで

この痛み消えることはない . . .

.

時という薬が効くまで

本当に時間がかかります . . .

時折襲う . . . 悲しみは

昔の古傷が痛むように

この季節になると

なぜか、思い出される . . .

生きてきた証なのか . . .

それとも生き急いだ

罪なのか . . .

その代償は

いつも . . .

悲しみに支払われている . . .

『未来に羽ばたけ』について

自分を変えることが

できると

信じる心が

未来への道を創る

その心つばさをもち

未来への時空に

羽ばたく

自分を変えることは

できないと

嘆く心

過去にしばられ

過去に閉じ込められている

時間は過去に止まり

口からもれる言葉は

言い訳ばかり...

未来へ羽ばたくか

過去に閉じ込められるか

それは

自分自身を

信じられるかどうか

かかっている・・・

.....

大空に

羽ばたく鳥は

前を向いている

後ろを向いていたら

飛べないから・・・

私たちも

前を向いて

飛べると信じて

心を空に

高く

そして、遠くに

目標を定めて

飛び立つ準備は

もうできている

『憐れみの嘆き』について

人と人が相剋する

エゴをむき出しにして

自分の領域を広げようと

血まなこになっている

あるものは

傷つき倒れ

あるものは

もう二度と

人の間に立てなくなる

まるで

人間界は動物界のルールに従うように

常にキバをむき出しにしている

恐れるか弱きものたち

こころ優しきものたち

いったいこんな時代に誰がしたのだ

人が人でなくなる時代に

愛なく優しさなき時代

獣の印を額に刻み

力こそすべてと

雄叫びをあげる

耐えるのだ

こころ優しき人よ

待つのだ

風が変わるのを

もうすぐ吹く

時代を吹き飛ばす

時代を一掃するための

悲しみをおびた

一陣の

あわれみの嘆きが...

.....

弱肉強食・・・の時代・・・

弱きものは食い散らかされ

強き者は

さらに強い者に怯える・・・

村社会から

騎馬社会に変わろうとしている

今の日本・・・

年功序列は崩れ

強き若者がリーダーとなる時代

しかし・・・それは、それで

世界的基準のなかで

勝ち残っていくには

しかたのないことかもしれない・・・

けれども

自由の結果には

智慧と慈愛が必要だと

私は考えます・・・

勝者の義務は

そこにあるのでは

ないでしょうか・・・

『サクラ咲く若葉のころ』について

枯葉 舞落ちる頃

一輪の花

みつけ

サクラ咲く若葉の頃

一輪の花

散った

夢のようなひととき

常に日常とかけはなれ

そこには

生活はなく

ただ

夢のような幻

花は散った

けれども

香りは永遠

季節はめぐる

けれども その香りがかぐたび

僕は後ろを振り返る...

.....

出会いと別れ・・・

ときには

体の一部を

心の一部を

剥ぎ取られるような

苦しみと悲しみ・・・

いつしか

その傷も癒え

振り返れば

君がいる・・・

今は、

サクラの花びらだけが

舞い落ちている・・・

『胸の鼓動』について

胸の鼓動が

知らせる

恋のはじまりを

慕う気持ち

ひそやかな想い

こがれる夜に

眠れぬ熱い静寂

身体は火照り

頭は真っ白になる

なぜ

これほどまでに

人を想うのだらう

なぜ

これほどまでに

恋こがれるのだらう

苦しいのは

わかっているはずなのに...

.....
.

なぜ

人は、人を好きになるのだろう・・・

そして、その思いを伝えたいと

気持ちを巡らせ

希望と絶望の淵を歩いていく・・・

叶わぬ思いと知りながらも

一片の希望にかけようと

花びらを数えたりする・・・

おろかしいぐらい

一生懸命だったり

こっけいなぐらい

からまわりして・・・

でも・・・わかっていながらも

止められないのは

それが、恋だから・・・

『遠くなる君の姿に』について

雑踏のなか

君の姿...

探す

むなしさを

あきらめきれずに

目は宙に舞う...

求めども 求めども

とどかぬ想い

心のなかで

君に逢うしかない

しかし...

心のなかで

こだまする君の声は

だんだん遠くなる

心なかに

あらわれる君の姿は

だんだん

幻になる...

.....

届かぬ思い

心の叫び

伝えたい言葉

しかし・・・宙を舞う・・・

雑踏なのかに

君を求め

探し求め

ため息をついては

また・・・振り返る・・・

無理だと

わかってはいるけれども

追い求めては

絶望の淵を歩いている・・・

そんな・・・経験・・・

ありますよね . . .

若き日の残像 . . .

そして . . .

心のなかの映像 . . .

思い出は、

遠くなっていくばかり . . .

『胸あつくする心の情熱』について

愛なき時代に

社会は悲鳴をあげる

愛なき時代に

人々は別々にされる

愛なき時代に

人は隔絶され

生きるすべをうしなう

人の心が枯れていく

砂漠のように

吹き荒れる砂塵

潤いなく

風は焼けつく

心がこわれていく

正邪が逆転し

正しいものは悪にされ

悪がはびこり

堂々とばっこする

宇宙を創られた

仏の摂理は

無視され

都合のいい

欲望を肯定するカオスが

地球を目茶苦茶にしている

だからこそ

愛が

必要とされている

優しく あたたかく

正しく あわれみに満ちた

胸熱くする

心の情熱が...

.....

勝った、負けたで

一喜一憂するよりも

内なる価値を高めていく

生存欲求を満たす愛が

賛美され

精神的な愛は

その陰に潜めていく . . .

ただ

人の心は、知っている . . .

その虚しさが

そのやるせなさが

その足りない気持ちが

何か、違うと感じている . . .

そう . . .

そこには、愛がないのです

人の心の潤いの

愛が

だから

人は、その代価としての愛を

求めては、

彷徨っているのかもしれないね

『君を忘れられるまで』について

駅の改札

雑踏のなか

ふと振り返る

人の群れが

よせては ひく 波のように

ゆらめくたび

あの時の

胸の痛みを思い出すよ

君を忘れるまで

一晩かかった...

君の気持ちをわかるまでに

一晩かかった...

自分の心のなかに

君の拒絶を受け入れる

勇気を得るために

一晩かかった...

君を忘れられるまでに...

.....

つらい片想い・・・

その現実を受け入れるまで

勇気がいりました・・・

しかし・・・

遠くから眺めてみれば

決してつり合う二人では

ありませんでした・・・

それで、よかった・・・

今は、振り返ることができて

本当に、よかった

その時は、苦しかったけれども

どんなにつらくとも

現実を受け入れる術を

身につけられたような

気がいたします・・・

『時代の変動のなかで』について

ささやかな幸福

平凡な暮らし

それだけでいいと願う

君は

時代のうねりに気がついてはいない

今までの価値に

亀裂がはいり

これでもか これでもかとおもうほど

混乱をまねく

生みの苦しみの時代を...

恋人たちよ

寄り添いあうがいい

怖ければ目をつぶっているがいい

つないでいるその手を

決してはなさぬよう

二人の心をひとつにしていなければ

時代の変動に押し潰されてしまう...

.....
.

時代の価値基準が

大きく変わろうとしている

外的基準から

内的な基準へ

移ろうとしている・・・今・・・

今までの価値は

陳腐化し

寄りかかっていた

柱は、幻と消える・・・

自分のなかの

確かな基準を

構築していくには

真理を知り

内的な価値を

心の中に創りあげていくしか

ないのかもしれないね・・・

『みんな戦っている』について

矛盾をかかえ

葛藤で胸ひきさかれ

生きているのが精一杯のとき

強風に立ち向かう

木を想う...

わけもない涙が

頬をつたい

胸のなかから熱いものが

こみあげてくるとき

夕暮れ輝く海を想う...

肩を落とし

ため息が追い打ちをかけ

心が石のようにかたくなったとき

空を見上げる...

立ち向かっている

みんな...

『立ち向かって戦っている』

そう想うと

ほんの少し勇気が身体をめぐる・・・

.....
.
この世界に

自分だけだ

と思うとき

同じように

空を見上げている人がいると

思うと、心が強くなる

ものすごい風のなか

耐えている

木を見ていると

自分も頑張れる気がする・・・

きらきら光る

海を見ていると

光り達が語りかけてくるようで

勇気づけられる・・・

自分だけではない・・・

みんな・・・戦っている・・・

『大海へ』について

川の流れ

サラサラと

清らかな音たてて

過ぎていく

時間の流れ

時のなか

どれだけ輝いた

瞬間をもったかで

その価値がきまる

みっともなくたっていい

ボロボロになったっていい

はずかしさにうつむいたっていい

カッコわるくたっていい

プライドなんか捨ててしまった

真っ直ぐに生きる輝き

それは かけがいのないもの

川は流れる

サラサラと

清らかな音たてて

過ぎていく

川の流れに合わせて

光が踊る

きらきら揺れる

その輝きが

海へながれ

海の青

ブルーの輝きをつくりだしている

高きから

低きへ

小川から

大海へ...

.....

踊る光りは

水の上

その光りのひとつひとつが

光ってこそ

光りを受け

光りを反射させてこそ

その輝きを創りだしている

水もまた

上流から

途中・・・淀んだり・・・

汚れを運びつつも

浄化しつつ大海へ流れゆく・・・

それもまた

同じ・・・

過ぎてゆくから流れる

流れるから浄化しつつも

その本質を失わずにいる・・・

止まっては、いけない

私は、そう考えます . . .

『生みの苦しみ』について

未来に対して

ばくぜんとした不安が

おおいかぶさるように

行く先に立ちふさがる

リアリティーのない

現実

まるで他人ごとのように

実感のない

毎日の暮らし

誰もがひざをかかえ

眠れぬ夜を過ごす

明日のない今日におびえる

夢のなかで落下していくよう

闇にすいこまれていくみたいだ...

心は苦く

胸は痛む

それを若さだと

老いた傍観者は

冷たい言葉を吐くけれども

そのあざける言葉こそ

人生の喜びを放棄している

先の見えない未来は

誰でも不安なもの

しかし

今にこそ

現時点にこそ

未来の種はあるのだから

生みの苦しみを

とくと味わうがよい...

.....

人は、孤独なとき

成長している

その期間は

とても苦しいけれども

それを放棄しては

なにも生まれない・・・

この期間を耐えてこそ

明日を変える種を

今日、植えることが

できるのだから・・・

『いつになったら』について

いっしょにいれば

つらくなる

その悲しみの涙のかわりに

笑顔をつくろうとするけれど

こころは嘘をつけないでいる

いっしょにいるとき

愛してはいけないと

おもうのだけれど

はなれていると

愛していると深く感ずる

いつになったら

こころから笑えるのだろう

いつになったら

思い出に

変わるのだろう

いつになったら...

.....
.
失恋の痛手から

なかなか抜け出せない.....

時間がたてば

癒えるとおもうのだけれど

時がたてば、たつほど

胸の痛みは、増してくる.....

どうすることもできない

悲しみに支配され

物事が手につかない.....

ふいに頭をよぎる.....

同じ髪型のひと

同じ香りのひと

同じ服装のひと

振り返れば

ただ.....幻を

悲しみのかわりにしていた.....

『心を亡くした』について

滅びゆくまちなみ

消えていく道徳

こころをなくして六十数年

その答えを

びくびくしてまつ僕ら

道を間違え

道に迷う

壊れゆく地球

堕ちていく暗闇に

こころをなくして六十数年

その答えが

いま あらわれるのを

びくびくして待つ僕ら...

.....

その答えは

徐々にあらわれている・・・

気象は乱れ

観測史上初を

連発している・・・

それは、人々の心の乱れにも似て

猛威をふるう・・・

木々をなぎ倒し

川は暴流と化し

風は、すべてを吹き飛ばそうとしている・・・

心の汚れを蓄積した

報いは、誰が受け取るのか・・・

戦後の教育の荒廃の責任は

誰が負うのか・・・

その子供達に復讐されて

逃げ惑う大人達は

無視を決め込んでいる・・・

心を忘れた・・・

心を亡くした・・・

心を壊した

この六十数年の責任の重さに

新しき者たちが

潰れてしまう前に

潔く、去るのも

また、その塊の人々の

最後の理性かもしれませんね・・・

『ささやかな憐れみ』について

いちょうの葉は

恋人たちの願い

ひとつに

なれなかったものたちの

ささやかな祈り

どれだけの恋人たちが

どれだけの理由で

別れ別れになったことよ

悲しみの涙が雨となり

悲しみの嘆きが唱和され

仏はそれを見かねて

ひとつの象徴をつくれ

それらの魂の叫びを鎮められたという

いちょうの葉は

ひとつになれなかった

恋人たちにおくる

ささやかな仏のあわれみ...

.....

この世で

想いを遂げられなかった

者たち.....

その心残りをなくすため

ひとつの象徴をつくられた.....

この世で

結ばれなかった

者たち.....

その悲しみを

憐れんで

嘆きの記念碑をつくられた.....

魂よ、安らかに.....

いつか、この木のように

想いが遂げられますように.....と

『ひとりひとりの願い』について

自らの足で立ち

自らの頭で考え

自らの責任で行動する

それが

人間であるならば

人間となる難しさは

計り知れない

自らの悩みを

自らの力で解決し

世の中の出来事を解釈し

善い方向に

世の中を変革していくところに

独立した人間の軌跡がある

自らの弱さに勇気を奮い

誰に支配されることなく

個性を際立たせ

夜空を飾る

星のひとつとなることは

ひとりひとりの願い...

.....
.

独立不羈の精神

ひとりひとりが

各々力で

輝くこと

ひとりひとりの輝きが

夜空に輝く

灯りとなり、道しるべともなる

他の輝きに

頼ることもない光りは

それ自体が

独立していながら

大きな目的の中にいる

それが、願いでもあり

祈りでもあり

使命でもある

光り

輝け

友よ！

『引き金を引くのは』について

悲しみが世をおおうとき

人は内省的になる

ここまで外的事件がなければ

自らのところに

問うこともないのか

ひとり座すこともなく

ひとり想い巡らすこともなく

美しい日々気づくこともなく

一時の享楽にふけるのか

おこるべくおこるものごとにたいして

動じてはならない

悲しみの引き金を引いたのは

僕らの傲慢なおごれるところ...

.....

私たちは、

無関心を装い

このままをよしとしている

でも・・・

このままじゃ

いけないってことも知っている

どうすればいいのかは

心に問えば

わかること・・・

それさえも煩うのならば

その結果の責任を

引き受けるしかない・・・

原因と結果の連鎖のなか

その種を蒔いたのは

私たちでは、ないかもしれないけれども

育てたのは・・・

確かに、私たちに他ならないから・・・

『強い葡萄酒に』 について

強い葡萄酒を

求めるころ

激しい野望

美しいものを

求める熱愛

歴史は

ときのながれの

二日酔い

ところどころの

記憶の欠落

激しい野望に散った

英雄は詩になり

恐怖に人々を陥れた

独裁者も野辺の花

美しいものを

求める熱愛は

いまだ消えず

その歴史に

埋もれた真珠を

懐かしむ...

.....

歴史を

振り返れば

また、

個人も同じ.....

強い葡萄酒を

求める気持ちが

強い季節.....

いてもたってもいられない

躍動

自惚れていたときもあった . . .

暴君として

振る舞っていたときもあった . . .

失意の底、

靴底を舐めたときもあった . . .

絶望のさなか、

光りを求めて

彷徨ったときもあった . . .

そして今、

それらを乗り越えて

ようやくたどり着いた . . .

静寂の彼方

大きく息を吸い込んで

前を見ようと思った

『悲しみになるとき』について

上空で輝く太陽

見上げ 崇め 感謝される

朝 皆に待ち望まれ

夕に手を合わせ感謝される

幾千 幾億と

人類に燦然と降りそそいだ

聖なるひかり

それに近づこうとする僕は

まるで

雨雲のよう

大きく夢ふくらませ

おもいたかぶらせ

すこしずつ近づこうとするけれど

聖なる熱で雨になる

雨はやがて涙になる

ぼくはやがて

悲しみになる...

.....

そして、その悲しみは

多くの人々を癒やす

潤いに、その悲しみは

やがて、愛になる.....

自分の好きなこと

やりたいこと

やり続けたいこと

また、続けられることは

それ自体が

大きな夢を含み

その夢は、目標に近づけば近づくほど

他の人々の生き方に

つけ加えられる価値となる.....

それが、創作の基本だと

私は、考えます.....

『墓穴』について

暗く荒んだ

人のこころ

誰も彼もが

時代の暗い淵に立っている

ぽっかり開いた

深淵の底無しの暗闇

僕らが掘り続けた穴だったとは

気づいていないかのように

そこに吸い込まれてゆく

一触即発のストレスが

大きな怪物を作り出す

怪物は暴れ 飲み込まれ

その怪物と共に

僕らは僕ら自身が掘った

墓穴に落ちていくだけなのか...

.....

ストレス社会の歪み・・・

昨夜の疲れが

朝の電車のなか

ピークに達して

不機嫌をまき散らす・・・

それを浴びた人は

更に不機嫌になり

他の人に当たり散らす

負の連鎖・・・・・・

でも・・・

それを誰かが止めなければ

社会は、不機嫌の渦に巻き込まれ

更に、大きな不幸を呼んでしまう・・・

冷静な判断ができなくなり

燃え上がる怒りの炎は

自分も他人も焼き尽くそうと

しているのに・・・

リラックスして

裁判官になるのをやめて・・・

優しくなるためには

深く深呼吸をして

自分も他人も

同じ人間であり

同じようにストレスを抱えて

悪くないのに謝ったりして

上司の無理な要求に

ため息をついている

同胞だということに

思いを馳せて・・・

そしたら・・・

お互いに大変なんだと

思えるのかもしれませんがね・・・

『宇宙の憐れみ』について

地球のなかで

胎動する意識は

除々に覚醒され

大きな変革のエネルギーを

内包している

地球で起こる

さまざまな出来事は

ひとつの終わりに向かう

人々は危機感を持たず

享楽にふけり

他人の悲しみを横目で見ながら

自分には関係ないことと

思い込んでいる

その傲慢

そのやさしさのなさに

地球は最後の悲鳴をあげる

なぜ

大地がふたつに裂ける

人々の考えが対立しているから

なぜ

大地が陥没する

人々が他の人々を抹殺するから

なぜ

気象が乱れる

人々の考えが乱れているから

地球の上で起こる出来事は

すべて人々のこころの集積

ひとりひとりが

ひとりひとりの思いが

地球の上で起こる

出来事に参加している

すべては

人のこころの

思いのあらわれ

殺伐とした

砂漠を歩く

方途なき旅人よ

その乾いた大地をぬらすのは

悲しみの涙かあわれみか

時のまたたき

日の沈むころ

闇におびえ立ちすくむだけか

震える肩を寄せ合い

助けを求め叫んでみても

20世紀が犯した

血の革命と

戦争への償いは

終わったわけではあるまい

地球を何度も殺す

核爆弾を所有し

今まで地球を

痛みつけた実験をくり返す

その間違っただけの責任は

いったい誰がとるといのか

地球は悲しみにみち

苦痛にたえながら

待っている

人と人々が理解することを

国と国々が理解することを

地球上のすべてのものが

調和することを

しかし

その願いを無視して

人と人の

国と国のエゴを

ぶつけあう方向に向かうのなら

地球の悲しみは嘆きにかわる

そのとき

宇宙のあわれみふりそそぐ

それは

残されたものの希望であり

また

奇跡でもある...

.....
.

人間、ひとりひとりの力は

弱いかもしれない・・・

けれども、その集積は

莫大な物理エネルギーを

ともなっている

ひとりの無責任な行為は

他の人を巻き込むことによって

増大し、力を増していく・・・

歯止めのきかなくなった力は

その理性のなさゆえに

破壊に向かうしかない・・・

人間、ひとりひとりの

心は、そのような力を

秘めているにもかかわらず

自分は、関係ないと

思ってしまいがちだけれども

そうではなく、

確かに、加担している・・・

その強大な心のおもいの集積が

地球の運命を決めている・・・・・・

地球の将来を決めているのは

あなたの

おもいであり

ひとりひとりの

小さな心からの

大きな力となる

おもいの集積なのだから・・・・・・

『愛を手にするとき』について

きみは

駅のホームで泣いていた

顔をくしゃくしゃにさせ

涙を止めようとしていたけれど

その悲しみを止める事が

できないでいたね

悲しみは

どこからともなくやってきて

頬を涙でぬらさせる

悲しみは

どこからともなくやってきて

胸の隙間に風がふく

人は深い悲しみのあと

やさしさという

人へ向かう

愛を手にするのだらう

.....

.

その悲しみを

強さに変えてください

という私の願いです

ある時、

子を失った母親が

お釈迦様に

どうしたら

この悲しみがいえるのかと

問うたら、

いろいろな家について

悲しみのない家を

探してご覧なさいと言われ

そのように、方々の家々に

聞いて回ったところ

どの家も、どの家も

愛する人が死に、

かけがいのない人を失っていた

そう

悲しみのない人なんて

いなかった・・・

誰も逃れられない・・・

愛する人との別れ・・・

そして、それを克服して

強く生きていくしかない

残されたものの定め・・・

でも・・・

無常にも

冷たい雨が降る・・・

『異邦人』について

自らの創った文明に支配され

おきざりにされ

ふりまわされ

精神を腐らせてゆく現代人たち

工場は生産のみに支配され

そこに働く人々の気持ちなんか

考えていない

都会のビルの中に

おきざりにされた僕らは

どこへ行けばいいの

オフィスは快適で

夏は涼しく、冬は暖かだね

でも

ただそれだけで

僕らの幸福な空間ではありはしない

苦しみの

悲しみの

しのぎあいの修羅場

僕らが創りだした文明は

僕らを必要としてはいない

僕らが創りだした文明は

僕らを幸福にしてはいない

僕らが創りだした文明は

僕らを異邦人とする

僕らは自らの文明の中を

徘徊し

さまよい暮らす異邦人

僕らは自らの文明の中に

朽ち果ててゆく

あわれな異邦人

僕らが滅びるか

この文明を終わらせるか

人々を幸福にしない

文明なんて

僕はいらない

.....
.

いつしか

人間の心は

顧みられなくなって

しまっている・・・

だから・・・

多くの人々は、それに耐え

一つ間違えば

その向こうへ

行ってしまいそうな

危うさを抱えながら・・・

追い詰められている・・・・・・

経済に振り回され

経済に追従し

経済に屈伏し

異邦人とされてる・・・

すべては、結果という数字のなか

人間であることよりも

数字をあげることを要求されている・・・・・・

人間が壊れるか

この原理を破棄するか

適切なる距離を取りながら

泳ぎ切るしかないのかも

しれませんね・・・・・・

『海に染まった者たちへ』について

物を物として

考えはじめ

わからない事をよそにやって

切り離し

手に取れるものだけの解釈を始めた時

不幸が始まった

そして その不幸の答えは

人間がアメーバーから進化したという

人間の尊厳を無視した

あやまちのはじめに

人間の優劣は肌の色だと

その思い違いが悲劇をおこしていった

白い人々は

有色の人々を奴隷とし

その国々を奪っていった

国を奪われた有色の人々も

それを 当然の事だと思っていた

だけど

東の国の有色の人々は

絶望などせず

北の白い人々に戦いをいどみ

勝利した

その勝利をまのあたりに見た

有色の人々に希望がともった

しかし

有色の人々への嫌悪をつのらせていた

西の白い人々は

自由と博愛と平等を掲げながらも

ちやくちやくと

東の国を叩きつぶそうと

息をひそめていた

そんな事を知らない東の国の人々は

やがて

有色の人々の希望の光となって

国連という

白い人々の話し合いの中で言った

「連盟に参加している国家は

人間の皮膚の色によって差別を行わない」

しかし

そんな戯言は退けられ

白い人々の思わくどおり

東の国の有色の人々は

どんどん追いこまれ

アジアの人々も

どんどん追いこまれ

やがて

強大な白い人々の国へ

戦いをいどんだ

アジアの希望を胸に秘め

若者たちは散っていった

青い空にかかる雲の隙間から

紺色の光 海に染まった

東の国は

もう終わりだと

誰もが思った

しかし

奇跡はおこった

東の国の繁栄は

戦い勝利した

西の人々をも打ち破り

その繁栄は世界に広がり

人々は

肌の色の優劣のおとぎ話を打ち破り

アジアの光

輝いた

人種差別は間違っている

だって

僕らは仏から永遠の命

与えられ

世界の国々を

転生輪廻という旅をくり返している

ある時は東に生まれ

ある時は南に生まれ

ある時は西に生まれ

ある時は北に生まれ

そして

死んでいった

そして

ある時は白く

ある時は黄色く

あるときは褐色に

ある時は黒く

生まれてきた

肌の色の戦いも

民族の戦いも

間違っている

海に染まった英霊たちよ

その現実を目の当りに見せた英霊たちよ

アジアの国々を独立させた英霊たちよ

君たちは間違っていない

君たちは間違っていない

君たちが戦わなければ

今の日本の繁栄はなかったのだから

.....
.

政治的意味ではなく

時折、思いを馳せなければ

いけない・・・

私たちは、彼らの礎の上に立っている

愛するもののため

家族のため

故郷のために

若い命を散らした

尊い犠牲を

何の策略もなく

何の政略もなく

何の宣伝もなく

ただ・・・その意味において

私たちの立っている今を

きちんと振り返るなら

このことを忘れてはいけないと

思います・・・

『清らかなひとすじの光り』について

この世の中は

ビジネスだ

損か

得か

もうかるか

もうからないか

この世の中は

パイの取り合いだ

早く奪ってゆかないと

自分の取り分がなくなってしまう

この世の中は

笑顔をなくした人たちが

欲望と快楽とを追求して

自分の大切な心

失ってゆく

無くしてゆく

いや 違うんだ

本当はそうじゃない

この世の中はビジネスでもなく

快樂の追求でもなく

その中で本当の清らかさ

見つけるため

本当の自分に出会う為

本当の美しさ 感じる為

本来の姿に戻る為の

生きる意味

考えてゆく事

見つけてゆく事

清らかな

ひとすじの光

胸に宿して・・・

.....

この世に

生まれた意味を

時折、考えてみる

この世の中と

折り合いをつけて

上手に、渡っていくことも

大切だと思います

けれども・・・

その中で

それ以上に

大切なものもあるはずです

それを忘れずに

生きていけたらいいですね・・・

『悲しみのうた喜びにかえて』について

自分の生命

輝かせる方向が

みんなの幸福に

ならなければ意味がない

自分の幸せが

もし

人を傷つけている

ものの上に

あるのならば

それは

決して幸せとは

いえないね

人と人が共に

生きているこの世界で

自分一人では

生きる事のできない世界で

多くの者たちの

悲しみの声

聞こえてくるのなら

自分の命

最大限に輝かせながらも

その悲しみを

喜びの歌にかえてゆく

その光

永遠をつらぬいてゆく・・・

.....

中道とは

自分の幸福が

他の人の幸福にも

つながっていく考え・・・

日々の点検が

逸れた道を

修正してくれます・・・

他の人の表情を

思い浮かべてみれば

いきすぎた自分の行為に

困惑の表情で

答えていることでしょう・・・

その日

あった出来事を

振り返りつつも

逸脱している自分を

発見したならば

すぐさま修正をかけていく・・・

取り返しが

つくあいだに・・・

生きている

あいだに・・・

『無知・・・』について

笑っているけど

笑っていない

笑顔の向こうに悲しみが見える

強がって

意地をはって

心が泣いているのに

顔は笑っている

笑顔の瞳に悲しみがよぎる時

心がきつと

痛んでいる

笑顔はやがて消え失せ

目をふせ

後ろを振り返り

手を握りしめ

強く強く握りしめ

泣いている

涙

ぽろぽろ

こぼれ落ちてゆく

笑顔の向こうに悲しみがよぎる

その悲しみの意味

知らないままに

.....

わけもなく

流れる涙・・・

その涙の意味

知らないまま・・・

魂の願いと

裏腹の生活・・・

きっと心は、叫んでいる・・・

その声・・・

聞こうともしないことに

その答え

涙となって

頬を伝う・・・

『涙の意味』について

生きる命の

尊さを知らずに

命の輝き

くもらせる

大きく渦巻く

欲望の中

どこまでも

どこまでも

心

いやされること

ないね

有利な有限の

幸福とひきかえに

悪魔に魂を

売ってゆく

子どもたち

やがて

失望と絶望のふちで

なにを見るのだろう

やがて

失望と絶望のふちで

なにを見るのだろう

ひざをかかえて

涙ながすなら

その涙の意味を

考えてごらん・・・

心を見れば

魂は、

涙を流すのだから・・・

.....

なぜ、人は

虚しくなるのか

なぜ、人は

金銭だけを得られても

満たされないのか・・・

それよりもいっそう

心が空っぽになっていくのは

どうしてなのだろうか・・・

胆略的に結論が見えて

結局、金だと嘯いてみても

どうして・・・

悲しみがこみあげてくるのか・・・

その意味と

その願いを

時折、考えてみる必要が

あるのかもしれないね・・・

『ページをめくる音』について

ページ

一枚一枚に

新たな発見があり

ページ

一枚一枚に

新たな感動が

ふりそそいでくる

どれだけの月日をかけて

一冊の書を

書き記したのだろう

どれだけの想いをこめて

一冊の書を書き

記したのだろう

どんな興奮よりも

この喜びには変えられない

私たちは

単なる活字の列を

見ているのではない

そこに刻まれた

魂の熱い

記憶の残像を

たどりりながら

その人と

一つになってゆく

パサッ・・・パサッと

今日もページをめくる音が

ここちよい・・・

.....

私は、本を読むことが

大好きです

本屋さんで

本を眺めていると

ワクワクします・・・

また、自宅の書齋で

好きな本に

囲まれている暮らしは

最高です . . .

そんな、本好きの

独り言のような

詩です . . .

『滅びないもの』について

お金を

手にいれたら幸福という

人生を

楽に生きれたら幸福という

人生に

悩みなければ幸福という

人生をただ

無難に過ごしていく

それだけで幸福という

けれども

本当は

違うんだって事を

みんな知っている

知っているにもかかわらず

自分の思いを

他人の思いに

すり替えて

他人から見た幸福を

追求してゆく

称賛されたい

うらやましがらりたい

空しいだけだ・・・

手に入れたとたん

消えてゆく蜃気楼に

翻弄されるよりも

自分自身の確かな

やすらぎ

心のなか

静かな聖なるひととき

大いなる瞬間

それが喜び

真の幸福

永遠に

ほろびることはない

.....

外なる価値の時代は

終焉をむかえ

ますます内なる価値へと

移行している・・・

組織が、ピミッドを形成し

ヒエラルキーが幅をきかせていた

社会は、平らになりつつある

それは、いっそう個人の価値を高め

心の内なる幸せにもとづく

一人ひとりのこころの在り方が

問われていく・・・

それが、本当に

幸福な

ことなのか・・・

それを自問するときでも

あるのかもしれませんがね

『それなのに』について

ある芸術家の集まりがあった

みんな

おのおの意見を持っていた

ある芸術家は言った

とにかくお金を集めなければ

ある芸術家は言った

とにかく人を集めなければ

ある芸術家は言った

とにかく情報を集めなければ

押さえ切れぬ

心の叫びが

私を支配してくる

違う 違う 違う

お金でもなければ

人を集めることでもなく

情報でもない

作品はどうなんだ

君は何を創っているんだ

君は何を伝えたいんだ

神の美を表現することを

許されて以来

神の美を

目に見えるように

耳で聞こえるように

口で語れるように...と

芸術の存在が許された

芸術は

神を讃えるために

はじまりしもの

それなのに・・・

.....

二十数年前・・・

バブル絶頂期に

あるアートフェスタの

企画会議に出席したときの

気持ちを詩に表現したものです・・・

みんな・・・

悲しいくらい・・・

お金や人集めの話をしていました・・・

確かに、運営上

しかたがないのかもしれませんが

けれども

私は、決別し

自分の道を歩むことを決めました

そして・・・二十数年・・・

彼らは、まだ・・・

作品を創り続けているのかなあ・・・と

時々、おもいを巡らすことが

あります・・・

『幸福を映せ』について

自分でどうする事も

できない事柄に

自分なりの解釈を押しこめ

自分の不幸を楽しんでいる

君は不幸になりたいのかい

だったら

不幸をイメージすることだ

君は幸福になりたいのかい

だったら

幸福をイメージすることだ

自分の心に

現われた映像が

現実になる

だけなのだから

幸福になりたいのなら

幸福を思う

すると必ず

幸福が映し出されてゆく

.....
.
人間は

思う通りの自分となる.....

それは、

法則であり

決まりでもある.....

自分が

何を思っているか

その心の絵が

現実に映し出されるから.....

幸福になりたいとおもいながら

その実、

不幸を選択しているのは

その不幸が、

憐憫の情を誘うから.....

そして、

その時の、

他人に優しくされたおもいを

忘れられずに、

繰り返してしまうから・・・にすぎない

けれども、

それが不幸であることには変わらず

どんどん

自分を追い込んでしまうのも事実・・・

心の絵は、

現実を映していくものだから・・・

『詩人のささやき』について

ためらわず

心の声に従いて

まよわず

しかしてあきらめず

ただ、ただ

歩く

道の楽しさよ

とても小さい

ともすれば見逃してしまう

平凡の中に隠れた輝きを

決して

見逃すことなく

しっかりと

心にきざみ

一編の詩となす

かけがえのない喜びよ

今日も

詩人のささやきが

心にこだまする・・・

.....

心の対話

言葉の調べ

日常から非日常への飛躍は

ほんの小さな

ささやき・・・

ゆったりと流れる時間

その人の心の動きにさえ

敏感に、

移り変わりを感得しつつも

変わらない

人間の真心を

見極める

静けさを

維持しつつも

それを

書き記す喜びに

今日も浸る・・・

『時代の扉』について

世の中の

あらゆる事が

理不尽に思え

どうしても

どうしても

間違っているという

熱き情熱

沸き上がってくるならば

誰かが

やってきて

その時代の悪を変えてくれるのを

指をくわえて待つなんてできやしない

熱い情熱

声、高らかに

時代の扉

押し広げ

新たな価値の創出の時

若者よ

青年たちよ

今、古い時代をぶち壊し

新しい希望の光

扉の隙間から

かすかにもれている

時代の扉

押し広げ

時代の扉

今、開く時

一人一人の力

結集して

新たな光、もれくる光り・・・

今が

その時代の扉を

開けるとき・・・

.....

今、自分にできることを

考えて、実行する

心のなかの

情熱が熱さを増してくる

正しいことが

隅に追いやられ

上手に悪を行う者たちが

大手振るっている

この世の中の

正義は、

一人ひとりの良心に

かかっている・・・

大きいことではなく

小さくても

自分にできる

善を行う中に

悪を小さくする

大きな力が宿っている . . .

それが

その粒子が

寄り集まれば

その光りは

強大なものになり

影は、光りの前に

消えゆく

消極的な物だったと

知るだろう

『透明な空と風と』について

ふわっと

こちよい風が吹く

初夏のやすらぎに

人とふれあいたい

やさしさにも似た感激が

胸を熱くする・・・

通りすぎていった人たちは

心の広場に

笑顔で笑っていた

涙が出るほどの

胸の高鳴りを

押さえ切れなくて

ふと・・・ 空を見上げる

透明なこちよい風の中

透明なこちよい空が続いている・・・

.....
.

時折・・・

風の爽やかさとともに

胸の奥から

わきあがる

感激・・・・・・

それは・・・

懐かしさにも似た

胸の擦り・・・

生きている間に

押し寄せる

ノスタルジーは

胸をちくりと

刺していく・・・・・・

『肉片か精神か』について

理性という名の

善を捨て去り

本能という欲望を

肥大化させてゆく時

人類は滅びの道に

向かいはじめた・・・

すべての情報は

本能のおもむくままに

ただ流れている

すべての表現は

本能を肯定する

方向にむかってゆく

人間をただの

動物に変えてゆく

表現の自由という名の

欲望の毒を飲み

残酷で

狂暴で

お腹をいつも空かせている

醜いものになりはててゆくのか

僕らの心は

無感覚になりつつある

理性は

いつのまにか冷たくなり

人を物として扱う

唯物的な思想を生み落とし

その冷たさゆえに

本能にすりかえられ

やがては本能に支配され

決定的な敗北をしてゆく

理性は本能に負けたのか

理性は崩れてゆくだけか

いや

理性の背後にいつもある

暖かい愛ある

善に気づきさえすれば

負ける事はない

立ち向かってゆける

人間として生まれた以上

人間として生きてゆく為には

本能を抑え

理性を磨き

精神の偉大さに

心を押し進めなければ

僕たちは

ただの肉の塊りに

なってしまう

.....

欲望を肥大化させ

苦しむのは

私たちです・・・

そして、その犠牲者は

幼い者たちです・・・

まだ、分別もつかない

男女が

そのままの状態

突き進んでいけば

お互いを破壊するしか

ありません・・・

利己的な欲求の肥大は

その達成の結果は

滅びのカタルシスだからです・・・

その解放のあと

立ちつくす荒野で

涙を流すのは

あまりにも

悲しいとは

思いませんか

『悲しみを知ること』について

悲しみのパンを

食べた事があるか

涙にくれた孤独の時

心の痛み

感じた事があるか

悲しみを知らない人は

愛を知らない

愛を知らない人は

神を知らない

神を知らない人は

真のやさしさを知らない

涙にくれた

悲しみのパンを

食している時

必ず神が

そっとやさしく

君を支えてくれている

.

自分では

どうすることもできない

悲しみ

それに、直面したときの

無力感 . . .

ときおり

人生を襲う虚無感 . . .

自分の小ささを知るとともに

仏神の臨在を

深く感じるときでもあります

人間は、うまくいっているときは

自分が大きく感じられ

横柄になってしまいがちですが

突然の悲しみに襲われ

肥大化した虚飾が

剥ぎ取られたとき

謙虚に等身大の自分に戻され

その虚飾にまとわりついていた

他人もすべて散っていったときの

孤独感 . . .

その悲しみの涙が

心を肥大化させていた

過ぎた欲が

洗い流され

本来の自己に戻るとき

それは、悪夢だったと

振り返ることが

できるのではないのでしょうか

『僕と君に』 について

時々

襲ってくる

心の不安と戦いながら

生きている

みんなして

楽しく会話している時

ふっと

うつむいてしまう時がある

考えてみれば

そう長くもない

この世の生に振り回され

生きる事を

ながらえようとして

不安をかかえこむ

僕ら人間

過去を

変えられないと嘆き

未来に来るであろう

不幸に脅え

僕と君は

今日の心を

曇らせる

.....

一日の苦勞は

一日で足れり.....

一日に感謝して

その日の苦勞は

持ち越さない.....

言葉は、簡単ですが

気持ちの切り替えは

うまくいきません.....

でも・・・これも習慣にして

そう思う訓練をしていけば

一日一日を裁断して

考えることによって

労苦を断ち切れ・・・という

主の教えは

身に染みますね・・・

『明日は新しい』について

このまま

ずーっと雨が

降り続けて

ゆくのではないかと

思う事がある

眠れぬ夜が

果てしなく続く闇に感じられ

一秒一秒が

胸の鼓動を刻んでゆく時

とてつもなく孤独と

感じる事がある

時間が止まって

しまったかのように

不幸は心の前進を

引き止める

まるで

未来を打ち消すかのように

現在にとりつかれる

今日の苦しみを

明日に持ち越す事はない

明日は

新しくやってくるのだから...

.....
.

今日の延長が

明日、だけれども

もっと違った意味もある.....

日付が変わっただけではなく

新しい一日が

生まれたての一日が

やってきて

それに望もうという

気持ちさえあれば

昨日の憂鬱を

吹っ切れる.....

明日は、絶対

新しい・・・

『シグナル』について

どんな時でも

あなたの名を呼べば

声を発する前に

念いの瞬間にそばにきてくださる

その暖かさに

どれだけ勇気づけられたらう

そのやさしさに

どれだけ

なぐさめられたらう

すべての問題

悩み、苦しみは

あなたの名を呼ぶようにしむけられた

おろかな人間たちへの

あなたからのやさしいシグナル

なぜなら

あなたと離れることは

永遠の死と

絶望の悲しみと

光を失うことだから

.....
.

真理とともにある

よろこびを忘れ

この世の肉体を維持することのみに

おもいも引っ張られ

その道から

外れたとき

人は、苦しむ・・・

道に迷ったときの

不安は、恐怖を増し

その孤独ゆえに

悲しみに襲われる・・・

その暗闇から

逃れられずに

人は、途方に暮れ

手探りで

何かにすがろうとするけれども

その暗闇を利用して

導く者は、更に

闇深くへ案内して

その不幸をよろこぶ者でしかない・・・

ならば

心の奥から

真実、真剣に

その願いを発ればいい・・・

それは、約束であり

ルールでもあるから・・・

その決まりを

忘れてるのが

私たち人間の迷いなのだから・・・

『ふたつの世界の間で』について

生きているのか

死んでいるのか

夢なのか

現実なのか

何が本当で

何がうそなのか

その間をさ迷いつつ

流れている

僕ら自身の魂は

この世にいて

この世になく

あの世にして

この世に影響

与えつつも

常に

ふたつの世界に

足を広げ

しっかりと踏みしめている

.....

この相対の世界のなか

対立しているふたつの世界.....

善と悪

嘘と偽り

正と邪

男と女

この世とあの世.....

鏡のように

違う世界が

向き合っているかに

見える.....

その間で

どう生きたらいいのか.....

諦めて

虚無に浸る者もいる . . .

立ち向かって

どちらかの価値に滅びる者もいる . . .

けれども

両方の世界に

しっかりと立つこともできる . . .

それは、智慧の力によって

『努力する楽しみ』について

遠くかなたに見える

一すじの光

求めて

どんな困難や苦難に

出会おうとも

生きて行こうと思う

決意の固さ

自らの心に

確かに

握りしめながら

ゆっくりと

しかし

休まず

今

ある現実を

心よく受けいれ

目にやさしさをたたえ

口もとにほほえみて

ほがらかに

決して

疲れずに

永遠の時を過ぎてゆく・・・

努力する楽しみが

今日も勇気づけてくれる

.....
.

努力することが

楽しみとなったら

それは、成功を手に入れたも同然

精進への没頭こそ

真の他力を得る行為

だからこそ

それを信じて

その心境を得るまで

苦しくとも

つらくとも

前を見てゆくことに

自分の生きる姿勢としていく・・・

『孤独に耐えられない理由』について

なぜ

君は神を恨むのか

神は

君になにもしていないのに

なぜ

君は神がないというのか

いつも

君のそばで微笑んでいるのに

なぜ

君は不幸を神のせいにするのか

神は

君にすべてを

託しているのに

なぜ

君は神を疑うのか

すべては

創られた

形跡があるのに

なぜ

君は神と共にいないのか

だから

孤独に

たえられないでいる

.....
.

離ればなれの寂しさ・・・

ふと襲う孤独感のなか

自分は、ひとりぼっちだと

考えては、いませんか・・・

それは、愛を知るための

前兆です

愛は、その疎外感

隔絶されたと

思う悲しみに

確かに、

一つであったときの

郷愁をきっかけとして

深く知るもの

かもしれませんね

『自分の言葉で』について

若者たちは

いつも語る言葉を

さがしている

それがロックであったり

バイクで走る事であったり

ある考えに

傾倒して

ゆく事であったり

自分の言葉を

代弁してくれる

何かに

青い情熱を

ゆらめかせてゆく

でも

そんな時代も過ぎ去り

一種の空白の中で

自分の言葉

失いはじめてゆく

けれども

その時代の静寂の中

語る言葉を

みつけるために

走りだそうよ

みつけにゆこうよ

きっと本当はすぐそこに

手をのばせば

届くところに

振り返れば

あるのかもしれない

もうすぐ

時代がきらめくから

そのきらめきの

一つになるために

自分の言葉

探し出し

自分の言葉で

語り合おうよ

.....

誰かが言ってくれるのを

待つのではなく

自分の言葉を

みつけて

語ること.....

それは、

自分自身を

見つけることと一緒に

とても難しいことかも

しれないけれど

自分の価値を

発見するためには

避けては、

通れない道かもしれませんね・・・

『心の杯』について

心の杯を

満たすものがある

満たす

その水は

神の言葉

神の言葉は

語らなければ

それは

僕自身の

苦しみとして

僕の心

痛みにふるえる

心の杯を

満たすものがある

満たす

その水は

神の愛

神の愛は

与えなければ

それは僕自身の

苦しみとして

僕の心

痛みにふるえる

心の杯を

満たすものがある

満たす

その水は

神の智恵

神の智恵を

生かさなければ

それは僕自身の

苦しみとして

僕の心

痛みにふるえる

心の杯を満たす

神の命の水を

受け取って

それを

無駄にして

しまっではいけない

自分だけのものに

してはいけない

君のとなりにいる人

すれ違う人に

肩よせて歩く人に

与え 与え 与え

うるおし うるおし

その湯きから

うるおう喜び

分かち合い

人と人が

真につながり

確かめ合える

愛のいやし・・・

心の杯を

満たすものがある

心の杯を満たし

あふれてくるものがある

.....

なぜ、詩を書くのか

それは、

こころを満たす言葉が

心の杯を満たし

あふれ、こぼれるから.....

こぼれ落ちる前に

すくい上げ

そして、ことばにしていく.....

その繰り返しですが

その動機は、

愛されている確信が

その愛を

自分だけのものしてはならない

という愛ゆえの

愛自身の存在理由により

自分から他へ

自分の出来ることは何か

それへの答えとして

詩を書き続けている・・・

その気持ちが

薄れることは

自分が

生かされていることを

忘れている

傲慢の瞬間でもある・・・

そう戒めつつ

今日も詩作り続けています・・・

『真実の夢』について

たえまない努力

という2文字が

歴史を支えている

たえまない努力

という言葉が

あらゆる書物の中に

刻印されている

自分を助け

自分を磨き

最高の精神を目指して

永遠に続けられる努力

その努力を楽しむ中に

幸福を発見する時

時計の針は止まり

風はやみ

目は閉じながらも

心の目が確かに

真実の夢を見る

.....
.
成功は、

努力のカスであるとは

本多静六博士の

言葉ですけれども

確かに、

努力の習慣が身につく

そして、それが喜びにまで

昇華した心境には

何の恐れもありません・・・

見習いたいものですね・・・

『真実の命』について

あつい雨雲におおわれて

太陽の光・・・

僕らのもとには届かない

でも太陽は

いつもと同じに輝いている

夜を照らすやさしい輝き

月の光

ときおり流れてくる

真っ黒な雲にさえぎられ

光を失う暗闇の中

でも

月は憐々と輝き続けている

どうしようもないといわれている人

役立たずといわれている人

落ちこぼれて失意の中にいる人

気をおとす事はない

君の心に雲がかかっているだけ

その雲の向こうに

光り輝く君の本当の心

いつもと同じ

生まれた時から

いや、生まれる前から

神様に生命

ふきこまれた時から

光の生命

永遠に宿している

.....

人間は、神の子

仏の子です・・・

その部分を

どう生かすかが

本人に課せられた

問題です・・・

生きていて

心を曇らせてしまうことも

あるでしょう

けれども・・・

それを人のせいにしては

何の解決にもなりません

その雲は

自分で取り除かなければ

誰も取ってはくれないからです

その雲の向こうには

光りが・・・

本来の生命が

輝いているのですから・・・・

『神様を感じる時』について

白い光

あふれる輝き

日だまりの中

光の帯がゆれている

一人

自分の体に反射する

輝きにさえも

心を奪われたように

なにもいらなくなる

目を閉じても

光が見えるほどの暖かさに

僕は神を思う

.....
.

私は、神様の臨在を

感じます・・・

私は、神様が

いないとは

どうしても思えません・・・

それは・・・

生まれた時から

今まで

信じるということとは

少し違う・・・

目に見えないけれども

いつも心はあるように

その息吹を

足音を身近に感じます・・・

それは・・・

疑いようもない

現実として

いるとかいないとか

議論する前から

確かに・・・

側にいて下さる気がして

なりません・・・

これは、私の正直な

告白です・・・

『静寂のなかで』について

緑が風にゆれている

光は眩しく輝いている

けれど 何の音もしない

何の音もしない

風の音も

緑がゆれる音も

何もしない

でも

緑がよろこび

語っている

光がまぶしさ

語っている

ほこらしげに

何か

崇高な意味を秘めつつ

僕に語っている・・・

.....

一瞬

すべてが静止しているような

錯覚を感じる時がある

それは

その場所と

その時間だけが

何かに、切り取られ

自分の息だけが

聞こえてくるような静寂が

光りを

よりいっそう

強く感じる

その瞬間に

大いなる方と

共にいる実感に

安らぎを

覚える一時に

生かされていると

感じるときでもあるように

思います . . .

『ことばにして』について

時々 襲ってくる

歓喜にも似た

やさしい光の情熱を

伝えたくって

僕は言葉を捜す

このたとえようもない

胸に中にひびく

光の情熱に

うなされる僕は

そこにただ

たたずむばかり

光の喜びに

おぼれそうになりながら

その余韻

言葉にして 伝えてゆく

永遠に

.....

なぜ

詩を書くのでしょうか・・・？

おそらく

頭に

ことばが

浮かぶのではなく

胸の奥から

熱い塊が

出口を求めている

それを

ことばにしようと

するけれど

そのものでない

もどかしさ・・・

ゆえに

また、書く

そして、更に書く . . .

永遠に繰り返す

それを

飽きもせず

苦もなく

辛くもなく

喜びとしている . . .

それが

詩人なのかも

しれませんね

『バラバラをつなぐもの』について

人びとが

バラバラになっていく

バラバラになった

人びとは人を憎み

他人の欠点を指摘する

人の悪口を言い合い

ますます

人と人とは離れていく

離れてゆく人びとは

その間に吹く風の冷たさを

他人のせいにして

憎み

暴言をくりかえす

同じ時代に

生まれあわせながらも

人と人をつなぐものが

なにも見えなくなってゆく時

救いを求める声が高まってゆく

主よ

教えてください

私たちは

どうすればいいのかを

.....
.

ことばの違いよりも

心の違いに苦しむ

理解できないことへの

恐怖をつのらせ

相手を攻撃することで

自分を守ろうとする

国もそう・・・

個人も同じ・・・

他を攻撃することで

自分の恐怖心を

隠そうとしている

その弱さのなかに

人一倍の狡猾さを

育てている・・・

でも

その心、安まることはない

ならば

人心を捨て

真理に耳を傾け

己の恐怖を滅する

すべてが空と感得したならば

すべての人に

仏神の光りが

見えるはず・・・

『違ったもののなかに』について

人と人との違い

考え方の違い

国と国との違い

その違いさえ

主の愛に他ならないのに・・・

色々な学校があるように

色々な会社があるように

その人の考えに基づいて

自分にいちばんあった

自分にわかりやすいものを

用意して下さった

主の愛を

踏みにじってはいけない

色々な違ったもののなかに

共通するひとすじの光

それを今

考えるときにきている

.....

同じ過ちを繰り返すことを

愚かという・・・または、癡・・・

知が足りないといいます・・・

仏教では、六大煩悩のひとつのなかに

数えられています・・・

同じ過ちを繰り返す前に

冷静に、心を落ち着けて

じっくり考えてみる

からまった糸が

ほどけていく・・・かもしれませんね

『完全なる自由を与えられて』について

自由に考えることができる

僕らは

本当の自由をまだ知らない

自由に選ぶことができる

僕らは

選ぶことをおそれている

解き放たれた鎖を

見つめ

その鎖につながれていた

いつもの安心感にすがろうとする

僕らは

独立した人間とは

呼ばれないだろう

僕らは

何処へ行こうと

それをさまたげるものはない

幸福になることも

不幸になることも

僕らの心の持ちかたしだい

不幸になりたいと思っているひとを

神様はひきとめたりはしない

神様は

人間に完全なる自由を

お与えになったのだから...

.....

自分の心の選択の結果が

幸不幸を分けている

どんな状況下におかれたとしても

自分が決断していることには

かわりがない・・・

ゆえに・・・

自分が決めていることに対して

誰が責任を負おうとしてくれるのか

それは、自分しかいない・・・

自由を与えられた

責任は、

すべて自分にかかってくる

蒔いた種は

蒔いた人が刈り取るべし・・・

この法則から逃れることはできないし

種を蒔くのは自由だし

その担保として

責任が、重くのしかかってくる・・・・・・

『月の光のあたたかさに』について

気持ちの整理のつかないまま

一日を終えたときの

あの苦い夜の闇

月は大きく

太陽の光を受けて

煌々と輝く美しい夜も

目の前にある苦悩に

僕の目にはうつらない

人間は地球のうえで

自分の幸福を考えて

のたうちまわっているけれど

自然は変化することなく

そこにある

いつも

そこにあるやさしさに

僕は救われる

目をつぶると

僕をやさしく

抱いていてくれている

何億年とかかわらない

月の光...

なぜか

今日は あたたかい.....

.....
.

今、各地で

猛威を振るっている

自然.....

人間の営みを

あざ笑うが如く

無にしてしまう.....

その力の凄さに

私たちは、恐れおののくだけ.....

いつもは

やさしく人間を包む

自然も

時には、牙をむき

私たちに襲いかかる.....

何も出来ずにいる

私たち

ただ、逃げ惑う

私たち

やがて

忘れたかのように

元に戻る

自然の営みに

人間の無力さを知る

『自分の立っている場所』について

限りなく自分を信頼する

自分と自分の

成すべきことを

もし...

自分と他人との

評価に苦しむのなら

自分と他人を

比べる間違いに

気がつくべきだと思う

その嫉妬の炎は

自分も焦がし

他人をも焼きつくして

しまうもの

もし...

限りなく上を願うなら

神を見よ

神を見て

自分の足らざるところを

努力で補おう

嫉妬で心狂うのなら

同じ方向を歩む

友を祝福しよう

それが

君を高める

第一歩なのだから

上に登ろうとする方向と

横へ限りなく広がる

愛とが

交差する十字のしるし

そこに

自分の立っている

場所がある...

.....

嫉妬心の克服は

とても大切なテーマです

これを克服しない限り

前には進めなくなるときが

くるからです

また、

誰もが通る道でもありますね

自分の関係関心分野における

自己イメージの肯定化は

成功への

第一歩だと考えます

嫉妬すれば

それを否定することになり

自己イメージを

否定することと同じになり

失敗への階段を

下りていくことになってしまう・・・

祝福の考えは

他人を肯定し

自己を肯定するところから

生まれます

いつも、そうありたいですね・・・

『自由と平和』について

大空を舞う自由

それを求めるのなら

何もつかんでは

いけない

だって

重たいものをたくさんつかんで

空を飛べるわけがないから

湖のように

心

平和に保ちたいのなら

自分の心の湖を

大きくすること

だって

小さな水たまりだったら

ほんの小さな小石を

投げたって

大きな波紋に

なってしまうから

何もつかまず

そして大きく

それが自由と平和

それを求める者を

人間というのだろう

.....
.

悟りを求めてこそ

人間の真なる

欲求に他ならない

迷い、行い、苦しみを

つくる

その業を絶っていく.....

おもいの原因に立ち返って

深く考えを巡らせていく . . .

すると、

必ず

どこかで、

なぜ自分がそうするのが

わかる . . .

その時、心が

軽くなる . . .

それが、自由

そして、その結果

得られた境地が

平和 . . . な静寂 . . .

そして、何度も何度も

繰り返し、

深く自分を巡る旅に出る

その道は、果てしない

無限の悟りへの道 . . .

永遠の喜びにあふれた

向上の道・・・だと

私は、思います・・・

『心の中で咲く一輪の花』について

どんな限界状態でも

人間は

生きがいをもとめていく

どんなに闇深くとも

一条の光

見いだそうとする

足もとが

ガラガラ崩れるような

挫折のさなか

明日の命の保障がない

死刑囚でも

本当の素晴らしさ

自分の心のなかに

発見しようとする

この世の価値に

振り回されることなく

自分の外見的な価値が

崩壊したとしても

心のなかで咲く一輪の花

その根は

宇宙の意志としっかり

つながっている

.....

自分の意思が

萎えない限り

その花は、枯れることはない

すべては、自分の思いしだい

信じる強さのみ・・・

どこまで信じられるか

夢を見る力にも

心の強さにも

人それぞれの力といえる・・・

自分を信じることに

実力が試されている . . .

そう思いながら

前を向いて

生きていきたいと思います . . .

『心の王と成るために』 について

孤独を

無視することはできまい

孤独になることを

恐れる心

どうにもならないほど

周りの人びとから

遅れてしまうような

危機感にどうしようもなく

はかない命けがしてゆく

どんな極限状況のなか

目を閉じて

想像力を羽ばたかせ

心を遊ばせ

楽しませ

夢のなかに歩む

豊かな輝き

心にふくらむ

孤独に打ち勝ってこそ

孤独を受け入れてこそ

自分の心の王となれる

.....

現代の若者達が

極度に恐れているもの

それは、孤独ではないでしょうか.....

皆、友だちの多いことを誇り

友だちが少ないことに嘆き

どんな友だちがいるか

どん人と知り合いなのか

ということを

競っているような気がいたします

それを根拠に

自分を

高く見せようとしているけれども

どんな偉い人と知り合いでも

どんな有名な人と知り合いでも

全く、自分とは、関係ありません・・・

自分の高さは、

孤独の深さに支えられている

ということに、気づいていただきたいと

私は、考えます・・・

『心の言葉を解き明かせ』について

心の言葉

命ずるままに

自分という

にせものの

我をなくして

まいしんしてゆく

道は困難

道は険しく

道は遠く

道は果てしない

永遠とも

おもえる時の流れ

移り変わる

すべてのものたち

変わってゆくからこそ

変化していくからこそ

今のこの意味を

たしかに感じとり

命を最大に燃焼させ

心の言葉を解き明かしてゆく

今たしかに

生きている

.....

この今を

生かされていると感じるか

放り出されたと

感じるか.....

変わりゆくものを

認めずに、自分を誤魔化すか

それとも、慈悲と受け取るか

幸不幸を分ける

自分の判断の中で

真実の自己を見つめるのは

難しい.....

しかし・・・仮の宿りとして

永遠の生命に思いを馳せれば

苦は、苦ではなく

魂の糧として

ひとつ、大きくなれると

信じられますね・・・

『人の心を汚す怪物』について

真実を

語るものがある

その声は

とどかない

うそを

宣伝するものがある

その声は

大勢の人を

そめあげていく

うそで

そめあげられた

人びとの不幸は

だれが

責任をとるというのか

うそを言う人は

知らん顔

うそに

そめあげられた人たちは

だれかのせいにするしか

自分を助ける手立てがない

めまぐるしくかわる

うそのなかに

真実はみえない

うそを宣伝する人たちの

顔もみえない

たれながしの公害で

街をそめあげても知らん顔

街をこんなにしてしまって

人の心をこんなに汚して

知らん顔をしているやつがいる

人の心を汚すやつらが

人間の仮面を被る怪物たちが

人の心をもてあそび

壊して、遊ぶ

怪物たち・・・が

笑いころげている

.....
.

面白可笑しく

題材を取り上げて

扱き下ろす・・・

でも・・・

上げれば、上げるほど

落下した本人の心は

傷ついている・・・

持ち上げるだけ持ち上げといて

その土台を足場を外す・・・

それを見てほくそ笑んでいる・・・

だれも責任を取らない

そうした事柄を

冷静に見極める目を

養いつつも

そんなことに振り回されない

自分を創っていきたいと

考えます・・・

『人格を磨くもの』について

苦悩とは何んだ？

嵐のようなものか？

ある詩人は言った

「ただ立ちて待て」

この世の生の意味をなくしてゆくものに

うち勝つ勇気さえ失せた時

どこに希望を見いだしたらいいのか

ある詩人は言った

「苦悩は よりよい人格を形成すると」

心がやすりに磨かれて

美しくなるのなら

受け入れようか...

自己と対面する

あるがままの自分

裸の自分

ごつごつとした自分の様相が今

あばかれてゆく

耐えるのだ

耐えるしかない

真に生きる意味を

見いだす為に

.....
.

苦悩は、心を磨いてくれる

苦悩は、心を強くしてくれる

葛藤は、応用力を高め

悲しみは、精神を深め

孤独は、魂の広さを

教えてくれる・・・

自分を鍛える出来事は

避けて通れる時もあるけれど

逃げれば、違った形で

同じ問題が提起される・・・

人生は、

修行という

ことですかね・・・

『僕らの存在理由』について

生きていく意味を

見失った時

人間は絶望の淵に

立たされる

人間は誰にも

愛されなくなった時

その存在理由を

失ってしまう

自分とは何なのか？

どうして自分は

ここに存在しているのか？

青春の叫びは

心の中で

こだまするけれども

それを無視して

生き急ぎすぎてしまうと

心のかたち

バランスを失いはじめ

暗闇に埋没してしまう

ああ...

自分の心の中にある

熱い 熱病にも似た

情熱のうずきを

確かなものとしなくてはいけない

それが

僕らの存在理由だから

.....

人間には

菩提心がある.....

心の中に

向上したい欲求

知りたい欲求

自分を高めたい欲求.....

それらは、年を重ねると

薄れていってしまう感情では

あるけれども

そこを踏み止まって

自分を磨いて

向上させていく・・・

その途中で

自分の使命や

存在理由が

明らかとなり

更なる環境が開けていく・・・

現実の重圧は

その心情を押しつぶし

無かったものとしようとする力は

常にかかり続けるけれども

だからこそ

その意思は

強さが試され

その思いの本物さが

問われる・・・

たとえ

押しつぶされそうに

なったときでさえ

希望は、前方を照らしている

その光を頼りに

一歩ずつ進むことを

止めないのは

それが

僕らの存在理由として

心に刻まれているから・・・

かもしれませんね・・・

『ただそれだけのこと』について

この肉体だって

神様がつくられたもの

だって

みんな同じようなものだから...

僕らの考えていることだって

似ていると思う

男は女の問題で悩み

女は男の問題で悩み

学校の間人間関係で悩み

職場の間人間関係で悩み

人生の過去を悔やみ

将来を不安に思う

神様から見たら

みんな

だいたい同じようなもの

だから

自分の肉体のことで

悩みすぎないこと

人と人のことで

悩みすぎないこと

みんな同じ人間なのだから

ただそれだけのこと...

.....

同じ悩みを抱えている

人間同士.....

それなのに、違って見えるのは

なぜ.....

それは、恐らく

人の心が見えないから

誰でも、寂しいと感じている

誰でも、何か物足りないと感じている

誰でも、将来を不安に思っている

それは、未来が

不確定だからしょうがない

自分だけが

世界で一つの悩みを抱えている

錯覚に陥ることもある

けれども

みんな共通の心を持つ者として

似たような事柄と

格闘している・・・

そう思えば、

自分だけではないという

隔絶された気持ちも

少しは、

寄り添えるのかもしれませんが・・・

あなたの悩みは

ひょっとしたら、

あなた固有の悩みでは

ないかもしれませんよ・・・

『遠くに見える星の瞬き』について

遠くに見える

星の瞬き

その輝き

きらめく理想

理想を求め歩む

未完のもどかしさ

頬をつたう

悲しみ一雫

『まだまだ まだまだ』と

自分に満足する

心と戦い

批判を浴び

倒れそうになる

弱さを励まして

決して

決して

『諦めるまい諦めるまい』と

静かに

春のせせらぎ

流れるように

透明な清らかさ

胸に輝かせ

その微かな瞬きを

道標として歩み続ける

それが人生...

.....

時折、その瞬きさえ

消えそうになる

日常のやるせなさ・・・

日々・・・膨大な

仕事の量に

隠れてしまいそうになる

理想・・・

こんなことをやるために

生まれてきたのかと

嘆きたくなる

今日に・・・

心が遠くを眺める余裕を

つくるべく意識する・・・

理想を失う前に・・・

この世に来た意味を

喪失する前に・・・

『何の為に』について

何のために

そんなに虚勢をはるのだ

何のために

自分を高く

見せようとするのか

何のために

苦痛に

ゆがんだ心をひた隠し

薄笑いを浮かべるのか

何のために

知っている

知識をひけらかし

知らないでいる人達を

あざわらうのか

ソクラテスは言った

『私は

知らないということを

知っている者だ』と

『知らないということを

知らないと言える者だ』と

『汝 自身を知れ』と

動機が問われているのだ

原因が問われているのだ

何のために...ということが

いつも突きつけられている

心にいつも

突きつけられている...

.....
.

何のために

知識を獲得するのか

それは、

利他のおもいから

発生した菩提心.....

そうでなければ

刃を研ぐだけになってしまう

知識や言葉は

現代においては

武器以上に

人の心を傷つけてしまうもの

だから、その動機において

幸福に寄与する

情熱がなければ

他の人々の役に立つ

思いがなければ

きっと、鋭い言葉とその知識は

血に飢えた刃に

なってしまう・・・

かもしれませんね・・・

『時代のかげり』について

時代のかげりが

見えてくる...

秋の終わりにも似た

寒々しいかぜが

頬を打つ

冬じたくも

整わぬうちに

太陽の色は

悲しみを語り

大地に

なみだ落としてゆく

この悲しみの予感を

誰が感じているのだろう...

まだまだ

始まったばかりの

悲しみの時代を

物質文明の時代のかげりを...

.....

いろいろなところで

起きている不調和・・・

新しい価値との衝突なら

まだいい・・・

二千年の因縁は

いまだに続く

戦渦を広げている・・・

自然は、温度をあげ

生態系は、崩れ

その警告さえ

無視する私たちは

地球を滅ぼす

ガン細胞のようなものなのか・・・

動物たちの

行き場のない恨みに

はっとして逃げだしても

逃げ切れるものではない・・・

私たちの心のゴミは

地球を覆い尽くそうとしている・・・

『真実を知らない悲しみ』について

真実を知ることが

どれほど大切なことか！

真実を

知ろうとする心が

どれほど

尊い気持ちであるか！

それを邪魔することが

どれほど

その人の自由を

だいなしして

その人の仏性を

傷つけるものなのか！

知ってほしい

真実を知らない愚かさに

やがて気がつく時

何千年の後悔

何千年の涙にくれる

その前に・・・

知ってほしい...

その悲しみを...

その悲しみの意味を...

.....

自分は、いい

しかし・・・

他人を

巻き込んではいけない

自分は、いい

しかし・・・

仲間をつくり

その仲間の人生も

狂わせてはいけない・・・

自分の意見は

自分の意見として

自分の責任において

述べればいいし

その結果は

自分が負えばいい

しかし

他人の人生は

その人達のかげがない

ものなのだから

その自分の意見に

同意させるようなことは

しない方がよいと

私は、考えます

自分の不幸への選択を

他人を道連れにして

突き落としては

いけないということです・・・

『人のなかの獣』について

他人に服従を

押しつける

強制的な暴力を

日常的に繰り返す

それは

ありきたりの

毎日のなかに

いつも潜んでいる

強い者から

弱い者へと

弱い者は

心を砕かれ

血を流し

断末魔の叫びをあげる

まるで

森の中を

逃げまどう

小さな動物のように...

ありきたりの

日常の中

強制的な暴力が

息を潜めている

人の中の獣の部分が

頭をもたげようと

牙をむきだそうと

息を潜めている...

.....

学校、会社、社会・・・

集団になると

頭を擡げてくる

狂気・・・

一対一だと

ほとんどの人は

優しい・・・

しかし

集団になると

誰も止めることできない

怪獣になってしまうことがある

想念の塊が

襲いかかってくる

時折、目にする

ヒステリックな

集団性・・・

これは、自分もなりうるものだと

ひとりひとりが

気をつけるしか

ありませんね・・・

『世に勝て』について

生きているだけで

打ち寄せてくる

ふと

気づと心を暗くする

この悩み...

克服しても

克服しても

何処からともなく

僕を苦しめる

悩みは何も生まない

悩みは

僕らの肉体の

限界に挑戦してくるように

いつも

戦いを挑んでくる

肉体に宿る僕らの魂は

悩みによって

さらに

がんじがらめにされてゆく

悩みを断ち切れ！

悩みを打ちのめせ！

今まで戦いに

勝利してきた方法をもって！

悩みはいつでも

僕らをねらっている

僕らにとりつき

不幸を笑っている

そんなものに負けてたまるか！

そんなものに

打ちひしがれてたまるか！

この生をおえるまで

戦い続けてゆくのだ

勝利のその日まで

.....
.
仏教でいう

六大煩悩・・・

刈っても刈っても生えてくる・・・

悩みのもと・・・

貪る気持ち

怒り、愚かさ、自惚れ

疑い・・・正邪の逆転・・・

いつも

心を磨いていないと

どこからともなく生えてくる・・・

生きる意欲と

密接な煩悩は

それ自体が生と

直結しているがゆえに

生命ある限り

逃れることは、

できない・・・

そう思って

日々、刈り込んでいくしか

ありませんね・・・

『奪うほど苦しい』について

人に求めれば

求めるほど

苦るしくなる

知らず

知らずのうちに

相手に何かを

求めてしまう

ほめてもらいたい

こんなふうにしてもらいたい...

けれども

その方向に

心が向けば向くほど

苦しくなる

その心

奪おうとすればするほど

この胸

苦くなる

この心の苦しみ

この胸の苦味

これこそ

愛を奪おうとする者の

痛みに他ならない

愛を奪えば

胸が痛い...

愛を奪えば

心が苦しむ

.....

愛を与えようと

心に決めたとして

最初の思いとは

裏腹に

愛を欲する気持ちに

すり替わる・・・

いつのまにか

称賛を求め

それが叶わなければ

不機嫌になる・・・

その分岐点は

いつも静かにやってくるから

心の中で

常に、気をつけていないと

すり替わったことに

気がつかないほど

逆転してしまう・・・

心を平静に保ちつつ

振り返ることを

最初の気持ちを

忘れないことを

肝に銘じていきたいですね . . .

『風がはこんでくるもの』について

雨あがりを伝える

鳥のさえずりに

耳を傾けながら

希望に胸膨らむ

清々しい太陽の光

どこかで

だれかに出逢いそうな

爽やかな街角

家に戻る足どりも

いつもより

緩やかで

でも

良い便りが

届いているという期待が

いつもより強い...

厳しい季節のなかの

ひとときのやすらぎ

ときより

風がはこんでくれる...

.....

よい予感

季節と共に

吹く風に

心が受け取り

与える

愛にも似た

透明な力と

共鳴する

希望・・・

私たちは

それを否定せずに

日常の雑音にかき消されずに

真摯に受け入れることができれば

鳥たちのように

明日に悩むことなく

今日をひたむきに

生きることが

できるのかもしれないね・・・

『満ちあふれたはじまりのとき』について

生きがいをもとめて

多くの人々がもがいている

自分は何なのか？

自分は何をしたらいいのか？

自分の役割は...？

と問う君の心

統一性を失い

逃げ道をさがす...

自らの主体性の喪失のうちに

老いを迎え

生への執着をいっそう深め

醜くのたうちまわる

けれども

あの時のことを思い出してみないか

『自分とは何なのか？』と真剣に問うた

学校の帰り道

教科書に書き留めた一遍の詩

空想と創造に満ち溢れた

人生の初まりのときを！

.....
.
新学期の始まる前

新しいノートに

夢心くらませ

その真新しさゆえに

自分の

名前を書くことさえ

手が震えてしまった

緊張は

いつしか、日常へと

変化し、何も感じなくなってしまう.....

人生は、

この繰り返しにも似て

新しい出来事は

すぐに色あせてしまう.....

けれども

確かに、あつたはず

その期待に満ち

夢心くらんだ

その時は

自分の心の中で

しぼんだだけ・・・だけれども

もう一度、ふくらませ

しぼんだら、ふくらませていく・・・

その繰り返しの耐えていくことが

やがて、生きがいと同じであると

思ったとき、生きる意味は

君のものとなる・・・

『ほんのささいなことの中に』 について

ときおり吹く

厳しい風

コートのえりを立て

背中まるめ

歩いてた

女の子が歩道の端で泣いていた

僕は『大丈夫？』と声をかけた

すると

女の子は『うん...』と言って

少し笑った

僕はちょっぴり心が

暖かくなった

その感触が冷めやらぬうちに

自転車が

僕の前をふさいだ

僕は半身になり

自転車が通りやすいようにした

自転車に乗っている人

頭ペコリ『ありがとう』と

風が通るような優しい声で

僕の横を吹きぬけていった

僕は

また

心が暖かくなった

だんだんポカポカしてきた

今度は目の前に男の子

『ねえ 百円拾ったの どうしたらいい？』

僕は『きっと神様からの贈り物だから

もらっちゃえば！？』と言った

すると

困った顔していた

男の子に笑顔の花が咲き

百円玉を握りしめ

風と共に走っていった

僕はもう

コートのをりを立てることも

背中をまるめて

風を怖れることもなくなった

心が暖かくなったとき

良心という神の子の存在が

クッキリと胸に感じた

ほんのささいなことの中に...

.....

日常の

ほんのささいなことの中に

仏神を見つけたとき

胸があたたかくなるのは

私たちが

もとは

ひとつのものから

分かれた

魂だから

自分の中にあるものと

同じものを

他人の中に

見つけたとき

私たちは

一つであると

実感できる・・・

悪意もあるが

善意もある

この世界で

自分の心の中で

選り分けていくことが

とても大切なことだと

知りました・・・

『もうひとつの道』について

誰もが

たどるように

普通の道を歩いてきた

ある時

道は二つにわかれ

一方は

幾人の者が通ってならされた

歩きやすい道

もう一つの方は

草がぼうぼう生えている

人が通ったこともないような

道なき道

僕は迷いながらも

未知の世界に憧れて

もう一つの道なき道に念いを向けた

人生において危険を冒さないことが

もっとも危険だということを信じて

今 その道を歩いている

その道は

古の人々が

通った道でもあるが

今は、もう見る影もなく

塞がれている・・・

その道は

危険ではあるが

確かに

頂上に向かっている・・・

自分にとって

大切なことは

新しい経験を積み

新しいことを恐れず

受け入れる器を

つくり広げ

大きな人間になることを

信じて

その道が

その険しさが

確かさを証明していると

揺るぎない信念を

貫くことだと

考えます

『気概』について

正しい者は

強くなくてはならない

日本の繁栄は正義だ

どうどうと

世界の国々に宣言しよう

昔

日本は強かった

潔かった

死を恐れなかった

美しかった

日本の人々の歩み進んだ

歴史の跡を

すべて消し去り

日本は間違っているだけの

愚かな国ではないはずだ

日本があったからこそ

西の国

北の国の

植民地支配が

終わったのだ

日本があったからこそ

アジアが独立したのだ

日本の心

大和の魂を

死なすわけにはいかない

日本の歴史の気概を

ふたたび

取り戻すのだ

日本人

自らの選択によって

日本人

自らの意志の力によって

.....

今、日本人に足りない態度は

毅然として、

言うべきことを言うことだと

思います

他の国がどう思うかではなく

自国がどう考えているかを

はっきりと正確に

伝えることだと思います

戦後民主主義を直接に浴びた

団塊の世代の方々は

親たちが、喪失した価値を

見つけられずに

権力とお金を

憎むしかなかった・・・

失われた二十年・・・

バブル崩壊からの不景気は

見事に、彼らが主役でしたね・・・

その方々も

もう引退の時期に来ていますが

最後のあがきを

日本占領政策に

加担している

民主党に

憑依していますね

これは、技術や手腕ではなく

マインドの問題なのです・・・

日本は、悪者

日本は、ダメ

日本は、島国

日本は、所詮・・・と

口癖のように言っていれば

子供達も

心を構築することができずに

喪失した寄る辺なき

クライシスと

育ってしまいましたね

学校を解体し

日米安保に、ただ反対し

反対が大好きだったから

その子供達の

心も解体された

憎悪が牙をむいている・・・

そのつけは

引きこもりやニートとなって

あなたに

反対していますね・・・

もうそろそろ

やめにして

正しい歴史認識と

正しい国家としての

あるべき姿を

真の国益に照らし合わせて

構築するときに

近づいています

二十年前・・・

国益を語れば

即右翼と言われていたのを

懐かしく思います・・・

ようやく

自由に

語れる時代が

やってきたことを

とても嬉しく思っています・・・

『詩の色』について

赤い薔薇は

夜鳴鶯の

心臓に

つき刺した時の

赤い血と命とで

できている

そして

僕が書く詩は

魂にペンを

つき刺した時の

赤い血の色と

僕の命のかけらで

できている

味わってくれ

僕の命を

見てくれ

僕の赤い血を

刻印してくれ

僕の詩の色を...

.....

詩人の心意気を

書いたものです・・・

確か・・・

記憶が正しければ

オスカー・ワイルドの

短編の中に

てでくる物語を

モチーフに

詩人も

そんな気持ちで

詩を書かなければ

いけないなあ・・・と思いながら

自分を戒めつつ

志を掲げたものです

いつも

姿勢を正して

そのように

ありたいと思いながら

今日も

書き続けています

『時代の花』について

自分の不幸を

誰かのせいにしなくては

生きてゆけない

人間の弱さ...

たとえば

神様のせいに

する人がいる

神様を恨む人がいる

念いによって

宇宙を創り

太陽を創り

地球を創り

その愛の念いで

人間を創った

全てを与えた方を

憎む人がいる

たとえば

先祖のせいに

する人がいる

先祖の生前の行ないが

悪く崇めているから

自分は不幸を

背負っているという

それは違う

皆

それぞれの人生を

自分の責任において

生きているのだから

誰のせいでもない

自分が不幸を

選んでいるだけ

世の中を恨んだり

幸福な人を妬んだり

自分の肉体と

他人の肉体を比べて

嘆いたりしても

なんにもならない

誰かのせいに

すればするほど

その影くっきりと

自分に落ちてくる

影の黒さ暗闇となり

小さい子供が

その暗さに脅えるように

人間の弱さ浮き彫りになる

誰かのせいにするのは

やめよう

幸・不幸の選択は

自分自身が

いつもしているのだから

自分の周りで

起きているものごとは

自分自身が必ず原因を

背負っているのだから

誰かのせいにする

弱さを捨てよう

そして

自らの責任において

種を蒔くのだ

時代の花の種を

そして

花を咲かすのだ

時代の花を

誰も咲かせたことのない

君だけの花を

時代の花

君の心に種を蒔け

.....

悲劇を好む人

喜劇を好む人

平凡を好む人

激動を好む人

美を好む人

魂の傾向性は

色々あります . . .

しかし

いい人も悪い人も

関係なく

その傾向性に

引っ張られて

人生を形作ってしまうのも

事実 . . .

こんなにいい人なのに

不幸が訪れる . . .

こんなに悪い人なのに

幸運な人もいる・・・

それは

その人の

心が呼んでいるから・・・

いい人も悪い人も

その人の魂が

そちらの方向を

向いていれば

そちらにハンドルを

切ってしまうえば

その方向に

行ってしまうから・・・

同じ会社にいても

同じ学校にいても

夫婦であっても

兄弟であっても

なぜか

運命に、差が出てしまう . . .

同じような環境なのに

天と地の違いも

ある人がいる . . .

ならば

自分の心に

よい種をまいて

自分の魂の傾向性を

見抜いて

自分の心のハンドルを

切っていく . . .

その方向に

進んでいくから . . .

『笑顔で迎える旅立ち』について

時は無常に過ぎてゆく

たとえ

どんな幸福なひとときでも

たとえ

どんな不幸のさなかでも

どんどん明日に押しやってゆく

その激流

そのたえまない流れ

押し止めることも

引き返すことも

できない...

時の大河を流れて行く

僕らは

この世の別れを惜しんでみても

死へ

そして旅立ちの日を

笑顔で迎えることを考えなくては

今、生きている意味もない

.....

この世での成功は

あの世での成功とは

限らない・・・

悪行の限りを尽くして

人を悲しませ

墮としませて

あの世に、かえってみれば

そこは、生前の

人々の悲しみに

魂の比重は、重く

その重さゆえに

墮ちていくしかない・・・

縁起は、

この世ではじまり

あの世で完結する

だから

すべての人は

平等に

その結果を受け入れるしかない

なぜ

あんなに

いい人が、不遇なのか

なぜ

あんなに悪い人が

この世で、成功したかに

見えることもあるが

それは、

旅立ちのとき

すべてが

人生の物語が

完結するのだから・・・

善と悪の報いは

その衣に

染みついているものだから・・・

『生命を懸ける理由』について

僕が詩を書くのは

地獄を見たからではない

天国を感じたから

普通に生き

皆と同じように

歩んでいたけれども

その

普通が間違っていると

解ったから

『なぜ』という疑問を忘れずに

あえて誤魔化しは

しなかったから

日常にころがる

石ころは

本当は宝石なんだと

知らせたかったから

この世は夢で

死しておもむく世界こそ

僕らの本当の住みかだと

わかったから

知らぬは

魂の死

君の永遠の生命を

失わせたくないから

だから

僕は詩を

書き

伝えることに

生命を懸ける

.....

広がる真理

無限の世界

果てしない大海

永遠の大道

やるべきことは

たくさんある・・・

伝えるべきことは

無限にある

学ぶべきことに

限界はない・・・

ひとつひとつを

丁寧に・・・

学び、伝えることに

終わりは、ない・・・と

考えます

『存在は使命』について

自分が

生きてゆくことで

何かの役に

立ちたいと思う

自分のできることで

誰かを喜ばすことが

できたらとおもうと

汗を流して

体を動かして

くたくたになったとしても

苦にはならない

ある念い書きとめて

伝える喜び

大きくしてゆくこと

願うこと

充実した一日に

ふと

笑顔がこぼれるように

誰かの役に立たなければ

生きている意味がない

そう自分に

言い聞かせながら

さらに言い聞かせる

『人間はより高次を目指し

より高次に奉仕するよう

創られた存在

存在自体が

使命そのものなのだから』と・・・

.....
.

何か、いいことないかな

と、心が落ち着かないとき

こんなふうに、思うことで

自分の中にある

傲慢の芽をつみ取る

きっと、今の日本は

豊かすぎて

当たり前のものでありすぎて

この幸せな空間を

忘れてしまいがちに

なるけれども

悩みは、

自分自身のことを

考えすぎているとき

もっとも肥大化するものだから

たえず、他人に対して

何が出来るかと

問うことで

自分を忘れる瞬間を

あえて作ることで

自分を救うことが

できると考えます・・・

一見、矛盾しているようですが

無我夢中になっているとき

悩みも

消えていますよね・・・

『大いなる平凡』について

静かに

静かに時間が流れてゆく

サラサラ

サラサラと

平凡という言葉に

するには

あり余るほど

穏やかに一日一日が

過ぎて行く

春の日だまりのように

夏のそよ風のように

秋の夕暮れのように

冬のポカポカした日のように

そんな

こちよ

人生のひとつ

何処かへ刺激を

求めて行くことなく

何処かで心

波立たせることなく

光

流れる音

聞きながら

光と共に

光に溶けこむ

今日という日の

やすらぎ

大いなる平凡...

.....

これを

求めていた・・・

仮初めの平和のなか

確かに

世界で、紛争は

今日も続いている・・・

しかし・・・

なんとわれようとも

日本は、平和です・・・

それが

感じられなくなるくらい

退屈かもしれない・・・

けれども

世界中が

いつの日にか

夢に見ている

静寂がこの国には

あるのかもしれませんが・・・

でも

もうすぐ

あの隣国によって

脅かされるとは

まだ

国民は

まどろみの中にいる

『本当の財産』について

何も無いと嘆く君へ

君は

お金も無く

地位も無く

名誉も無く

才能も無い

と言うけれど

君は 体を持っている

君は 友達を持っている

君は 帰る家がある

君は 風を感じる事ができ

美しいものみることができ

朝の清々しい空気を

胸いっぱい吸うことができる

生命があり

明日という光輝く未来を持っている

君はたくさんもっているね...

あり余るほど財産を抱えていて

まだ 何も無いと嘆くの・・・

.....
.

人間は

皆、無い物ねだりをしますね・・・

六十年前は

生きるのに

今日、食べていくことに精一杯でしたね

今は

餓えることもなく

明日の食料に不安を抱くこともなくなりました

しかし・・・

心が飢えていますね・・・

愛を手に入れようと

皆が苦しんでいる

けれども

有り余るほど

与えられている愛には

きっと

気がつかないものなのかも

しれませんね・・・

『self help』について

常に前進していればいい

一歩でも

たとえ半歩でも...

少しの努力を

続けてることだって

前に進んでいることに

なっていると思う

問題は

その努力を

やめてしまうことだ

どんな逆境に身を

おかれようとも

どんなに

心

悲しいことがあっても

昨日までの

積み上げた

君の宝

その

自助努力の精神を

放棄してはならない

ほら...

過去から

自助努力の人達が

声をからして

応援しているのが

聞こえてくるよ...

.....

自助努力の精神・・・

大英帝国を発展させ

明治維新の原動力となった

心構え・・・

「天は、自ら助けるものを助ける」と言われ

皆、努力した・・・

今日の日本の

繁栄の

基となった精神・・・

もう一度、この精神に立ち返り

己を克己する . . .

その精神に

天使は、喝采を送り

悪魔は、居たたまれなくなる . . .

そうです

コツコツと自分を積み上げ

感謝を忘れない人間には

悪意は、通じないのです . . .

自分を最大に守り

最大限に成長させる

考えでもあるからです

『いつから忘れた大切なこと』について

人間は

いつから神様のことを

忘れてしまったのだろうか？

人間は

いつから心を隠して

生きていくように

なったのだろうか？

人間は

神様を忘れてから

やすらぎを失ってしまった

人間は

心を隠すようになってから

お互いを不幸にして

傷つけあっている

人間は

もうすぐ滅びるのだろうか？

人間は地球にとって

がん細胞のように

邪魔な存在に

なりはてしているのか？

そのうち

神様の外科手術によって

僕ら人間は

切り取られてしまう

かもしれない

僕は眠りたい

あの日のように...

神様に抱かれていた

真のやすらぎのなかに...

.....

いないという根拠を

立証できない・・・

それなのに

いないと言い切るのは

なぜ？

いるという根拠を

示せというけれども

心も見えないよ・・・

それは

脳が作りだしたというけれども

そんなこと言っているのは

日本人の極一部・・・

人類と共にあり

歴史にそれがあり

それを否定することは

今の立ち位置を

否定している・・・

自分が自分を

否定しているのだとしたら

自分がなくなっちゃうよね・・・

『こんとんとした

世界は続く、

表現は片寄り、

バランスを失っている

明日のことを

考えない人たちが

今日を取りしきり

今日は記憶のない

過去を生み出す

だけになっている

よくないことが

次々におこり

おこった事件は

当事者以外は

見世物の種

人間のなかの最低な感情が

堂々と街を歩いている

よごれたもので街をかざっている』

今、言論封鎖が

おこなわれている。

幸福実現党を報道しないように

各社報道機関は

足並みを揃えているようだ。

諸派と言い換えられている

幸福実現党の方達の汗と熱意を

知っているのだろうか。

何が平等なのか！

何が公正なのか！

それが、知りたい。

この事実は、決して消えないし

海外からは、異様に映っている。

先の戦争に加担した

報道をおこなった罪が

消えないように

消えなくなる汚点を

残す前に . . .

自分たちが

何をしているのかを

知って欲しい . . .

2009. 8. 16

『荒野にたたずんで』について

暗い

心の葛藤から

ようやく

薄日がさしてきた

長い戦いだったような

気もするし

今は

もう

思い出に

なろうとしている

人生のなかで

しばし訪れる

試しの時

無気力におそわれ

悲観的な思いが

恐怖をつのらせる

動物達が本能的に

傷を負ったとき

森の片隅で

じっと癒えるのを待つように

忍耐をもって

しばし

たたずみ

その

試しの時期を

やり過ごす

すると

いっそう魂は輝きを増し

さらに

いっそうの信仰心が

心の奥からわきあがる

だから

むやみに

騒ぎ立てては

いけない

そのときに

行動を起こしては

いけない

待つのだ

忍耐を持って

すぎるのだ

神の暖かいまなざしに...

この世の荒野にたたずんで

色々な幻影を見ても

決して心動かしては

ならない

それは

自らの欲望が

姿をかえて現れた

映像にしかすぎないのだから...

.....
.
己身の魔 . . .

自分が引き寄せている

その心根 . . .

迷いが

魔を呼び

自分の弱さが

実行させてしまう . . .

その囁き . . .

甘い言葉 . . .

それを自由と間違わせ

人生は、

一度しかないと

勘違いさせ

その結果

気がついてみれば

そこは、

奈落の底 . . .

取り返しのつかない

後悔は、

踏み止まる勇気に変え

自分を戒めていくしかない・・・

誰もが

弱いところを持っている

そこを突いてくる

誘惑に、どこまで耐えられるか・・・

それが、自分の限界を

垣間見る瞬間でも

あるのかもしれませんが・・・

『魂の故郷へ』について

重い心を引きずって

ベットから這い出し

椅子に腰かける...

カーテンの隙間から

もれる

優しい朝日

陽の光り

床に輝きのしるしを

つけている

朝は変わらず

清々しい

しかし...

僕の心は重々しい...

常に外界の刺激に反応し

心の様相

変化してゆく...

なのに...

朝は変わらず 清々しい

僕の心は

たえず重々しい

地上に生きる人間の

はかない一時の

生の苦々しさ

ああ... 魂の故郷に

よりいっそう思いを向ける

帰るまで...負けはしない...

.....
.

時々・・・

肉体の重みが

煩わしくなる・・・

この世に来た

よろこびを忘れ

自分のしなければ

ならないことを

放置し

何もしたくないと

心が疲労しているとき

生まれる前の

自分の居た場所を

思い出す・・・

何の煩いもなく

好きなことをしていた

嫌な人とは、会わず

自分の研究に熱中していた

けれども

あえてこの世に来たのなら

その事を実践に移しに

生まれてきたのなら

魂の故郷に

思いを馳せ

その成果を

必ず持ち帰るといふ

意思を自分の中で鼓舞して

今を生きる動機とする・・・

帰りを待ちわびている友に

再び会う日まで・・・

『持続』について

この世の

夢のような

ひととき

ひとときの旅にもにて

その旅の目的を忘れ

ただ流されてゆく

平凡に続く日々のなか

一日一日に

淡く輝く真珠を

数珠のように

つなぎあわせてゆくことを

愚かなことだと思うか？

病気の人に

いたわりの気持ちを

持つのは

あたりまえのこと

と思うかもしれないけれど

病気でない人に

優しさをむけることも

おろそかにしては

いけないと思う

平凡に人を思う

持続する気持ち

忍耐という

愛にほかならない

その生き方

非凡な光りに変わってゆく...

.....
.

同情や労りの気持ちも

とても大切な感情です

けれども

体は、健常なれども

心が萎えている人に

その気持ちを発揮するには

意思が必要です

すぐ隣にいる人に

優しくすることは

今は、とても難しい・・・

病気の人には

あんなに優しくなれるのに・・・

とても大切な

いつも一緒にいる人に

その眼差しを向けることが

持続する愛であり

その日常を

結晶にして

真珠の数珠にしていくには

日々の戒めのような

心構えが

必要なかもしれませんね・・・

今日がダメでも

明日こそ

自分の気持ちを整理して

他の人と、隣人と

そばにいる人に

接していきたいものですね・・・

『真価』について

地位も

肩書きも

名誉も

全てを捨てたとき

その人の

真価がとわれる

手と足を縛られ

全ての行動を

封じ込められたとき

その人の評価が現れる

人は

特殊な能力を求めて

自分をどんなにか

高く見せようとしても

それは

死んだ伝説になってしまう

自分の身近なひとに

自分のまわりの人に

こう言われればいい...

『あの人がいてくれてよかった...』

そう言ってくれる人が

たくさんいたのなら

君は

偉大な人物と

後の人達は静かに

君を崇めるだろう

君の真価が

現れるだろう

.....

日常をどう過ごすか

日々の心構えを

如何にしていくのか

その平凡な日々のなか

平凡な心を

積み重ねられるか

諦めて

自分を甘やかすか

そこにこそ

自分の評価が

はっきりと現れる

他人に評価されなくとも

自分には

はっきりとわかる

自分に

嘘をつくことができない

自分が居るから・・・

『人が望むもの』について

朝は

生まれ変わり

新生の時

生命の芳香が

あたりに充満し

こぼれるばかりの

新鮮な初々しさ

清らかさが

この地を満たしている

日は昇り

活動の場へと

仕事を成してゆく

人それぞれの

記念碑を

創りあげる為

夕暮れ

黄昏の時

一日の風景が懐かしく

悔いのない

ひとときに

満足できればしめたもの

しかし

そんな日は

一年のうち

数日あるかないか...

だからこそ

夜

死にきれず

生まれ変わりの

朝を

人は望む...

.....
.

人間の一日

その一日一日が

一生へとつながっていく

朝は、新しく始まり

夕にその日の悔いを

反省し修正する

その繰り返しの中

人間は、少しずつ

成長していく・・・

その歩みは遅い

遅々たる歩みの中で

焦りは禁物

焦れば、その物事を割愛し

手順を無視し

やがては、後戻りできなくなる

ところまで来てしまうから・・・

今日も一日を

丁寧に、過ごしましょうね・・・

『生命の仕事』について

どんな

ささいなことだって

生命の仕事に

かわりはない

どんな

小さいことだって

神様は

決して見逃しはしない

道端に咲く花

ゆれている

静かに

静かに

ゆれている

今にも

誰かに

踏みつぶされそうな

小さな

小さな

花の生命でさえ

今

力強く

花咲かせている

どんな

小さなものたちでさえ

生命の

言葉をもっている

その言葉

誰に聞かれることなくとも

小さな

そして尊い

生命の仕事...やめはしない

.....
.

私たちは、その行為を

誰かに見て、ほめられたいと

願ってしまう・・・

純粹に

それが

私のやるべきことだから

と自然とおこなう行為に

その気持ちは、ない・・・

いつも、そうありたいと思うし

その無私なる気持ちに

あこがれる・・・

淡々と、純粹に

そんな気持ちで

毎日の仕事をこなして

いけたらいいですよね・・・

『決してあきらめない』について

自分の心

ゆらゆら

小舟のように

ゆれている

大きな河の流れ

そのなかに

いくそうの小舟

明日をみつめ

目的地に

たどりつけるよう

祈るように

胸に手をあてている

皆

少し不安そうな

微笑み浮かべながら

僕と同じように

ゆらゆら

ゆれている

皆

確かなもの

心の中に

つかみたいと

大河のなかに

漕ぎ出していった

仲間達

もうすぐそこに

目的地がみえてくる

そんな希望を頼りに

諦めない

不屈の精神

皆の心

ひとつにしてゆく

同じ河を

渡って

ゆこうとする者として...

同志として...

.....

地球には

多くの人々が住んでいます

同じ時代を生きています

環境は、違うかもしれませんが

この時代の同期生であることは

間違いありません・・・

ひとり一人

個別の目標を掲げながら

共通する問題にも

取り組んでいる仲間たち・・・

不安に、

足がすくみ

問題の大きさに

後込みしてしまう・・・

同じ気持ちを

共有している仲間たち

ひとり孤独に

隔絶されたと

ため息をつく前に

仲間もがんばっていると

横を見渡せば

きっと頷いてくれる

友がいる・・・

『飛躍』について

深刻になるなよ

この世の不幸は

君の魂を鍛えるための

機会でしかない

跳び箱を

障害物だと思うかい？

飛んだ後の爽快感

それが

障害物に見えるから

不幸なんだ

重いバーベルを

困難だと思うかい？

何回も何回も持ち上げて

みるみる筋肉がついてゆく

それが

困難なことに思えるから

不幸なんだ

そんなに

深刻になるなよ

不幸は

確かにある

けれども

それは

みんな君を

鍛えてくれている

君の弱い部分を

さらに強く

君の魂を

さらに

飛躍させるための

出来事に

すぎないのだから

.....
.
不幸や困難は

人生の中に

必ず現れ

遭遇します・・・

けれども

それに、埋没してしまうか

それとも踏み台とするかは

本人次第です・・・

自分を鍛えてくれていると

考えるならば

よりいっそうの飛躍に

つながることでしょう・・・

私は、そう考え

自分を鼓舞し

今日もまた

前に進もうと

気力を振り絞って

生きていこうと考えています・・・

『歩き始める前に』 について

なにがなんだか

わからなくなるよ...

誰が真実を

言っているのか

誰を信じていいのか

自分さえ

光りを失い

途方に暮れている

今

夕暮れ時のように

暗闇が

徐々に広がってくる

でも...

その道に

まだ

踏み止どまって

いるのなら

今まで

歩いてきた

その軌跡

確かめつつも

自分の歩いてきた

道に

立ち止まって

いることを

感じつつも

歩きはじめる前に

君が何を思ったのか

それが

試されていると知ればいい

その動機の中にある

不純なものを取り除く為に

神が与えて下さった

ひとつの

チャンスなのかもしれない

僕らの心は

汚れやすいから

その汚れに

すぐになれてしまうから

はじめの白さ

思い出すようにとの

ひとつの

願い

愛のまなざし...

歩き始める前に

君が思ったこと

心の美しさ

思い出してみないか...

夢にたどりつきたいのなら...

.....

夢を描き

それに向かって

生きていこうとした

その最初の思いは

薄れてしまいがちですよ

けれども

時々、その時のことを

思い浮かべて

そして、自分の

今を修正して

正しい道に戻ることは

とても大切なことですよ

いつだって

心は、変化しやすいし

流されやすいし

汚れやすいものですから

心を整理することも

時には、必要ですよね

『タイムアップ』について

人類を蝕むものがある

良識ある

人々の叫び

地球に

こだまする

けれども

その愛に

気づく人は少ない

権力は

その利権を

保持しようとしているだけ

人々は

今までの常識を

打ち破れずにいる

時は刻々と過ぎて行く

けれども

あきらめはしない

最後の一秒まで

タイムアップの

ホイッスルが鳴るまで...

今日も

君の心に

語りかける

『このままじゃいけないんだ!』と

.....
.

真面目に、

正しく生きているものが

損をする

世の中であっては

いけない.....

一生懸命

額に汗している者が

報われる

世の中でなければ

いけない・・・

何が正しくて

何が正しくないのか

それが人間社会の

経済ルールであっては

いけない・・・

経済は一部であって

すべてではないから・・・

人間の幸福に

寄与してこそ

経済や政治であって

一部の人達の

利権や

利益のためにあっては

いけない・・・

人間を

不幸にするもので

あつては

いけない・・・

皆が笑って

暮らせるような

社会に

皆が、おかげさまで・・・と

感謝できるような

信仰心のある

社会でなければ

いけない・・・と

私は、考えています・・・

『引き裂かれる心』について

ビルの谷間

青い空

浮かぶ雲

...

いつも

やり過ごしている風景に

何か違う...

いつもとは違う...

そんな気持ちを抱かせる

季節がある

時折

吹いてくる風に

心

洗われながら

自分の小ささが

身にしみる

自分の中にある

他人の言葉が

自分をこまぎれにしてゆく...

自分の中の

他人の目が

自分を

こなごなにしていって...

自分の中の他人

自分の中の

大勢の目

そんなもの風と共に

洗われてしまえ...と

季節が

そう叫んでいる

.....

自分で自分を

追い込む前に

そんな時は

自分を少し

褒めてみましょう

自分で自分を裁く前に

そんな時は

自分を少し許してみましょう

自分で自分を

見捨てる前に

そんな時は

自分を愛してあげましょう

思いっきり

深く深く

空気を吸い込んで

深呼吸できたなら

今日は

きっといいことがあると

信じて、

一日をはじめてみましょう・・・

思いっきり体を伸ばして・・・

思いっきり心を広げて・・・

『血の汗を流すとも』について

社会のゆがみが

力なき者へ

大きな悲しみとなって

おりてくる...

しかし

それは

力なき者たちの

小さな考えから

発しているところの

悪想念が結集され

巨大なものとなり

それが再び

力なき者たちに

かえってきているに

すぎないのかもしれない

僕らは

今

大きな選択を

つきつけられている

大きな試練を

迎えようとしている

皆で考えなければならない...

血の汗流すとも

僕らの出す

ひとつひとつの答えが

僕らの運命を

創ってゆくのだから...

.....

自分たちの考えの集積が

社会を形作っている

その強大な想念の渦のなか

立ちすくんでばかりは

いられません・・・

私たちが作ったものならば

私たちが消していくしか

ありませんよね

遅いということは

ありません

今から

小さなことから

始めていきませんか

私たちにできることは

たくさんありますよね

その一つから

始めていきませんか

そう思いながら

一日を始めませんか

私は

そのための

選択であり

選択肢は

主から

与えられています

繁栄をとるか

滅亡をとるか

選ぶのは

私たちです